



岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第664集

## 重津部Ⅰ遺跡発掘調査報告書

河川等災害復旧事業二級市道沼の浜青の滝線  
沼の浜地区整備事業関連遺跡発掘調査

重津部Ⅰ遺跡発掘調査報告書

2017

(公財) 岩手県沿岸広域振興局土木部宮古土木センター  
岩手県文化振興事業団

2017

岩手県沿岸広域振興局土木部宮古土木センター  
(公財) 岩手県文化振興事業団



# 重津部Ⅰ遺跡発掘調査報告書

河川等災害復旧事業二級市道沼の浜青の瀧線  
沼の浜地区整備事業関連遺跡発掘調査







## 序

本県には、旧石器時代や縄文時代をはじめとする遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化を理解するのに欠くことができない資料です。同時に、それらは県民のみならず全国民にとっても財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用してゆかなければなりません。

また、未曾有の震災被害からの復興、将来的豊かな県土づくりのためには社会資本の整備が必要です。それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるとこです。当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本書では、宮古市市道整備事業に関連して、平成27年度に発掘調査を実施した重津部1遺跡の成果を報告いたします。調査の結果、縄文時代前期の集落跡や弥生時代、古代の遺物が確認され、当地にも豊かな郷土史を語る貴重な資料が包蔵されていたことを明らかにすことができました。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、発掘調査並びに報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました岩手県沿岸広域振興局土木部宮古土木センター、宮古市教育委員会、岩手県教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成29年3月

公益財團法人 岩手県文化振興事業団

理事長 菅野洋樹



## 例　　言

1. 本報告書は、宮古市田老字重津部地内（字重津部北37ほか）に所在する重津部I遺跡の調査成果を収録したものである。
2. 岩手県遺跡台帳の遺跡番号と遺跡略号は以下の通りである。  
　　重津部I遺跡　　遺跡番号：KG84-1259　　遺跡略号：TROM-15
3. 調査は、河川等災害復旧事業二級市道沼の浜青の流域の浜地区整備事業に伴う緊急発掘調査である。沿岸広域振興局土木部宮古土木センターとの協議を経て、公益財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが委託を受け、受託事業として実施した。
4. 発掘対象面積、調査期間、調査担当者は以下の通りである。  
　　面　積：8,700 m<sup>2</sup>　　期　間：平成27年8月3日～11月20日  
　　担当者：主任文化財専門員　星 雅之・高橋 工  
　　期限付調査員　對馬利彦
5. 室内整理期間、整理担当者は以下の通りである。  
　　平成27年11月1日～平成28年3月31日　担当者：對馬利彦
6. 本報告書は、第1章は沿岸広域振興局土木部宮古土木センターに依頼している。
7. 各種鑑定・分析は次の外部機関に依頼した。  
　　石材鑑定：花崗岩研究会  
　　テフラ同定：（株）火山灰考古学研究所
8. 基準杭打設は、（株）東北プランニングに委託している。
9. 野外調査および本書の作成にあたり、次の方々からご指導・ご助言を賜った（順不同、敬称略）。  
　　菅 常久、千葉正彦、茅野嘉雄、藤原秀樹
10. 野外調査では宮古市田老重津部地区の方々にご協力いただいた。
11. 本遺跡の調査成果は、当センター発行の平成27年度発掘調査報告書（概報）などで公表しているが、遺構数や遺物量など本報告書の内容はそのいずれよりも優先される。
12. 本遺跡から出土した遺物及び調査に関わる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。



## 凡　　例

1 本書における遺構図の凡例は、以下のとおりである。

- (1) 方　位 遺構図・地形図の方位は国土座標に基づく座標北を示す。  
(2) 土　層 基本土層はローマ数字、遺構内の堆積土は算用数字とアルファベット小文字を組み合わせて表記した。土色の観察には「新版標準土色帖」2000年版を使用した。  
(3) 標　高 海拔標高を示す。  
(4) 縮　尺 各挿図中に縮小率を示した。  
(5) 破　線 遺構平面図では、短破線は遺構の推定線を、細破線は柱穴配列を示す。  
短破線 細破線

2 本書における遺物実測図の用例は、以下のとおりである。

- (1) 縮　尺 縮小率は遺物の大きさと性格により適宜決定し、スケールの右に示した。  
(2) 遺物番号 遺跡毎に通し番号を付した。  
(3) 法　量 遺物の法量については、観察表に表記した。推定値は( )、残存値は<>内に示した。

3 本書で使用した記号(略号)やトーンは以下のようである。





## 目 次

I 調査に至る経過.....	1
II 遺跡の概要.....	1
1 遺跡の位置.....	1
2 地理的環境.....	4
3 周辺の遺跡.....	4
III 野外調査・室内整理の方法.....	8
1 野外調査方法.....	8
2 室内整理と報告書作成 .....	9
IV 検出遺構.....	13
1 基本層序.....	13
2 沢跡.....	14
3 竪穴住居.....	14
4 土坑.....	19
5 焼土.....	21
6 柱穴状土坑.....	22
V 出土遺物.....	37
1 土器.....	37
2 土製品.....	39
3 石器.....	40
4 石製品 .....	43
VII 自然科学分析.....	79
重津部Ⅰ遺跡出土火山灰分析(株)火山灰考古学研究所.....	80
VIII 総括.....	85
1 遺構.....	85
2 遺物.....	85
3 まとめ .....	94
報告書抄録.....	135



## 図版目次

第1図 岩手県図・遺跡の位置図	2	第27図 沢跡、遺構外（1）土器	50
第2図 地形分類図	3	第28図 遺構外（2）土器	51
第3図 周辺の遺跡	5	第29図 遺構外（3）土器	52
第4図 遺跡全体図・グリッド図	10	第30図 遺構外（4）土器	53
第5図 中央調査区遺構配置図	11	第31図 遺構外（5）土器	54
第6図 基本層序・沢跡土層断面	12	第32図 遺構外（6）土器	55
第7図 1号住	23	第33図 土製品・3号住剥片石器	56
第8図 2号住	24	第34図 4・5・6号住剥片石器	57
第9図 3号住（1）	25	第35図 2・3号土坑、遺構外（1）剥片石器	58
第10図 3号住（2）	26	第36図 遺構外（2）剥片石器	59
第11図 3号住（3）	27	第37図 遺構外（3）剥片石器	60
第12図 4号住	28	第38図 3号住（1）礫石器	61
第13図 5号住	29	第39図 3号住（2）礫石器	62
第14図 6号住（1）	30	第40図 3号住（3）、4号住（1）礫石器	63
第15図 6号住（2）	31	第41図 3号住（4）、4号住（2）、 5号住（1）礫石器	64
第16図 7号住	32	第42図 5号住（2）、6号住（1）礫石器	65
第17図 1・2・3号土坑	33	第43図 6号住（2）、7号住、2・3・5号土坑、 遺構外（1）礫石器	66
第18図 5・6・9・10号土坑	34	第44図 遺構外（2）礫石器	67
第19図 5・9・10・11・12号焼土	35	第45図 遺構外（3）礫石器	68
第20図 柱穴状土坑	36	第46図 石製品	69
第21図 1・2号住、3号住（1）土器	44	第47図 重津部Ⅰ遺跡出土礫文前期土器	87
第22図 3号住（2）土器	45	第48図 小松I遺跡20号住居跡、24号住居跡、 26・52号住居跡、27号住居跡出土土器	88
第23図 3号住（3）土器	46	第49図 千鶴遺跡第17号堅穴住居跡出土土器	89
第24図 3号住（4）、4・5号住、 6号住（1）土器	47		
第25図 6号住（2）土器	48		
第26図 6号住（3）、7号住、2号土坑、 沢跡土器	49		

## 写真図版目次

写真図版1 着手時状況と遺跡遠景	99	写真図版12 3号住（3）	110
写真図版2 調査地航空写真	100	写真図版13 4号住	111
写真図版3 中央・南調査区トレンチ調査	101	写真図版14 5号住	112
写真図版4 北調査区トレンチ調査	102	写真図版15 6・7号住	113
写真図版5 沢トレンチ調査	103	写真図版16 土坑	114
写真図版6 基本層序（1）	104	写真図版17 焼土・柱穴状土坑	115
写真図版7 基本層序（2）	105	写真図版18 調査風景	116
写真図版8 1号住	106	写真図版19 1・2号住、3号住（1）土器	117
写真図版9 2号住	107	写真図版20 3号住（2）土器	118
写真図版10 3号住（1）	108	写真図版21 3号住（3）、4・5号住、 6号住（1）土器	119
写真図版11 3号住（2）	109		



写真図版22	6号住(2)土器	120	写真図版30	遺構外(3)剥片石器	128
写真図版23	7号住、2号土坑、沢跡、 遺構外(1)土器	121	写真図版31	3号住(1)礫石器	129
写真図版24	遺構外(2)土器	122	写真図版32	3号住(2)、4号住(1)礫石器	130
写真図版25	遺構外(3)土器	123	写真図版33	4号住(2)、3~4号住、5号住、 6号住(1)礫石器	131
写真図版26	遺構外(4)土器・土製品	124	写真図版34	6号住(2)、7号住、 2・3・5号土坑、 遺構外(1)礫石器	132
写真図版27	3号住、4・5号住剥片石器	125	写真図版35	遺構外(2)礫石器	133
写真図版28	3~5・6号住、2・3号土坑、 遺構外(1)剥片石器	126	写真図版36	遺構外(3)礫石器・石製品	134
写真図版29	遺構外(2)剥片石器	127			

## 表 目 次

第1表	周辺の遺跡表	6	第9表	石器観察表(1)	76
第2表	土器観察表(1)	70	第10表	石器観察表(2)	77
第3表	土器観察表(2)	71	第11表	石器観察表(3)	78
第4表	土器観察表(3)	72	第12表	石製品観察表	78
第5表	土器観察表(4)	73	第13表	重津部I遺跡出土土器の厚さ	90
第6表	土器観察表(5)	74	第14表	重津部I遺跡出土石器組成表	91
第7表	土器観察表(6)	75	第15表	縄文前期初頭~ 前葉の石器組成比較表	92
第8表	土製品観察表	76			



## I 調査に至る経過

重津部Ⅰ遺跡は、二級市道沼の浜青の滝線沼の浜地区道路災害復旧事業内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

二級市道沼の浜青の滝線沼の浜地区道路災害復旧事業は、平成23年3月11日の東日本大震災津波により全線が被災した二級市道沼の浜青の滝線を復旧する事業である。当路線は青の滝漁港と小港漁港を結ぶ重要な路線であり、震災後は全線が通行止めとなっているため、漁港間の移動において大きく迂回をする必要があり、地元からは早期復旧を求められている。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、沿岸広域振興局土木部宮古土木センターから平成26年10月14日付宮土セ第568号「埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会は平成26年11月6日から試掘調査を実施し、工事に着手するには重津部Ⅰ遺跡の発掘調査が必要になる旨を平成26年11月11日付教生第1172号「埋蔵文化財の試掘調査（回答）」により沿岸広域振興局土木部宮古土木センターに報告した。

その結果を踏まえて当センターは、岩手県教育委員会の調整を受けて、平成27年7月1日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

岩手県沿岸広域振興局土木部宮古土木センター

## II 遺跡の概要

### 1 遺跡の位置

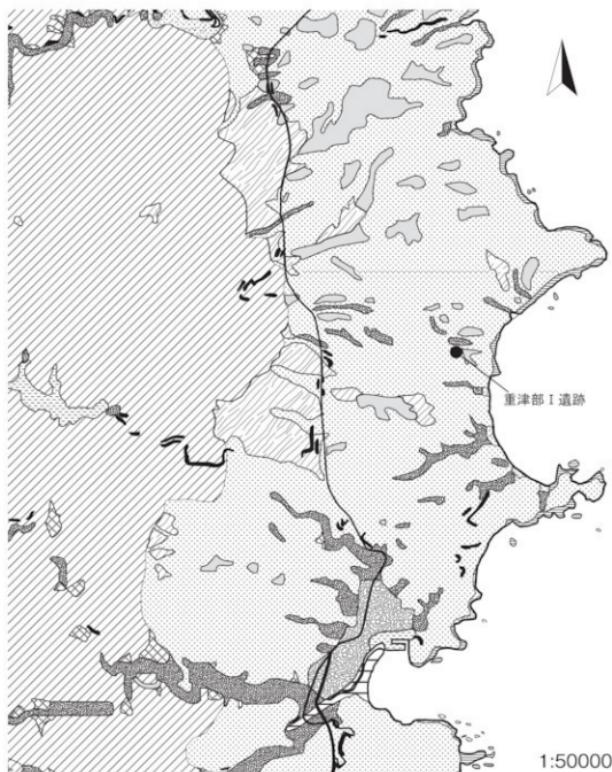
重津部Ⅰ遺跡の所在する宮古市は岩手県の最東端に位置し、東には太平洋、西には北上山地を擁する。平成17年6月6日に田老町、新里村と新設合併、平成22年1月1日に西に隣接していた川井村を編入合併し新制の宮古市となった。現在の面積は1,259.15 km<sup>2</sup>、人口は56,436人（平成28年2月1日現在）である。隣接する自治体は北に下閉伊郡岩泉町、西に盛岡市、南西に遠野市、花巻市、南に上閉伊郡大槌町、下閉伊郡山田町となった。

本遺跡の所在する田老地区は宮古市北部に位置し、宮古市田老字重津部地内に所在する。三陸鉄道北リアス線田老駅の北北東約2kmに、真崎海岸からの直線距離は約2kmである。調査区中央における緯度・経度は、北緯39度45分59秒、東經141度59分02秒である。国土地理院発行の5万分の1地形図「田老」及び、2万5千分の1地形図「田老鉢山」の図幅に属する。

1 遺跡の位置



第1図 岩手県図・遺跡の位置図



中起伏山地	浜及び河原
丘陵地I	磯
谷底段丘I	谷底平野及び氾濫平野
砂礫段丘II	山麓地及び他の斜面地
人口改変地	裸出砂丘
堆錐性扇状地	海岸平野及び三角州

第2図 地形分類図



## 2 地理的環境

本遺跡の所在する田老地区の地形分類図を第2図に示した。大勢として西側が高く、東側に向かって低くなる。図幅内では、大きくは捉えれば山地・丘陵・台地・低地に区分されるが、海岸線に沿って見られる小本丘陵（※第2図の丘陵地I）は、海岸段丘が開析されて形成されたもので、段丘面も残存することで、本来は台地として扱うべき地形のようである。

この小本丘陵は、西側の山地（※第2図の中起伏山地）とは、海岸線にはほぼ平行して走る高度不連続線を持って境し、北は岩泉、南は宮古市までの南北に延びて分布する。そして、東端では比高約100 mの海食崖が形成されている。丘陵頂部にかなり広い段丘面を残存するが、全体的には保存状態が悪く、大半は失われている。従って、古生界や、中生界の堆積岩、花崗岩類からなる基盤岩の露出地帯となっている。

ここで本地域の段丘区分に触ると、段丘面高度180～240 mが浜持段丘、同100～160 mを田老段丘、同70～90 mを古里段丘に分類されており、各段丘面高度は南方方向に向かい低下する傾向が指摘されている。遺跡周辺は、田老段丘に相当すると考えられるが、一段低い古里段丘との区別は明瞭ではなく、従って一括して上位段丘とされる。

本調査区の周辺は、谷と丘陵が複雑に入り組んだ地形で、約700 m北には青野滝川が東流し、太平洋に注いでいる。

調査地は概ね東方に開く3条の谷を跨いで立地しており、北側の谷Aにかかる部分を北調査区、中央の谷Bにかかる部分を中央調査区、南の谷Cの南向き斜面部分を南調査区とした。標高は北調査区の最も高い箇所で約113 m、同調査区の最も低い箇所で約91 mである。

## 3 周辺の遺跡

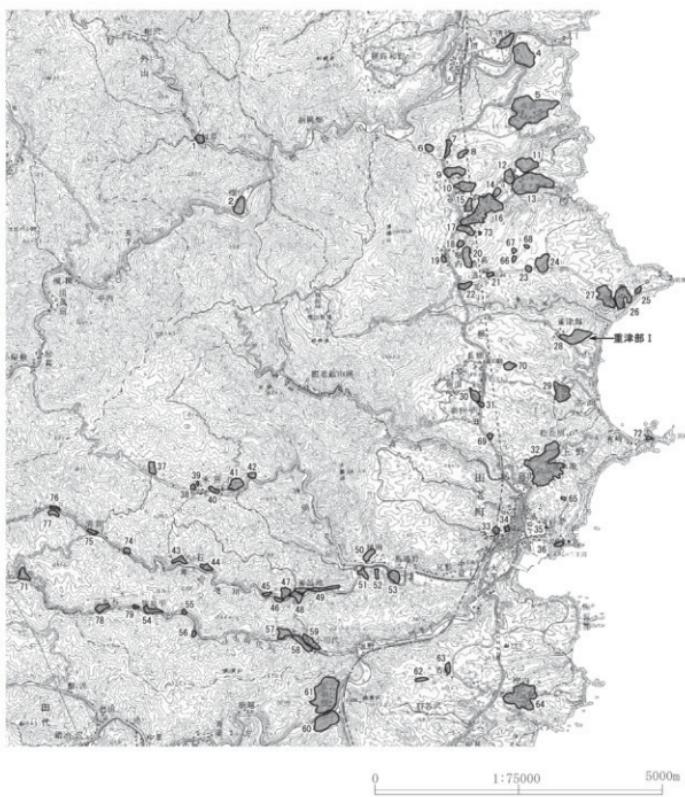
昭和36年から昭和49年にかけて行われた分布調査の成果に基づいて、田老地区では平成18年度時点での63箇所の遺跡が所在していた。その後、平成18年から行われた宮古市教育委員会による分布調査や、三陸沿岸道路建設に伴う試掘調査によって遺跡の新規発見や統合・範囲変更が行われた。平成27年度の岩手県遺跡情報検索システムによると、田老地区的遺跡は81箇所である。

第3図には本遺跡を中心図幅中の範囲に分布する遺跡を図示した。

田老地区においては、近年まで開発等に伴う大規模な発掘調査が行われた事例が少なく、内容が明らかになっている遺跡が少なかった。その中で比較的大規模な調査事例として、昭和56年度に行われた田老大規模年金保養基地（現在のグリーンビア三陸みやこ）建設に伴う発掘調査がある。この調査では縄文時代早期～前期の土器、石器が出土しているものの、これに伴う遺構は確認されていない。なお、この発掘調査の成果は『小堀内I遺跡発掘調査報告書』（岩手埋文：1983）として刊行されているが、現在はそのような名前で岩手県遺跡台帳に記載されている遺跡はない。報告書に記載された遺跡の位置と現在の遺跡分布図を照合すると、向新田II遺跡付近と思われる。

平成23年から平成25年にかけて、宮古市教育委員会による櫻内I遺跡の発掘調査が行われた。櫻内I遺跡は平成18年の分布調査により櫻内里遺跡と櫻内沖遺跡が統合された遺跡である。平成23年に2次・3次・4次調査、平成24年に5次調査、平成25年に6次調査が行われた。通年の調査で縄文時代中期の堅穴住居跡と遺物（おおよそ大木8a式～10式）が出土した。

近年では、三陸沿岸道路建設に伴う緊急発掘調査として、乙部遺跡（平成25・27年度）、青野滝北



第3図 周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡表

I・II・III遺跡（平成26年度）、向新田III遺跡（平成26年度）、平成27年度には越田松長根I遺跡、重津部I遺跡、乙部野II遺跡の発掘調査が相次いで実施された。これらの調査では、主に縄文時代前期～後期の土器・石器が出土した。

乙部遺跡は、縄文前期前葉大木2a式を主体とした遺跡で、岩手県教育委員会による平成27年度の調査では堅穴住居跡などの遺構に加え、比較的多くの遺物も出土している。遺構の上部には十和田中撰テフラ（To-Cu）も認められている。

青野滝北I・II・III遺跡は、青野滝川の北岸の丘陵（海岸段丘）が同川により浸食され形成された谷地形に立地する。3遺跡合せて8,500m<sup>2</sup>が調査され、縄文中期後葉～末葉の堅穴住居跡が18棟検出（※Iが15棟、IIが1棟、IIIが2棟）された。加えて、早期中葉や後期初頭～前葉の土器も出土している。

向新田III遺跡は、縄文前期前葉4棟と縄文晩期末葉～弥生前期11棟の堅穴住居跡が検出されている。出土土器は、縄文早期後半、縄文中期の円筒上層式をはじめ、比較的多岐に亘る。

乙部野II遺跡では、縄文後期前半を中心に、縄文前期前葉及び弥生時代前期の堅穴住居跡が多く検出された。特に、縄文後期初頭～前葉期については、本県屈指の住居数である（※現在整理中なことから詳細な棟数の記載は避けることとするが、縄文後期初頭～前葉だけで60棟前後をみる）。

最後に、東日本大震災復興道路建設に関連して近年実施された発掘調査により、田老地区には新知見を発信する遺跡事例が相次いだ。特に、縄文前期前葉、縄文中期後葉～後期前葉、弥生前期においては、複数遺跡から堅穴住居跡が検出されており、上記時期において小本丘陵を舞台とする本地域全体的に、人的活動が展開されたことが明らかになった。特記事項の一つである弥生時代にふれるなら、過去に行われた田老地区的分布調査で水沢I遺跡と向井新田XV遺跡から弥生土器の破片は採取されていたが、集落跡が確認された事例は小堀内I遺跡の調査に先立って行われた昭和54年の試掘調査のみの状況であった。向新田III遺跡や乙部野II遺跡からまとめた資料を得られたことは、当地域における弥生時代の様相を解明する手掛かりに繋がると評価される。



### III 野外調査・室内整理の方法

#### 1 野外調査方法

今回調査の調査地は、岩手県作成の「二級市道沼の浜青の滝線 宮古市田老沼の浜地区」計画平面図に基づき、路線計画範囲内に調査区を設定した。調査区は、南北約250m、東西約110mにわたり、面積は8700m<sup>2</sup>である（第4図）。現況は基本的に山林で、一部が昆布漁の作業場、道路、小川であった。

調査区内には3本の谷がかかっており、本遺跡の地形形成に大きく影響する。北から谷A・谷B・谷Cと呼称する。谷Aは西方の重津部集落方向から南東に延びてきたものが調査地付近で屈曲して北西方向へ転じ、そのまま青野滝川に開く。谷Bは調査地のすぐ西側に発し、真東方向に延びて太平洋の海蝕崖に開く。谷Cは調査地のすぐ南側に発し、ほぼ直線的に南南西方向へ延び、乙部野集落の北を東に延びる深谷に開く。

調査区は前述のように広範囲であったので、谷Aに面する範囲を北調査区、中央の谷Bの北斜面～谷底～南斜面下部の範囲を中央調査区、それ以南で、谷Cに面する部分を南調査区として調査を行うこととした。

調査地内各地点は、大・小メッシュグリッドを設定して呼称した（第4図）。世界測地系の基準点測量成果により、西調査区の北西、X = -25140m、Y = 98520mを架空の原点とし、原点を通る座標正東西線（X軸）をIライン、同南北線（Y軸）をAラインとした。Iラインから南方向へ、40m間隔でII・III…の順に、Aラインから東へも同様にB・C・D…の順で基準線を設けた。東西・南北基準線の交点は各ラインの名称を用いて呼び（A I・B IIなど）、交点の南東側の40m四方を大グリッドとし、その名称は、北西の基準線交点の名称をもって代表した（A I・B IIグリッドなど）。大グリッド内は、大グリッド基準線を起点に4m間隔で、東方向にa・b・c…の順に基準線（Y軸）を設け、南方向にも1・2・3…の順に基準線（X軸）を設け、これらで区画される4m四方の小グリッドを設定した。各小グリッドの呼称は、大グリッドのそれに準じ、大グリッド名称に続けて、4m方眼の北西側基準線交点の名称をもって代表した（A I 7kグリッドなど）。

調査開始と共に草木などの雑物撤去を行い、北・中央調査区は調査範囲内に樹木が残った状態であったので、これを伐採し、枝木の整理を行った。伐採・枝木整理は調査と並行して行い、8月中旬には終了した。雑物撤去に続いて各所に試掘トレンチを設定し、人力で掘削して土層の堆積状況及び遺構検出面の確認に努めた。その際のトレンチ箇所やトレンチNoは第4図に示した（※第4図の等高線は現況地形段階のものであるが、基準点は表土除去段階で設置したことから、基準点の標高値とは矛盾するものがあることをお断りしておく）。その結果、遺跡の基本層序はI～VI層に分層可能（詳細はIV-1 基本層序参照）と判断され、そのうち、主に遺物を包含するのはII・III層であることが把握できた。また、南調査区では、トレンチ調査で遺物がほとんど出土せず、遺構も確認されなかった。このため、岩手県教育委員会生涯学習部文化課埋蔵文化財担当職員の現地立会により、南調査区は8月21日に部分終了確認を仰ぎ、調査を終了とし、残土置き場とした。その際に北調査区は、谷底の平場にトレンチ調査を実施し、その結果次第で調査方針を決定することとした。9月中旬に同区のトレンチ調査を終了し、遺構・遺物ともに未確認であったことから、調査終了となった。

本調査対象とした中央調査区では、試掘トレンチの所見によって、II層以上は重機を用いて掘削することが可能と判断し、地表面からII層下面までを重機によって掘り下げた。その後の掘削作業は基

本的に人力により、遺物包含密度の低い箇所はスコップ、高い箇所は移植ヘラを用いて掘り下げ、同時に遺物の捕集に努めた。層理面においては、鋤籠・両刃鎌・移植ヘラなどを用いて遺構検出を行った。検出された遺構は、遺物の出土に注意しながら、移植ヘラなどで慎重に掘削した。遺構の規模に応じて4分法と2分法を使い分け、適宜にベルトを設定して土層観察を行いながら進めた。また、遺構の範囲や遺構間の重複関係の把握が困難な場合は、サブトレンチ掘削による地層の観察を行って対処した。

遺構の平面図作成は、CUBE I C 社製遺構実測ソフト「遺構くん」を用いて光波トランシットによる測量を行った。遺構および地層断面図の作成は、オートレベルを用いた手測りを行った。これらの測量の基準点は、前述の世界測地系基準点である。現場の写真撮影については、キャノン EOS 50 D（デジタルカメラ）を中心に使用した。

必要な記録保存が終了した平成27年11月12日に、岩手県教育委員会生涯学習文化課の終了確認を仰ぎ、若干の補足調査の後、同11月20日に機材等の撤収作業を行って全作業を終了した。

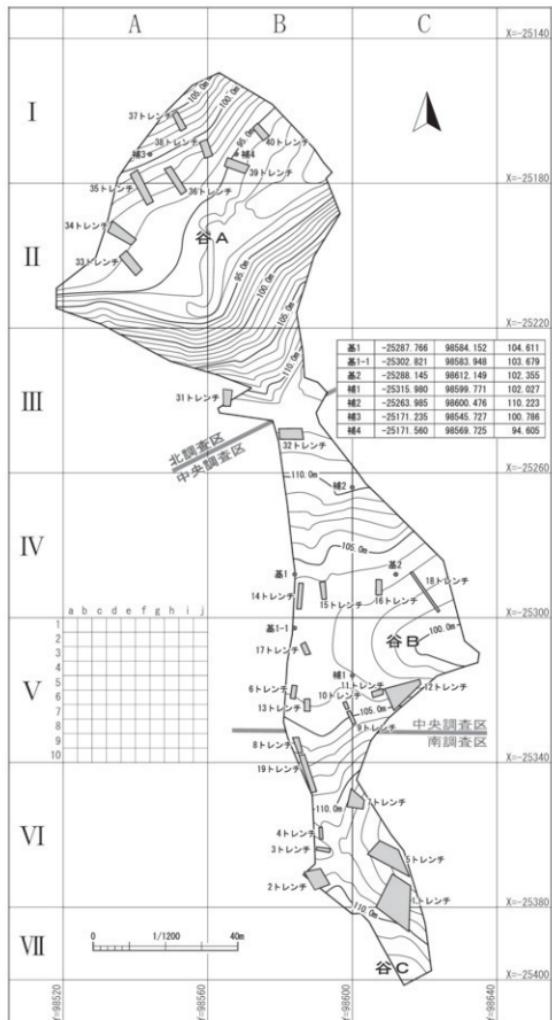
## 2 室内整理と報告書作成

本書の原稿執筆・表作成はⅡ章を佐々木が、それ以外は星・高橋が分担した。図版の編集作業は對馬が担当し、全体の編集は星が行った。

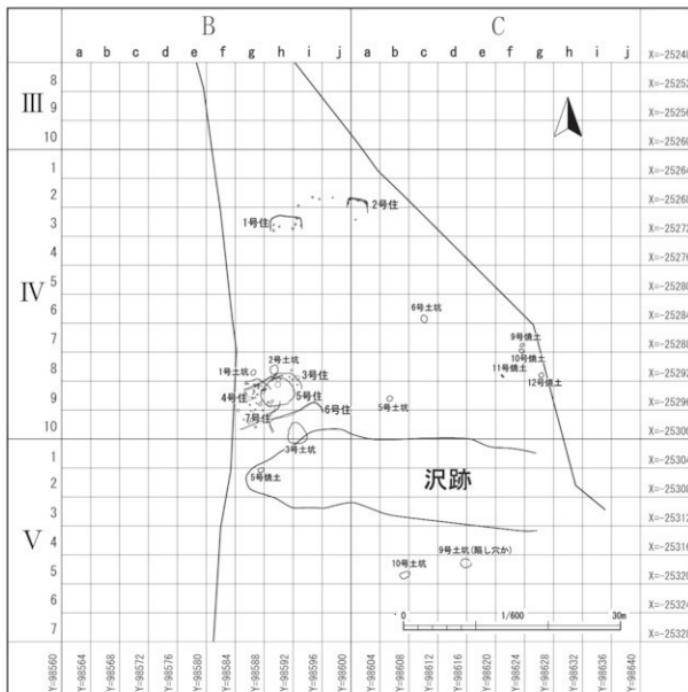
遺構図版は、電子平板のデータで作成した平面図を整理・修正した第2原図を作成し、現場で手測りにより作成した断面図と合わせてデジタルトレースして作成した。図版縮尺は、1/30、1/50、1/60など、遺構の性格に応じたものを採用した。

遺物の整理について、土器・陶磁器類は水洗後に袋単位で通し番号を付けて重量の計測と登録作業を行った。その際に袋に付けた通し番号は、注記番号として採用した。選択基準は、①残存率の良いもの、②遺構の時期推定になる層位的資料、③口縁部資料、などの順に優先して選択し、仮番号を付け登録した後、掲載遺物として更に選択した。土製品・石器は、水洗後、仮番号付け、掲載物の選択を行った後、掲載番号を付した。遺物図版は、手トレースによって作成し、土器類1/3、土製品1/2、剥片石器2/3、礫石器・石製品1/3で掲載した。石器類で磨痕や敲打痕が観察されるものはスクリーントーンで明示した。遺構写真図版は、本文や遺構図版と同様の掲載順とした。

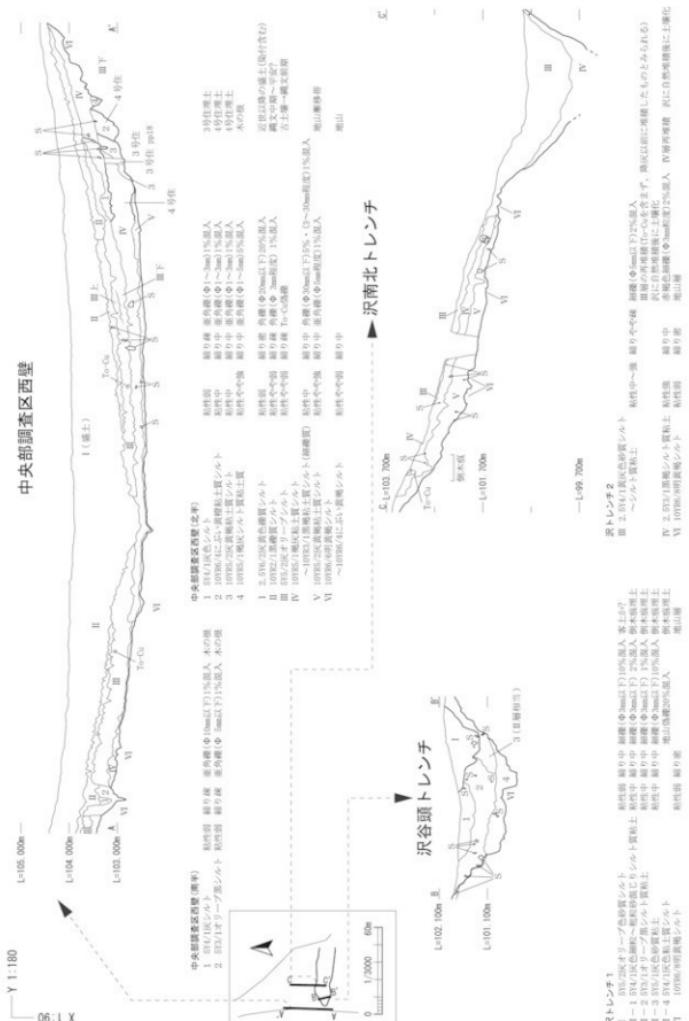
報告書の編集は、編集ソフト Indesign を用いて行い、遺物実測図の一部を台紙貼りで入稿した。他はすべてデジタルデータで入稿し、印刷・製本を専門業者に委託して行った。



第4図 遺跡全体図・グリッド図



第5図 中央調査区遺構配置図



第6図 基本層序・汎跡土層断面



## IV 検出遺構

重津部Ⅰ遺跡で検出された遺構は、堅穴住居跡7棟、土坑7基、焼土遺構5基、柱穴状土坑5個である。遺構の時期は縄文時代前期のものが主体で、土坑には一部弥生時代のものもある。これらの遺構はすべて中央調査区で発見され、沢跡（谷B※II章を参照）をはさんで、谷の南向き斜面と北向き斜面の下方（沢跡寄り）に立地していた。III章で述べたとおり、調査区内には3本の谷がかかっており、北から谷A・谷B・谷Cと呼称する。北調査区内には谷Aの谷底と北斜面（南向き）と南斜面がかかっており、谷底の標高は92m、北斜面の最高標高は約103m、南斜面の最高地点は約112mで、その南は谷Bとなる。中央調査区内には谷Bの北斜面と谷底、南斜面がかかっており、谷底の標高は約100m、南斜面の最高所は115mで、その南は谷Cとなる。南調査区には谷Bの南斜面と谷Cの谷頭部がかかっている。

### 1 基本層序

表土層から地山層までを基本的に以下の6層準に分層した（第6図、写真図版6・7）。

I層：盛土層や腐葉土などからなる現地表構成層である。中央調査区では、2.5Y6/2灰黄色礫質シルトからなる盛土層、それ以外では現山林中に形成されたしまりの悪い腐葉土層であった。層厚は、中央調査区谷底部で最も厚く、137cmを測る。それ以外では20cm程度であった。盛土は、おもに中央調査区の南向き斜面の上方を削て平地を造成するとともに、谷底に盛土をしたものとみられる。本層には肥前磁器の染付片が含まれ、形成された年代は近世以降に下る。

II層：10YR2/1黒色シルトからなる古土壤で、いわゆる黒ボク層である。調査地ほぼ全域に分布し、層厚は15cm前後であった。下位のIII層は縄文時代前期の地層であるので、本層の年代の上限は概ね縄文時代中期に求められ、下限については、沢内に堆積した本層中から平安時代の土器が出土していることから、古代に求められる。

III層：5Y5/2灰オリーブ色シルト質からなる古土壤で、中央調査区に顯著に分布していた。分布域では平均して15cmの層厚をもち、中央調査区の谷底付近では最大で40cmほどに堆積していた。土色は暗色を呈するが、上・下位のIV・V層ほどではなく、判別は比較的容易であった。層中には中摺火山灰（本稿では以後To-Cu テフラと呼ぶ）の偽縞が混じることから縄文時代前期の地層である。中央調査区ではTo-Cu テフラの偽縞（10YR6/8明黄褐色テフラ）が濃集する箇所があり、こうした部分については、テフラを含まないIII層上部と、テフラを含むIII層下部とに分離し、分離ができない箇所についてはIII層として括して扱った。

IV層：10YR5/1褐灰色粘土質シルト～10YR3/1黒褐色シルトからなる古土壤である。拳大の自然縞が多く含む特徴がある。中央調査区の最下部、沢に近い箇所を中心に分布しており、層厚は最大で20cmほどであった。III層とともに、中央調査区の沢を埋積する主要な堆積物を構成する。縄文前期の土器を含み、尚且つTo-Cu テフラより古い地層である。

V層：10YR5/2灰褐色粘土質シルトからなり、地山層上部が草木根の擾乱を受けた部分である。調査地全域に分布しており、層厚は最大で15cmほどであった。

VI層：10YR6/6明黄褐色～10YR6/4にぶい黄褐色シルトからなる地山層である。



## 2 沢 跡 (第5・6図、写真図版5)

**[位置・検出状況]** 中央調査区の最も標高が低い箇所で沢地形が検出された。谷Bと呼称した谷の谷底部分に当る。中央調査区の地形は北・西・南方へはいずれも上り勾配の斜面になっており、東方にのみ開けている。3方から雨水が流入し、東方へ流れ下ることによってできた浸食谷（沢）である。谷頭付近と南北方向のBV・CV大グリッド境界線上にトレンチを設定し（以後、谷頭トレンチと南北トレンチと呼称）、堆積状況と遺物の包含状況を調査した。

**[平面形・規模]** 谷頭はBV g2グリッドに求められ、ここから真東方向へ延びる。現地形を参考にすれば、谷Bはそのまま直線的に東へ延びて海蝕崖の上方に開くとみられる。検出した沢の幅は10m前後で、深さは、南北トレンチでは検出面以下（以下同）21mまで掘削したが底に達しなかった。谷頭はほぼ直角に近く急激に落ち込み、約1mの深さで沢底に達した。

**[堆積状況]** 両トレンチの間では堆積状況に大きな違いがみられた。南北トレンチでは、上位に黄褐色砂質シルト～シルト質粘土（図中のⅢ層）が堆積し、下位には黒褐色シルト質粘土（図中のⅣ層）が堆積していた。両層とも土壌化が著しかったが、いずれも極細粒砂～シルト質粘土からなるラミナの薄層がみとめられ、陸上部から土壤が流入し、その後、沢の中で古土壤が形成されたものと考えられた。層相から、上位層は陸上部のⅢ層に、下位層は同Ⅳ層に起源するものと判断された。一方、谷頭トレンチでは、上位に黒色を基調とするシルト層（図中の1～3層）が堆積し、下位に地山層偽礫を多く含む明黄褐色シルト層（図中の4層）があつて、その下が地山層であった。4層に含まれる地山層の偽礫にはおよそ人力では形成しない大きさのものが含まれており、倒木による地層の攪乱がその原因と考えられた。沢岸の斜面にも部分的にオーバーハングした箇所がみられ、これも樹木根による変形とみられた。上位の黑色シルトは、層相からみて陸上部のⅡ層に酷似しており、倒木によつてできた大きな堆みにⅡ層が流入して埋積したものと考えられた。つまり、谷頭付近でも南北トレンチと同様にⅢ・Ⅳ層の堆積によって沢がほぼ埋まった状態で樹木が繁茂し、これらが倒れたり腐朽したりしてできた跡にⅡ層が最堆積したと考えられるのである。

**[遺物]** 沢内に堆積したⅡ層からは縄文前期前葉の土器から古代の土師器まで、時期幅が広く出土した。特記事項として、絶対量は少ないが弥生時代後期の土器が特徴的に出土している。遺物は弥生時代や平安時代の土器を優先して掲載した。

**[時期]** 縄文時代前期に埋没した後、古代に倒木などによる変形を受けたものである。

## 3 壁穴住居

### 1号住（第7図、写真図版8）

**[位置・検出状況]** 1号住の西約10m、B IV h3グリッドに位置する。I層を除去した後、VI層の上面で検出した。遺構上面と斜面下側に当る住居の南側は、土壤の流出などによって失われている。

**[平面形・規模]** 残存部分の平面形は概ね方形を呈し、南部を失っている。残存規模は、東西4.40m、南北1.96mである。

**[周壁・床面]** 壁穴の周壁は北辺と東・西の一部で検出された。立ち上り高は、最も良好に遺存する北辺で10cmを測る。床面は地山層を平坦に加工して利用しており、貼床などは観察されなかった。

**[堆積土]** 壁穴内の埋土は10YR4/6褐色粘土であった。

【炉】床面上で炉は検出されなかった。

【柱穴】堅穴内に7基が検出された(PP 1~7)。いずれも直径15~30cm、深さも10~20cmで、壁沿いのPP 1~4は主柱穴の可能性がある。

【遺物】(第21図1写真図版19)土器20gが出土した。

【掲載遺物】そのうち土器(1)を掲載した。

【時期】出土遺物などから、本遺構の年代は縄文時代前期前葉と推定される。

#### 2号住(第8図、写真図版9)

【位置・検出状況】中央調査区の南向き斜面の上方、C IV a2グリッドに位置する。I層を除去した後、VI層の上面で検出した。遺構上面と斜面下側に当る住居の南側は、土壤の流出などによって失われている。

【平面形・規模】残存部分の平面形は整った方形を呈し、南部を失っている。残存規模は、東西285m、南北152mである。

【周壁・床面】堅穴の壁は北辺と東・西の一部で検出された。周壁の立ち上り高は、最も良好に遺存する北辺で16cmを測る。床面は地山層を平坦に加工して利用しており、貼床などは観察されなかった。

【堆積土】堅穴内の埋土の遺存状況は全体的に不良で、北壁側に黒褐色シルトが薄く残存するのみである。地山層起源の偽礫の混入具合から人為堆積層の可能性がある。

【炉】床面上で炉は検出されなかった。

【柱穴】堅穴の北辺沿いに3基、西辺沿いに1基が検出された(PP 1~4)。いずれも直径30cm前後、深さ20cm以上があり、主柱穴である。北辺中央のPP 3に対向する位置にはPP 5が検出された。これが本住跡に伴うものとみれば、復元南北長約3mを得ることができ、約3m四方の堅穴住居が復元できる。

【遺物】(第21図2~5、写真図版19)土器153g、剥片石器3点(石錐2点、コア1点)、礫石器1点(礫片スクレイパー)、チップ・フレーク673gが出土した。

【掲載遺物】このうち土器(2~5)を掲載した。

【時期】出土遺物から、本遺構の年代は縄文時代前期前葉と推定される。

#### 3号住(第9~11図、写真図版10~12)

【位置・検出状況】中央調査区の南向き斜面の下方、B IV g9~h9グリッドに位置し、調査区西壁にかかって検出された。To-Cu テフラ偽縁を含むⅢ層を除去後、IV層をベースにして検出された。遺構は調査区外の西へ続く。

【平面形・規模】長楕円形を呈するとみられ、検出部分の規模は、長軸方向10.26m、短軸方向4.80mである。長軸の方位は南西~北東方向で、斜面の等高線に平行している。いわゆるロングハウスとみてよい。

【周壁・床面】堅穴の周壁は北側と東側の一部で検出され、南側は土壤流出のため、ほとんど残っていないかった。立ち上り高は、最も良好に遺存する北側で36cmを測る。床面は地山層を平坦に加工して利用しており、貼床などは観察されなかった。

【堆積土】堅穴内の埋土もほとんどが流失していたが、10YR3/1 黒褐色シルト(図中の1層)の上位にⅢ層が堆積していた。

【炉】住居内で7か所の焼土が確認された。このうち、焼土1~3とは北側の堅穴に平行して並び、



### 3 壁穴住居

焼土6～7は壁穴中央から南側に散在していた。また、壁穴外で検出された焼土4も壁穴北側に並ぶ位置にあり、後述するように住居を東へ増築した際に住居内に営まれた1基とみられる。これらの焼土は、住居床面に礎かれた地床炉で、平面形が径30～80cmの円形ないし不整な楕円形を呈し、厚さ2～12cmで床面が焼けて赤変していた。

**[柱穴]** おもに周壁沿いに巡るかたちでPP1～18が検出された。周壁から離れたPP15・16は小規模で主柱穴とはみられない。周壁沿いの柱穴は、直径20cm、深さ20～30cm程度のものが多く、探し出で大きなものはない。住居内側に傾斜しているものではなく、柱は直立していたものとみられる。柱上部で朽材を受け、そこに壁穴外から垂木をかけて屋根を支えたものであろう。PP1は壁穴外にあり、住居東部を拡張した際の柱穴とみられるが、これに連続する柱穴および拡張後の周壁は見出せなかつた。

**[遺物]** (第21～24図6～65第33図301～309第38～40図351～369第46図411、写真図版19～21・27・31～32・36) 土器8,039g、剥片石器28点(石鏃2点、石匙4点、スクレイバー8点、力持型スクレイバー12点、Uフレ2点)、礎石器221点(磨製石斧12点、特殊磨石5点、特殊磨石片2点、磨石4点、磨石片150点、敲磨器5点、敲石8点、敲石片8点、石皿2点、台石2点、裸片スクレイバー7点、円礎1点、裸器15点)、石製品1点(軽石製石製品)、チップ・フレーク4336gが出土した。

**[掲載遺物]** そのうち土器(6～65)、石器(301～309・351～369)、石製品(411)を掲載した。

**[時期]** 出土遺物から、本遺構の年代は绳文時代前期前葉大木2b式期と判断される。加えて、To-Cuテフラ降下期より古い。

**[その他]** 大木2b式と白座式の共伴例となる資料が得られた。

#### 4号住(第12図、写真図版13)

**[位置・検出状況]** 3号住の下位、西側に重複して検出された。調査区西壁にかかっており、遺構の西端は調査区外に続く。本遺構の南部は7号住を切っており、層位的に同住居より新しい。

**[平面形・規模]** ほぼ正東西方位をとる長楕円形を呈するとみられ、検出部分の規模は、長軸方向285m、短軸方向3.33mである。長軸の方は斜面の等高線に平行している。これもいわゆるロングハウスで、その東端を捉えたとみてよいであろう。

**[壁・床面]** 壁穴の壁は北側の一部で検出され、南側ほかは土壤流出のため、残っていないかった。周壁の立ち上り高は、最も良好に遺存する部分で25cmを測る。床面は地山層を平坦に加工して利用しており、貼床などは観察されなかった。

**[堆積土]** 壁穴内の埋土は、10YR4/2灰黄褐色シルト(図中の1層)、10YR6/6明黄褐色粘土質シルト(同2層)、10YR3/1黒褐色極細粒砂(同3層)であった。いずれも偶発構造がみられ、人為的に埋められたものと考えられた。

**[炉]** 検出した範囲内では炉はみとめられなかった。

**[柱穴]** 床面上と周壁の一部に36基の柱穴が検出された(PP20～56)。平面形は円形で、直径は20～30cm、深さ10～20cmほどのものが多く、斜めに掘られたものはなかった。これらには弧状の配列を複数見出すことができた。つまり、北西から、PP20・21・22・23・27・36・40・52・48が外側を巡り、内側に、PP53・29・31・38・41・44が巡る。さらにPP53から外側へ派生して、PP30・37・43が中間を巡る。こうした弧状の配列は、この部分が住居の妻側に当り、それが複数見られるることは少なくとも2回の増築があったことを示している。

【遺物】(第24図66~69・第34図310~313・第40~41図370~374、写真図版21・27・32~33)土器654g、剥片石器6点(石匙2点、力持型スクレイバー4点)、礫石器42点(磨製石斧3点、磨石1点、磨石片28点、敲磨器3点、敲石片1点、台石2点、礫片スクレイバー1点、礫器3点)、チップ・フレーク47.2gが出土した。

【掲載遺物】そのうち土器(66~69)、石器(310~313・370~374)を掲載した。

【時期】出土遺物からは縄文時代前期前葉大木2a式である。重複遺構との関係からは3号住より古く、加えてTo-Cuテフラ降下期より古い。

【その他】3・4号住出土遺物として、(第41図375、写真図版33)土器156g、剥片石器1点(力持型スクレイバー)、礫石器10点(特殊磨石1点、磨石片7点、敲石1点、礫器1点)、チップ・フレーク32.9gを捕集し、そのうち石器(375)を掲載している。

5号住(第13図、写真図版14)

【位置・検出状況】3号住の東側でV層をベースとして検出された。3・4号住に切られており、層位的に両住居より古い。

【平面形・規模】平面形は不整な円形を呈し、東側は遺存していなかった。残存部分の規模は、東西3.70m、南北3.75mである。

【壁・床面】堅穴の壁は東側以外で検出され、周壁の立ち上り高は、最も良好に遺存する北側で45cmを測る。床面は地山層を平坦に加工して利用しており、貼床などは観察されなかった。

【堆積土】堅穴内の埋土は、上位と下位に分層される(図10)。埋土上位の図中IV層は、亜角礫を含む褐灰色シルトが堆積する。この1層は基本層序IV層に相当し、To-Cuテフラ降下期より確実に古い土層である。埋土下位の図中3・4層は、にぶい黄褐色粘土質シルトで基本層序V層に相当する。人為的に埋められた可能性はあるが、明確には特定できなかった。

【炉】検出した範囲内では炉はみとめられなかった。

【柱穴】床面上と周壁の一部に12基の柱穴が検出された(PP1~12)。PP1はほぼ中央にあって、平面形は円形、直径約30cm、深さ28cmを測り、他よりやや大型で、中央柱穴とみられる。他はほぼ周壁に沿って巡り、規模は小規模で、直径20cm程度、深さ15cmほどであった。斜めに掘られたものはない。

【遺物】(第24図70~77・第34図314・第41~42図376~380、写真図版21・27・33)土器994g、剥片石器3点(力持型スクレイバー2点、Uフレーク1点)、礫石器43点(磨製石斧3点、特殊磨石片1点、磨石2点、磨石片25点、敲磨器1点、敲石1点、敲石片5点、礫器3点、礫片スクレイバー1点、板状礫1点)、チップ・フレーク20.4gが出土した。

【掲載遺物】そのうち土器(70~77)、石器(314・376~380)を掲載した。

【時期】出土遺物からは縄文時代前期前葉大木1式である。遺構の重複関係からは3・4号住より古い。これらの状況から前期前葉の中でも前半期である大木1式期と推定される。

【その他】3・5号住出土として、土器800g、礫石器7点(磨石1点、磨石片1点、敲磨器1点、敲石1点、敲石片1点、礫器1点、礫片スクレイバー1点)を捕集している。さらに、3~5号住出土として、(第24図78~80・第34図315~316・第46図412~414、写真図版21・28・36)土器6,470g(袋27未計量)、剥片石器9点(石鏃2点、スクレイバー2点、コア1点、力持型スクレイバー3点、Uフレーク1点)、礫石器100点(磨製石斧6点、磨石13点、磨石片57点、敲磨器2点、敲石5点、敲石片2点、石皿片1点、台石1点、礫器4点、礫片スクレイバー8点、円礫1点)、石製



### 3 穴住居

品3点（石刀2点、石棒1点）、チップ・フレーク 1266 g を捕集し、そのうち、土器（78～80）、石器（315～316）、石製品（412～414）を掲載している。

#### 6号住（第14・15図、写真図版15）

【位置・検出状況】5号住の南、BIVh 10グリッド～BVj 1グリッドに位置する。Ⅲ層を除去し、Ⅳ層の上面で検出された。本遺構の北西側で7号住を切っていた。

【平面形・規模】斜面下方に当る南側を失い、北側が遺存していた。平面形は隅丸の長方形とみられ、南北～北東方向に長軸の方位をとる。現存部分は長軸方向で7.68 m、短軸方向で1.80 mを測る。

【周壁・床面】堅穴は北半部が検出され、周壁の立ち上り高は最大で15 cmほどであった。床面はV層および地山層を平坦に加工したもので、貼床は見られなかった。

【堆積土】堅穴内の埋土は、10YR4/3に似た黄褐色シルト（図中の1層）、10YR2/3黒褐色シルト（図中の2層）、10YR3/3暗褐色～10YR 2/3黒褐色シルト（図中の3層）であった。

【炉・柱穴】検出した範囲内では炉はみとめられなかった。堅穴の周囲では14個の小ピットが検出された。いずれも直径15～45 cm程度の円形で、深さは15 cmほどのものが多い。PPI2～14以外は堅穴内の位置に当り、本住居跡の柱穴である可能性がある。PP 1、PP 2～4、PP 9～11などは隅柱であるのかもしれない。

【遺物】（第24～26図81～122、第34図317～321、第42～43図381～389、第46図415、写真図版21～22・28・33～34・36）土器8,151 g、剥片石器21点（石鏃5点、スクレイバー1点、力持型スクレイバー13点、Uフレ2点）、礫石器105点（磨製石斧5点、特殊磨石4点、特殊磨石片1点、磨石11点、磨石片57点、敲磨器9点、敲石5点、敲石片1点、石皿1点、礫器7点、礫片スクレイバー3点、円礫1点）、石製品1点（石棒）、チップ・フレーク 127.9 g が出土した。

【掲載遺物】そのうち土器（81～122）、石器（317～321・381～389）、石製品（415）を掲載した。

【時期】出土遺物から、本遺構の年代は縄文時代前期前葉である。

#### 7号住（第16図、写真図版15）

【位置・検出状況】6号住の北西側（斜面の上側）に位置する。Ⅲ層を除去し、Ⅳ層の上面で検出された。

【重複関係】本遺構は4・6号住に切られていた。

【平面形・規模】堅穴の北西隅部のみが検出された。現存部分は東西12.4 m、南北0.96 mを測る。

【周壁・床面】周壁の立ち上り高は30 cmほどであった。床面は地山層を平坦に加工したもので、貼床は見られなかった。

【堆積土】堅穴内の埋土は10YR2/3黒褐色シルトであった。

【炉・柱穴】検出範囲内の床面では炉は検出されなかった。床面上と周壁上で3基の柱穴（PP 1～3）が検出された。また、南に約3 m離れてPP 4が検出されたが、全体の柱配置を想定するには至らなかった。

【遺物】（第26図123、第43図390、写真図版23・34）土器55 g、礫石器6点（磨製石斧1点、磨石片4点、敲石片1点）、チップ・フレーク 64 g が出土した。

【掲載遺物】そのうち土器（123）、石器（390）を掲載している。

【時期】出土遺物から、本遺構の年代は縄文時代前期前葉である。

## 4 土 坑

最終的には7基の土坑を遺構登録した。現場時はさらに3カ所の土坑状プランを検出し、それぞれ4号・7号・8号土坑と命名し精査を行ったが、精査途中で風倒木痕などであることが判明した。それらは、遺構登録から除外した。

### 1号土坑（第17図、写真図版16）

【位置・検出状況】中央調査区B IV g8 グリッドに位置し、4号住の北に当る。II層の除去後、IV層上面で検出した。

【平面形・規模】平面形は椭円形で、長軸方向は0.81m、短軸方向は0.58m、深さは8cmである。

【壁・底面】断面形は皿状で、底面は凹凸が激しく、壁は緩やかに立ち上がる。

【堆積土】埋土は黒褐色シルト（II層）であった。

【遺物】土器54g、礫石器2点（磨石片1点、敲石片1点）が出土した。

【時期】出土土器は磨滅した小破片で時期の特定ができない。検出面からは時期の上限は縄文時代前期よりは新しいことは分かるが、時期の下限については不明である。

### 2号土坑（第17図、写真図版16）

【位置・検出状況】中央調査区B IV h 8 グリッドに位置し、1号の東に当る。II層の除去後、IV層上面で検出した。

【平面形・規模】平面形は椭円形で、長軸方向は1.36m、短軸方向は1.15m、深さは18cmである。

【壁・底面】断面形は皿状で、底面は凹凸が激しく、壁は緩やかに立ち上がる。

【堆積土】埋土は黒褐色粘土質シルト（II層）であった。

【遺物】（第26図124～127・第35図322・第43図391、写真図版23・28・34）土器763g、剥片石器1点（力持型スクレイバー）、礫石器9点（磨石片6点、敲石1点、敲石片1点、礫片スクレイバー1点）、チップ・フレーク2.6gが出土した。

【掲載遺物】そのうち土器（124～127）、石器（322・391）を掲載した。

【時期】出土遺物から、本遺構の年代は弥生時代後期と推定される。

### 3号土坑（第17図、写真図版16）

【位置・検出状況】中央調査区B IV h10 グリッドに位置し、II層の除去後、III層上面で検出した。本遺構は沢跡の北部を切っている

【平面形・規模】平面形は不整な円形で、東西3.26m、南北3.44m、深さは約50cmである。

【壁・底面】底面はほぼ平坦、壁は徐々に傾斜を増して立ち上がる。

【堆積土】埋土は黒褐色～褐灰色のシルト～粘土質シルト（図中の1～3層）からなり、いずれも周辺から泥質土が流入して堆積したものとみられた。また、最上位には焼土が投入されていた。

【遺物】（第35図323・第43図392、写真図版28・34）土器100g、剥片石器1点（力持型スクレイバー）、礫石器28点（磨製石斧2点、磨石4点、磨石片11点、敲磨器3点、敲石片2点、凹石1点、礫器4点、円礫1点）が出土した。

【掲載遺物】石器（323・392）を掲載した。



#### 4 土坑

【時期】明確には時期を特定できない。出土遺物からは縄文時代前期前葉の可能性がある。

##### 5号土坑（第18図）

【位置・検出状況】中央調査区C IV b9 グリッドに位置する。II層の除去後、III層上面で検出した。

【平面形・規模】平面形は円形で、東西 0.83 m、南北 0.70 m、深さは 10 cm である。

【壁・底面】底面は平坦、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

【堆積土】埋土は黒褐色細繙混じりの粘土質シルトであった。

【遺物】（第43図393、写真図版34）土器 10 g、礫石器 1点（礫片スクリーパー）が出土した。

【掲載遺物】そのうち石器（393）を掲載した。

【時期】明確には時期を特定できない。出土遺物からは縄文時代前期前葉の可能性がある。

##### 6号土坑（第18図、写真図版16）

【位置・検出状況】中央調査区北斜面の上方、C IV c6 グリッドに位置する。I層の除去後、VI層上面で検出した。

【平面形・規模】平面形は不整な楕円形で、長軸方向は 1.12 m、短軸方向は 0.89 m、深さは 15 cm である。

【壁・底面】断面形は皿型、底面は凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。

【堆積土】埋土は褐色シルトが主体で、偽礫構造がみとめられ、人為的に埋め戻されていた。

【遺物】なし。

【時期】時期の詳細は特定できないが、縄文時代に帰属する。

##### 9号土坑（第18図、写真図版16）

【位置・検出状況】中央調査区南斜面、C V d5 グリッドに位置し、沢の北岸に当る。II層の除去後、VI層上面で検出した。検出面からは To - Cu より古期と判断される。

【平面形・規模】平面形は楕円形で、長軸方向は 1.53 m、短軸方向は 1.23 m、深さは 94 cm である。

【壁・底面】底面は平坦、壁の下部は急角度で立ち上がり、上方で緩やかになる。

【堆積土】埋土は、堆積状況からみて大きく 3 層に区分できた。上部は偽礫構造が顕著な黒褐色シルトを主体とする人為堆積層（図中の 1・2 層）、中部は壁面からの崩落土を挟みながら、周囲から徐々に泥質土が流入した自然堆積層（図中の 3～7 層）、下部は崩落土と加工時形成層であった（図中の 8～10 層）。形態からみて、狩猟用の陥し穴の可能性がある。

【遺物】なし。

【時期】時期の詳細は特定できないが、縄文時代に帰属する。また用途は陥し穴の可能性がある。

##### 10号土坑（第18図、写真図版16）

【位置・検出状況】9号土坑の西、C V b5 グリッドに位置する。II層の除去後、VI層上面で検出した。

【平面形・規模】平面形は不整な楕円形で、長軸方向は 1.34 m、短軸方向は 0.87 m、深さは 25 cm である。

【壁・底面】断面形皿状、底面はやや凹凸がある。壁は緩やかに立ち上がる。

【堆積土】埋土は黒色シルト（基本層序 II 層）と暗灰黄色粘土質シルト（図中の 1・2 層）であった。

【遺物】なし。

【時期】時期の詳細は特定できないが、縄文時代に帰属する。

## 5 焼 土

### 5号焼土（第19図、写真図版17）

【位置・検出状況】中央調査区B V g2グリッドに位置し、沢跡内のⅡ層中で検出された。焼土の分布は濃密ではなく、投棄された焼土の可能性もある。

【平面形・規模】平面形は楕円形である。規模は81×57cm、焼土層の厚さは4cmである。

【遺物】なし。

【時期】弥生時代若しくは古代の可能性があるものの、時期の特定はできない。

### 9号焼土（第19図、写真図版17）

【位置・検出状況】中央調査区の東端、C IV f7グリッドに位置する。検出層位はⅢ層上面で、現地性焼土である。

【平面形・規模】平面形は楕円形である。規模は63×42cm、焼土層の厚さは12cmである。

【遺物】なし。

【時期】時期の詳細は特定できないが、縄文時代に帰属する。推測の域は出ないが、堅穴住居跡と同じ縄文時代前期前葉の可能性も考えられる。

### 10号焼土（第19図、写真図版17）

【位置・検出状況】9号焼土のすぐ南に位置する。検出層位はⅢ層の上面で、現地性焼土である。

【平面形・規模】平面形は不定形である。規模は東西71×南北66cm、焼土層の厚さは5cmである。

【遺物】なし。

【時期】時期の詳細は特定できないが、縄文時代に帰属する。推測の域は出ないが、堅穴住居跡と同じ縄文時代前期前葉の可能性も考えられる。

### 11号焼土（第19図、写真図版17）

【位置・検出状況】10号焼土の南西C IV f8グリッドに位置し、10号焼土の南西に隣接する。検出層位はⅢ層上面で、現地性焼土である。

【平面形・規模】平面形は不整な楕円形である。規模は51×14cm、焼土層の厚さは4cmである。

【遺物】砾石器1点（磨石片）が出土した。

【時期】時期の詳細は特定できないが、縄文時代に帰属する。推測の域は出ないが、堅穴住居跡と同じ縄文時代前期前葉の可能性も考えられる。

### 12号焼土（第19図、写真図版17）

【位置・検出状況】中央調査区の東壁際、C IV g8グリッドに位置する。検出層位はⅢ層上面で、現地性焼土である。

【平面形・規模】平面形は不整な隅丸方形である。規模は62×61cm、焼土層の厚さは10cmである。

【遺物】なし。

【時期】時期の詳細は特定できないが、縄文時代に帰属する。推測の域は出ないが、堅穴住居跡と同じ縄文時代前期前葉の可能性も考えられる。



## 6 柱 穴 状 土 坑

柱穴状土坑群（第20図、写真図版17）

【位置・検出状況】中央調査区の1・2号住の間に当るB IV i2・B IV j2・B IV h3グリッドで、5基の柱穴状土坑が検出された（柱穴状土坑1～5）。これらは、I層を除去後、IV層上面で検出され、1号柱穴状土坑は1号住埋土を切って掘られていた。

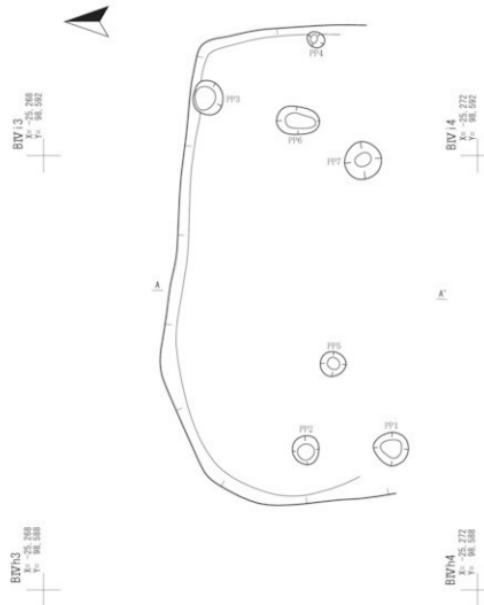
【平面形・規模】平面形は概ね円形で、直径20～35cm、深さ20cmほどのものが多い。

【柱穴・埋積土】明確に柱痕跡がみとめられたものではなく、建物も復元できなかった。

【遺物】出土遺物はなく、詳細な所属時期は不明であるが、切合い関係から1号住よりは新しい。

【時期】時期の詳細は特定できないが、時期の上限は1号住との重複関係から縄文時代前期前葉より新しい。埋土の様相からは判断が難しいが、あるいは縄文時代より新しい時期（古代？）の可能性もある。

## 1号住



1号住		
No.	径	高さ
PP1	32×31	11
PP2	27×25	20
PP3	32×28	6~21
PP4	24×23	13
PP5	24×23	26
PP6	40×36	20
PP7	35×34	20



1号住(A-A')  
1 10YR4/6褐色粘土 粘性土 線りやや密 土器片微量混入

0 1/40 2m

第7図 1号住

2号住

CVW2  
X: -25.764  
Y: 98.604

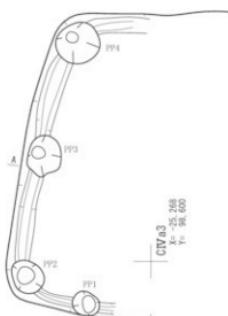
CVW3  
X: -25.768  
Y: 98.604



CVW2  
X: -25.600  
Y: 98.600



2号住		
No.	幅	奥 S
PP1	26×22	23~28
PP2	33×28	29~31
PP3	33×28	32~35
PP4	40×37	39~41
PP5	22×20	13



2号住 Aベルト



2号住(A-A')  
1 1092/2黒褐色シルト 粘性やや弱 繊り中 黄褐色粘土ブロック3%混入 (嵌入為確保)

0 1/40 2e

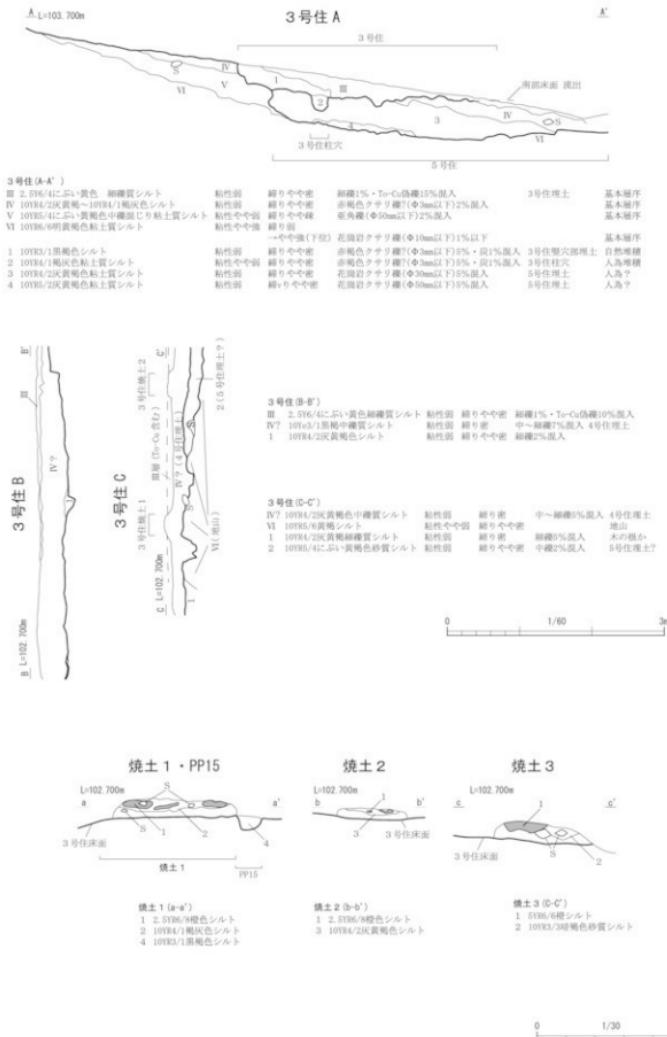
第8図 2号住



3号住



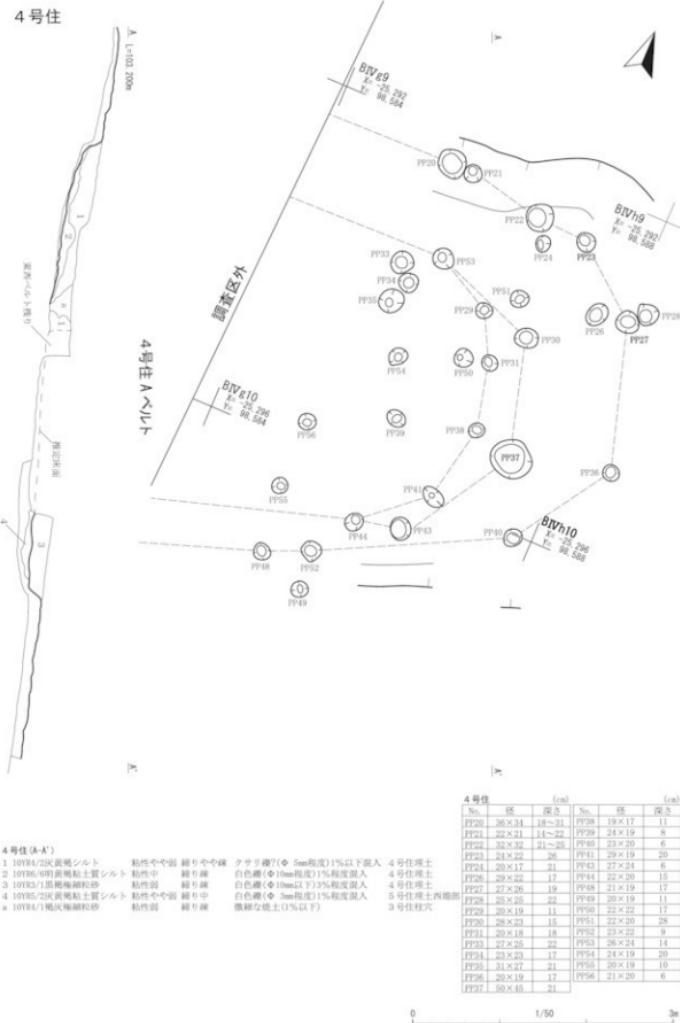
第9図 3号住 (1)



第10図 3号住 (2)



第11図 3号住（3）



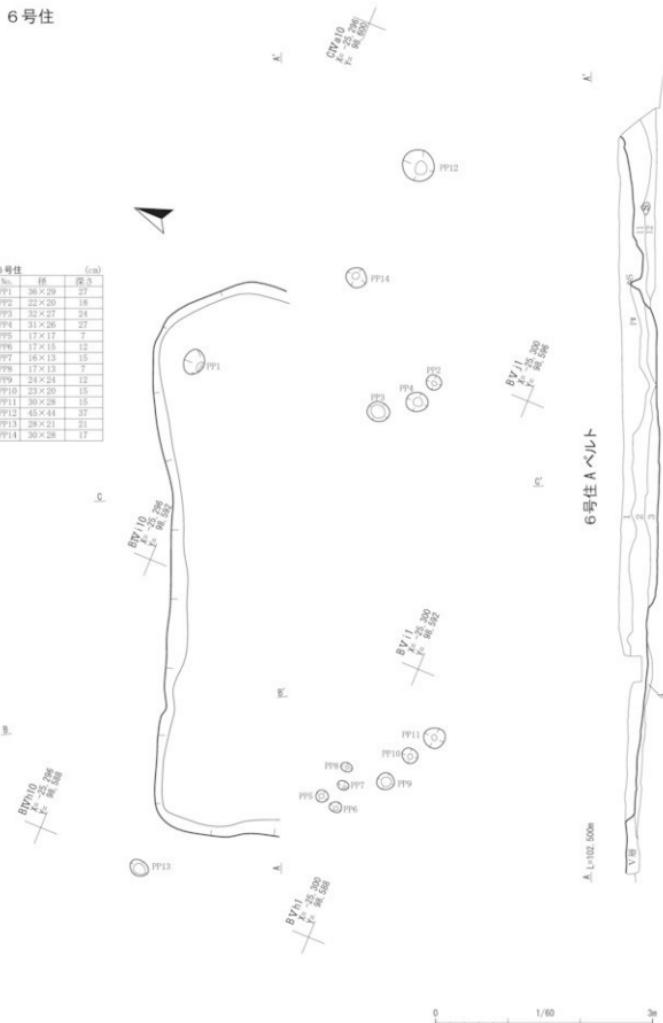
第12図 4号住

5号住

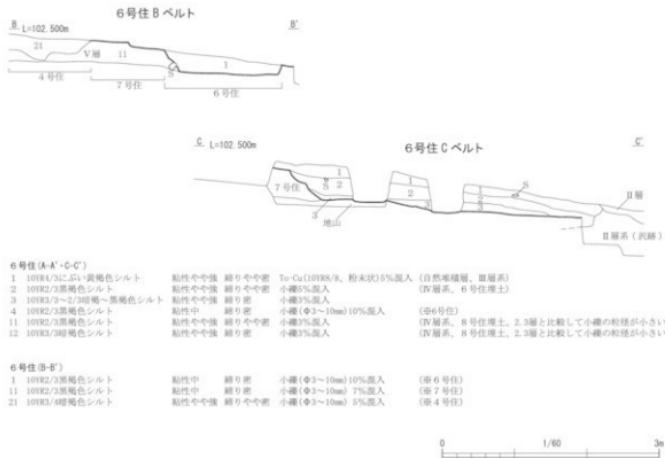


第13図 5号住

6号住



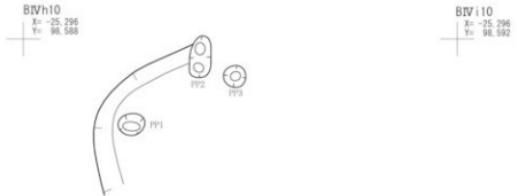
第14図 6号住 (1)



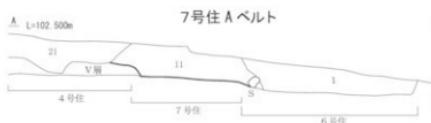
第15図 6号住 (2)



7号住



7号住	(cm)
PP1	20×21
PP2	30×20
PP3	21×20
PP4	20×28



- 7号住 A~A'
- |    |                |       |       |                   |        |
|----|----------------|-------|-------|-------------------|--------|
| 1  | 10YE2/2黒褐色シート  | 粘性中   | 織り密   | 小綿(Φ3~10mm) 10%混入 | (※6号住) |
| 11 | 10YE2/3黒褐色シート  | 粘性中   | 織り密   | 小綿(Φ3~10mm) 7%混入  | (※7号住) |
| 21 | 10YE3/4H黒褐色シート | 粘性やや強 | 織りやや密 | 小綿(Φ3~10mm) 5%混入  | (※4号住) |

0 1/40 2n

第16図 7号住

## 1号土坑

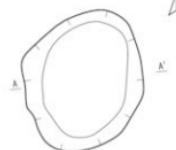


1号土坑  
A-L=103.600m A'

1号土坑(A-A')  
1. 10YR 1/1褐色シルト 粘性やや弱 細り緻 自然堆積

BIVh9  
X= -25.292  
Y= 98.588

## 2号土坑



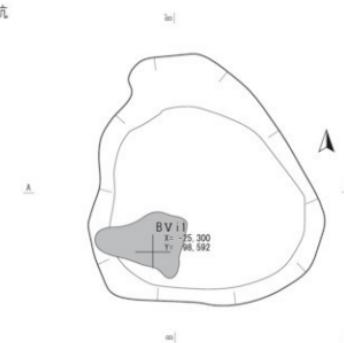
2号土坑

A-L=103.400m A'

2号土坑(A-A')  
1. 10YR 1/1黒褐色粘土質シルト 粘性やや強 細り緻 自然堆積

0 1/40 2m

## 3号土坑



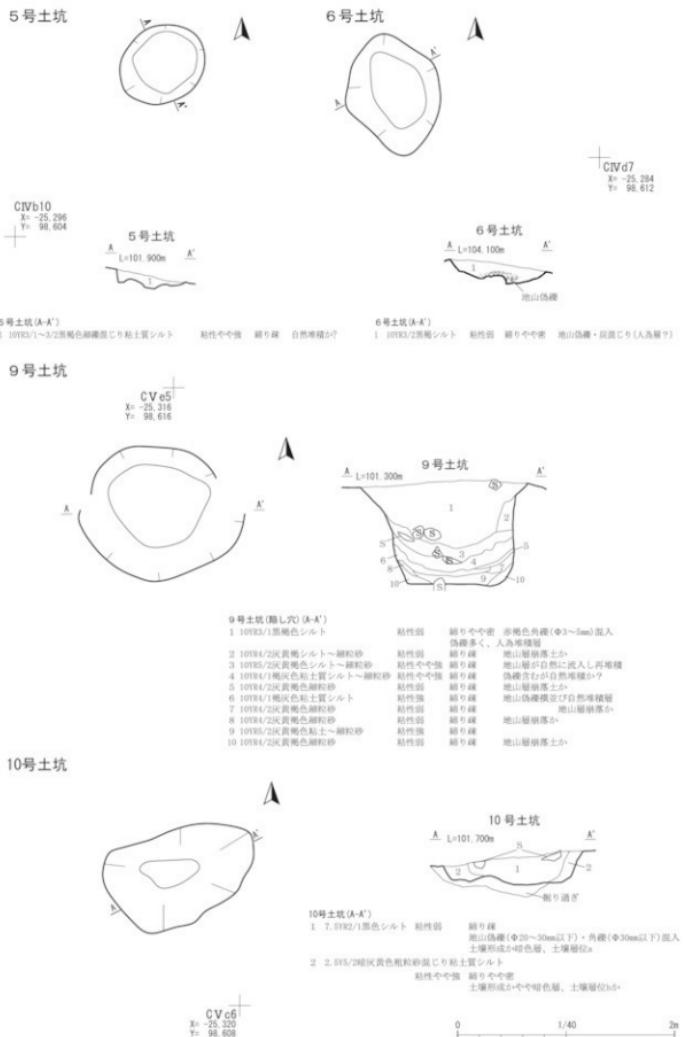
3号土坑(A-A')

1. 10YR 1/1褐色シルト 粘性やや強 細り緻 自然堆積  
2. 10YR 1/1褐色シルト 粘性やや強 細り緻 自然堆積  
3. 10YR 1/1褐色シルト 粘性やや強 細り緻 自然堆積  
4. 7. 5V86/6褐色粘土質シルト 粘性強 細り緻 機土

A-L=102.000m  
1 2 3 4 5  
3号土坑 Aベルト

0 1/50 3m

第17図 1・2・3号土坑



第18図 5・6・9・10号土坑

5号焼土



BVh2  
X= -25.304  
Y= 98.588

A

5号焼土



5号焼土 (A-A')

1 SYK3/1 黒褐色粘土質シルト 粘性やや強 繰り織

9号焼土



CIVh8  
X= -25.288  
Y= 98.624

A

9号焼土



9号焼土 (A-A')

1 SYK3/2暗褐色土 粘性やや強 繰りやや織 堆積成不良

10号焼土



CIVh8  
X= -25.288  
Y= 98.624

A

10号焼土



10号焼土 (A-A')

1 SYK4/4C 黄褐色土 粘性やや強 繰りやや織

11号焼土



CIVf9  
X= -25.292  
Y= 98.620

A

11号焼土



11号焼土 (A-A')

1 SYK5/9明赤褐色土 粘性やや強 繰り織 審査の3面より焼成が良好

12号焼土



CIVh9  
X= -25.292  
Y= 98.628

第19図 5・9・10・11・12号焼土

0 1/40 2m



柱穴状土坑(1~5号)



BIVj2  
X: -25,264  
Y: 98,592

BIVj2  
X: -25,264  
Y: 98,592

3号柱穴状土坑



4号柱穴状土坑



5号柱穴状土坑



2号柱穴状土坑



BIVj3  
X: -25,268  
Y: 98,592

BIVj3  
X: -25,268  
Y: 98,592

1号柱穴状土坑



第20図 柱穴状土坑



## V 出 土 遺 物

遺物は大コンテナ（42×32×30cm）で約32箱分が出土した。内訳は、土器大コンテナ10箱分（101,266g）、土製品9点（円盤状土製品9点）、石器大コンテナ22箱分（2,748点）、石製品中コンテナ1箱分（17点）、チップ・フレーク小コンテナ1箱分（3,551.1g）である。

### 1 土 器

縄文土器、弥生土器、平安時代の土師器が出土した（※以後「時代」は省略）。主体は縄文前期初頭～前葉である（全体の9割以上を占める）。掲載に際しては、縄文前期前葉は堅穴住居跡出土を中心に戸様・特徴が明瞭なもの（代表的なもの）を選択した。縄文前期初頭上川名2式・中葉～後葉大木3～5式・晩期・弥生土器・古代の土師器は当時期と判断したもの全て、その他の時期（※縄文中期・後期など）は文様から概ね土器型式が判然とするものを中心に選択した。

#### （1）縄 文 土 器

今回の調査で縄文土器は、前期、中期、後期、晩期に亘る時期が出土している。上記の通り主体は前期初頭～前葉である。出土地は、中央調査区に所在する堅穴住居跡及びその周辺に堆積する遺物包含層や沢跡から出土している。

**[前期土器]** 前期の土器は、前期初頭～前期後葉まで認められ（※前期末葉は未確認）、主体は圧倒的に初頭～前葉である。胎土中には繊維の混入が認められるが、前期中葉を境に繊維は認め難い（繊維を含まない）様相に変わる。本稿では、胎土中の繊維量も時期を推定する際の目安とした（観察表の繊維の項には、多量、中量、少量、微量の4段階で記載した）。

- ① 前期初頭の出土量は、前期前葉と比較した場合はやや少ないものの、一定量の出土を得られた。今回掲載した中では、No.46・64・144～152・154などが該当しよう。

文様は、口縁部に集約され、縄文原体の側面の押圧による施文を中心とし、渦巻文や直線的な押圧による並行する条線、その条線間に縱位の短沈線が施されるものに代表される。胴部地文は、2種類の原体を横方向に回転し、帯状に整然と走る非結束羽状縄文が多く、加えて使用される原体は8段多条である。器厚は10mmを超えるものが多く、胎土中の繊維量は、観察表への記載で中量や多量としたものがほとんどで、観察所見として次の前期前葉土器より明らかに多く含まれている。土器型式について、本稿では東北地方南部を中心に分布する上川名2式に相当すると捉え、同型式名を各所に用い表記している。この上川名2式の型式内容は、拡大解説されてきた（早瀬：2008）とも言え、少なくとも本県に分布する当該期の土器群の内容や属性は明らかとは言えない現状がある。今後に細部の検討が必要と考えられることを付記しておく。

- ② 前期前葉は堅穴住居跡から多くの土器量が得られ、今回調査の主体時期である。大木1～2b式までの時期幅で推定されるが、土器型式を特定できるメルクマール的な特徴や文様を持つもの少ない。観察表の時期の項には、土器型式への比定が困難なものは「前期前葉」とのみ記載した。

大木1式と捉えたのが、胎土中に繊維を含み、原体が環付き末端ループを施文するもの（No.28・29・79・95・165～170）を基準とする土器群である。また、組繩縄文が一定量以上しているが、厳密には大木1式に属するか分からない。ただ、大木1式と共に気味に出土していることと、観察所見



として口縁部文様帯の形成が認め難い点で前期初頭土器と相違することや、厚さや胎土の様子にも差異が見て取れることから、組繩縄文を施文する土器は前期前葉大木1式期と捉え記述した。

大木2a式は不整撲糸文を施文するものを基調としたが、単軸絹条体第1A類を施文するNo.92・177なども属性と捉えた。そして、大木1式や大木2b式と比較して、口唇部が平滑なもの（面取りされているもの）が特徴的に認められる（No.66・90・175・179・182・185など）。また、口縁部にS字状連鎖撲糸文・胴部に单節斜行縄文を施文するNo.22や、口縁部にS字状連鎖沈文・胴部に結束羽状縄文を施文するNo.14などは、大木2a式と大木2b式両者の属性を合わせ持つ土器である可能性が窺える。

大木2b式と認知したものは、S字状連鎖沈文を施文するものを基調とした。また、地文に組紐回転を採用するものが多く認められるが、これらも大木2b式若しくは白底式の特徴と捉えられそうである（※明らかな大木2a式には組紐が認められない）。No.13・16などは、S字状連鎖沈文と白底式に特徴的な口縁端部への斜めの刻み（観察表では「斜位の刻み」と表記）が、同一個体に共併して認められ、両者の並行関係が示唆される。上述のとおり3号住の層位的事実から、これらの土器はTo-Cu下位で主体的に出土している。近年の事例を見ると、大木2b式・白底式とともにTo-Cuの上下で出土している様子にとれるが、白底式については住田町山脈地遺跡などを見る限りTo-Cu上位出土が優勢のようにである。本遺跡で出土している大木2b式及びそれに伴う白底式相当はTo-Cu下位であることから、S字状連鎖沈文を施文する土器を大木2b式とするならば、To-Cuを跨いで存在する可能性や、地域差（※To-Cu テフラの下位で出土する地域と上位で出土する地域）などの存在が考えられようか。

補足として、前期初頭か前期前葉か判断できなかったものとして、No.54・153・155・156などを挙げておく。これらの土器は、観察表では「前期初頭～前葉」と表記した。その中で平底ではない底部資料として、No.54・153がある。No.54は地文のみの胴部下半片であるが、その器形の連續性からは尖底あるいは丸底土器と推定される。No.153は丸底の底部資料である。これらの縄文原体の様相からは前期前葉の可能性もある。

③ 前期中葉～後葉は、少量の出土である。文様や特徴から土器型式に比定できそうなものとしては、大木3式が1点、大木4式が5点、大木5式が5点（推定を含む）の出土である。大木3式と捉えたものとしては、LR 横回転→円文を施文するNo.231がある。層位的にはTo-Cu テフラ上位出土である。[中期] 中期は、初頭大木7a式、前葉大木7b式、後葉大木9式の出土が少数認められる。全て遺構外出土で、尚且つ小破片であることから、時期のメルクマールとなる特徴的な文様が認められるものに限定して掲載した。

大木7a式、若しくはそれと推定されるのが、No.241～247・249である。全般に、器厚6mm前後の薄い作りが目立ち、バラエティーに富む特徴が看取される。No.242・244は、口縁部が折り返し口縁を呈し、三角形印刻文がみられる。また、特徴的な文様が無く時期を断定するものではないが、胴部に植物茎の回転圧痕？（擬似縄文）を施文するNo.131・132・246・248・275についても、胎土の様相や器厚などから、中期初頭の可能性がある。

大木7b式は、明確に特定できるのはNo.130の1点のみで、押圧縄文による文様施文が認められる。また、隆線によるX字状モチーフを持つNo.275や、貼付隆線の側縁に交互刺突文を施文するNo.276についても、大木7b式の可能性がある（※No.276は大木7a式の可能性もあるが）。

大木9式は、地文→沈線による精円形のモチーフ→磨消縄文の手法をみるNo.251・252・277が挙げられる。それ以外に、口縁頂部に隆線による満巻文が施文されるNo.250は、大木9式古段階若しくは大木8b式と推定されるが、特定できかねた。



【後期】 後期は、初頭が少量出土した。葦窓式相当と推定される。出土地として、北調査区の南斜面に堆積する遺物包含層が主体である。この遺物包含層は縄文後期の単純包含層ではないものの、To-Cu を含まないことから、縄文前期前葉よりは新しいと判断される。No.253 と No.254 は、共に RL 横回転→沈線による文様がモチーフされる。No.279 と No.280 は、接点はないものの、同一個体と推定される資料である。No.279 は、貼付隆線による幾何学的な文様を持つ土器で、口縁頂部から縦に垂下する 2 条の貼付隆線を基調に、弧状気味に隆線が充填される。そして、隆線上には押圧縄文と刺突文が併用してみられる。

【晩期】 晩期は 3 点出土した（認知した）。何れも小破片であることから、土器型式への比定には躊躇あるが、No.133 が大洞 A 式、No.255 が大洞 B 式、No.270 が大洞 C2 式若しくは大洞 A 式と、それぞれ推定しておく。

## （2）弥生土器

弥生土器が少量出土した。前期～後期まで時期幅の広い出土が認められる。上述のとおり、弥生土器と推定されるものは全点（25 点）掲載した。

前期と推定したのが No.259～262 の鉢の破片で、これらは接点がないものの同一個体である。

中期は No.256 が楔形開式の可能性があるものの特定できない。それ以外に、No.134～136 についても、中期の可能性がある。

後期（赤穴式）と推定されるものとしては、No.124～126, 137～140, 258, 263～266, 269 など、交互刺突文、羽状縄文、付加条縄文などを施す。2 号土坑や沢跡を中心に出土した。これらの全体的な傾向としては、縄文土器と比較して器厚が薄く 3.5～7 mm の範囲で平均的には 5 mm 前後を測る。

## （3）古代の土器

土師器 2 点と須恵器 2 点が認められた。No.141 の土師器甕は外面に縦方向に調整痕（ナデと推定される）が認められる。10 世紀前半～中頃と捉えられる。他は平安時代と推定されるが、小片で詳細な時期は特定できない。

## 2 土製品

土製品は、土器片を再利用した円盤状土製品 9 点が出土した。

土器片の縁を打ち欠き円形気味あるいはそれに準ずる形に成形したもので、縁辺は全て打ち欠きのままである（※全て研磨が施されていない）。また、形状は全般にきれいな円盤状（平面形が円形）とは言い難い。法量値は、直径約 4 cm、重量 17 g の平均値となる。時期は、施される原体や胎土中の繊維の混入様相などから判断すると、No.282～287 は前期前葉、No.281・288 は中期初頭と、それぞれ推定される。時期不明としたのが No.289 であるが、縄文後期あるいは弥生後期の可能性がある。



## 3 石 器

石器類は大コンテナに換算して 22 箱分と、多量に出土した。圧倒的に礫石器が多い。以下には剥片石器と礫石器を分けて記述する。

## (1) 剥 片 石 器

剥片石器は 301 点出土した。内訳は石錐 51 点、尖頭器 4 点、石匙 32 点、石錐 1 点、石箆 6 点、スクレイパー 56 点、コア 7 点、力持型スクレイパー 127 点、U フレ 17 点である。

【石錐】 51 点出土し、10 点掲載した。基部形態が把握できる資料をみると、平基が 37 点、抉りを呈するものの 3 点である。また、欠損品が 13 点ある。規模は、長辺の平均値約 2.4 cm、平均重量 15 g である。石材は黒曜石製 1 点を除き全て頁岩である。

【尖頭器】 4 点出土し、1 点掲載した。掲載した No.329 は、形状は両側縁が平行するスリムな作りであるが、側縁の加工状況としては、粗い加工にみてとれる。尖頭器としたが、先端部は尖らない（未成品か）。長さ 6.8 cm、幅 1.5 cm、厚さ 0.8 cm、重さ 7 g である。石材は頁岩である。

【石匙】 32 点出土し、9 点掲載した（No.302・303・310・330・331～335）。摘みを上にした場合、主要な刃部と想定される刃が、縱（縱型）、横（横型）、斜（斜型）の、3 種類が認められる。また、刃部加工は片面（一面※表面として図化）にのみ二次剥離が施されるものがほとんどであることから、いわゆる片刃と捉えた。今回の調査では縱型で片刃が多い。No.332 は不明瞭ではあるが、刃部を縱に巡るよう黒色物質の付着が認められる（アスファルトか？）。石材は、No.331 が凝灰岩で、他は全て頁岩である。

【石錐】 雜部の一部と捉えられる破片が 1 点出土し、石錐として登録した（不掲載とした）。

【石箆】 片面に広く自然面（礫面）を残し、切断面側に粗い剥離が施され平面形が箆状を呈するものである。力持型スクレイパーに類似するが、刃部の加工具合や刃部角度に相違があり、石箆の器種名で呼ぶこととする。それらは、石箆や磨製石斧の未成品段階の可能性もある。6 点出土し、全て不掲載とした。

【スクレイパー】 刃部の加工具合や微細剥離の様子から、削撃器と推定したものである。加えて、形状は全般に規格性が認め難く（弱く）、不定形な形状にある。上述の内容の石器をスクレイパーの名称で一括した。56 点出土した。その内、楔形に近い形状を呈する No.304・336 の 2 点掲載した。石材は 2 点ともに頁岩である。補足として、掲載した 2 点はビエス・エスキューと呼ばれる類の石器にも類似する。

【コア】 剥片を剥した際にこされた残核と捉えたものをコアとした。7 点出土したが、全て不掲載とした。

【力持型スクレイパー】 127 点出土し、28 点掲載した（No.305～314・319～323・337～350）。剥片石器に占める割合は 42% で、非常に高い割合を示す。力持型スクレイパーは、力持遺跡（岩手裡文：2008）で呼称された石器で、片面のほぼ全面に自然面（礫面で母岩表皮と判断される）が残り、切断面側の周縁を打点とした直接打撃によって平面形が楕円形～長方形に整形されたもので、先端に鈍角（※ 65° 以上が多い）の刃部が形成された石器である。力持遺跡で実施した石器使用痕分析の結果からは、対象物は軟らかいもので動作などからスクレイピングに使用された石器と考察される。図化に際しては切断面の剥離側を表面とした（※力持遺跡報告書中では自然側を表面にし掲載・図化されて

いる)。加えて、礫石器ではなく剥片石器として表記する。

典型的な力持型スクレイパーとしては、長辺 6 ~ 10 cm、短辺 4 ~ 7 cm、重さ 100 g 以下のものが挙げられる。掲載した中では、No. 305・320・321・323・337などがある。また、やや大形のものとして、No. 350 が挙げられる(長辺 15.8 cm、短辺 8.3 cm、重量 555 g と逸脱した規模・法量にある)。

石材は 10 種類以上が認められるが、細粒閃緑岩、花崗斑岩、ピン岩、頁岩、砂岩の順に多い。用いられる石材を見る限り、磨製石斧に用いられているものと共通性が高く、あるいは磨製石斧の未成品が混在する可能性も否定するものではない。特に裏面にも刃部を意図した加工が認められるものは検討をする。

**[ユーティライズドフレーク(いわゆる UF)]** フレークに微細剥離などの使用痕が認められるもので、17 点出土したが、全て不掲載とした。

## (2) 磨 石 器

礫石器は 2,408 点出土した。磨製石斧 162 点、特殊磨石 39 点、磨石 1,609 点、敲磨器 102 点、敲石 165 点、凹石 2 点、砥石 1 点、石錐 1 点、石皿 7 点、台石 13 点、礫器 151 点、礫片スクレイパー 95 点、板状礫 12 点、棒状礫 1 点、円礫 48 点である。

**[磨製石斧]** 162 点出土し(磨製石斧？ 1 点含む)、10 点掲載した。成品と未成品の割合としては、未成品が 138 点全体の 85% を占める。成品としては、No. 383・394・396 を掲載したが、全て欠損品である。No. 396 は擦り切り痕が認められる。石材は細粒閃緑岩、花崗閃緑岩、花崗斑岩、頁岩などが多く用いられている。

**[特殊磨石]** 側面に平坦気味の磨面を持つものについて、本稿では特殊磨石と呼ぶこととする。39 点出土し(内、特殊磨石片 14 点含む)、10 点掲載した。側面の磨面幅は 0.8 ~ 2.5 cm の範囲で認められ、平均すると 1.5 cm 前後になる。この磨面は No. 354・355・356・397・398 など、ザラザラした感触のものが多い。また、磨面の側縁には No. 354・397・398 などのように磨痕を残る剥離が施されるもの有一定量認められる。石材は細粒閃緑岩、花崗閃緑岩、花崗斑岩、花崗岩などが主体である。ただし、今回は全点の石質鑑定を実施できなかったことと、同じ宮古市田老地区に所在する乙部遺跡などの出土品を見る限り、石材は非常に多様にある(※乙部遺跡は大木 2a 式を主体とする集落遺跡で、平成 27 年度に岩手県教育委員会で調査した際には、多量の特殊磨石が出土している)。重量をみると、310 ~ 610 g の範囲にあり、平均重量は 410 g 前後となる。

使用用途について、今回は使用痕分析などを実施していないため、多くを言及できる状況にはないが、対象物への使用に際して、磨面の幅が 1.5 cm 前後で磨面はザラザラ感を保持する必要があるような内容と捉えられる。加えて、重量が 410 g 前後であることを考慮すると、デリケートな作業には向かないと推定される。

類例の分布をみると、沿岸部に限らず内陸部の遺跡においても出土を確認できる。時期について、詳細な集成などを行っていないため不透明感が拭えない内容であくまで所見になるが、縄文前期・中期を中心とする遺跡からの出土が多いと思われ、特に沿岸中央～北部においては縄文前期前葉土器を出土する遺跡から顕著に認められる傾向が窺える。

**[磨石]** 磨痕が認められる石器を磨石とした。全面磨痕が認められるものや表面若しくは裏面に広く磨痕が認められるものなどを基準とする。1,609 点出土した内、代表的なもの 5 点を掲載した。特徴的なものとして、①縁辺に複数の打ち欠き痕があるもの、②磨石を輪切状にしたもの、③石斧の形状は成していないが磨痕の在り方から磨製石斧の制作初期段階の未成品と推定されるものなど、多様な



様相にある。石材は、掲載した5点のみ石材鑑定を実施したが、花崗閃緑岩、花崗斑岩、閃緑岩などが認められる。なお、敲打痕と併用? 気味に認められるものは、原則敲磨器として登録・命名し、本器種とは区分して示す。ただし、磨痕を敲打痕が載る場合は敲石とし、磨痕に対して敲打痕が不明瞭なものは磨石とした。

【敲磨器】磨痕と敲打痕が併用して認められるものを敲磨器とした。102点出土した内、代表的なもの3点を掲載した。石材はデイサイトやピン岩である。

【敲石】165点出土した内、使用痕が明瞭な8点を掲載した。加えて、その対象物が石の可能性が高いと判断したもので、磨製石斧の加工工具である可能性が考えられるものを中心に掲載した。石材は、多様にあるが、デイサイト、流紋岩、ピン岩などがみられる。

【凹石】石器中央部付近において敲打による凹部を持つ石器を凹石とした。2点出土し2点とも掲載した。2点ともに表裏両面に凹部が形成されている。また、No.392は縱長に凹部が形成される特徴が認められる。重量はNo.392が517g、No.407は585gである。力持遺跡で実施した石器使用痕分析では、クルミの殻の先端を敲き飛ばす用途が指摘されていたが、そのようなデリケートな作業を行うには今回出土した2点はやや重い感がある。石材は、デイサイトと閃緑岩である。

【砥石】1点出土した。扁平気味の礫破片の一面において、やや平坦気味の面があり、砥痕と捉えられる溝状の磨痕が認められた。破片であることから不掲載とした。

【石錘】両端に抉りのある玢岩礫で石錘と判断した。1点出土し不掲載とした。

【石皿】7点出土し1点掲載した。7点全て破片での出土である。掲載したNo.360の皿部は、ツルツルの使用痕で、明確な溝状を呈するものではないものの、砥痕の可能性も想起される。石材は砂岩である。

【台石】広い平坦面を持ち、台としての用途が推定される礫を台石とした。13点出土し2点掲載した。平坦面には磨り痕と敲打痕が併用して認められる。石材はデイサイトと花崗岩である。

【礫器】形状、加工の状況、使用痕などからは、他の礫石器に分類するのを躊躇されたものを一括して「礫器」の名称で呼ぶこととする。加えて、形状は斧に類似するものの、磨製石斧未成品とするには根拠が弱いと捉えたものも含めた。151点出土し、代表的なもの11点を掲載した。掲載に際しては磨製石斧未成品の可能性があるものを優先して選択した。具体的には、No.362～366・378・408～410は磨製石斧の制作初期工程段階、No.373はそれより若干制作工程の進んだ段階と推定したい。石材は、デイサイト、細粒閃緑岩、ピン岩、安山岩、花崗閃緑岩などである。

【礫片スクレイパー】厚さ1～2cmの薄めの円礫片あるいは磨石片を用いて、その切断面（破損面を含め）側の先端をスクレイピングなどに使用したと捉えた石器を「礫片スクレイパー」と仮称して呼ぶこととする。95点出土し7点を掲載した。力持型スクレイパーと呼称した石器と比較すると、共通点としては円礫などの裸面（自然面）を残すこと（自然面側には意図的な加工痕が認め難いこと）。相違点としては、切断面側に加工が施されるものは力持型スクレイパー、加工がほとんど施されず切断面そのものを刃部としているものを礫片スクレイパーとした。加えて、刃部角度も力持型スクレイパーは65°以上が多いのに対して、礫片スクレイパーと仮称したものは35～50°とより銳利なものが多い。留意点も述べておくと、礫片スクレイパーと仮称したものは、あくまで肉眼からの使用痕観察である（※電子顕微鏡などを用いた使用痕分析を実施していない）。ただ、扁平気味の円礫やそれらを打ち欠いた可能性のある礫片、及び同様の厚さの磨石片（薄いものが多い）が多く出土している状況から、このような石器製作を意図して石材が遺跡内に持ち込まれている可能性を示唆し、問題提起を兼ねてこの石器名称を提示しておくこととする。石材は、細粒閃緑岩、細粒花崗岩、凝灰岩、

デイサイトなどがみられる。

**【板状疊・棒状疊・円疊】** 今回の調査では扁平な板状の疊や、石棒に似た棒状疊、円盤状の形をした円疊が比較的多く出土した。それらは、形状的には人工品にも見て取れるものの、加工痕（打ち欠いた痕跡）や使用痕（磨つたり敲いた痕跡）が不明瞭なものであったことから、サンプル的に板状疊12点（掲載したNo.380に線状痕あり）、棒状疊1点、円疊48点を持ち帰り仮登録し、その他は野外調査時に廃棄した経緯がある。板状疊として掲載したNo.380は、2片の頁岩が接合したもので、平坦面の一面（表面として図化した面）に認められる線状痕は人為的なものと判断される。他に接合片が確認できなかっただけで、本来的には25cm以上の疊と推定できよう。実用品（※例えば台石とかあるいは土掘りの道具とか）などのどうかは不明にある。棒状疊は、人為による磨り痕などは認められないため（※自然摩耗と捉えたことから）石棒とは認知できない。円疊については、上述した疊片スクレーバーや石錐などへの加工・使用を目的に、跡間に持ち込まれた可能性を有するが、棒状疊と同様に人為的な加工痕や使用痕が認め難い。

### （3）チップ・フレーク

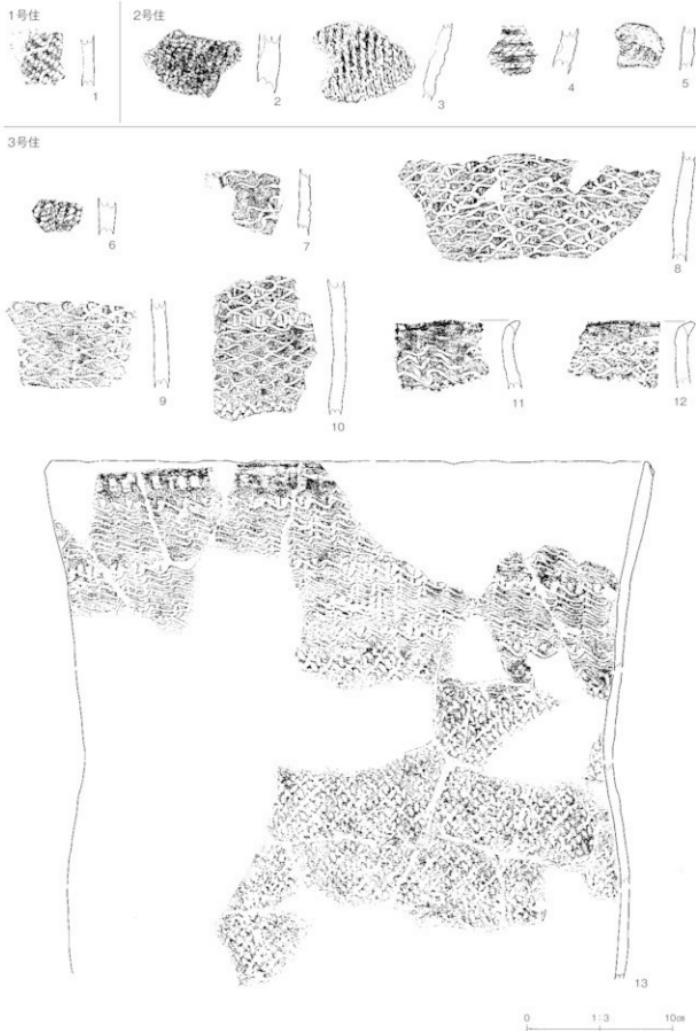
チップ・フレークは3,551.1g出土した。そのほとんどが中央調査区で、特にB.IV.i.9～j.9グリッド付近では縦文前期初頭～前葉の土器と一緒に多量に出土した。

## 4 石 製 品

石製品は17点出土した。内訳は、軽石製石製品5点、石刀・石棒は12点である。

**【軽石】** 5点出土した。今回の調査で出土したものは、何れも実用品とは捉え難いことから、石製品として登録・提示しておきたい。4点掲載した。No.411は、3号住の埋土中（To-Cuテフラ層より下位）から出土したもので、磨痕や加工痕は不明瞭であるが、楕円形の形に整えられている可能がある。その他は全て遺構外出土である。No.416・417は、中央付近に穿孔が認められる。No.418は、複数ある孔は自然に空いたものと判断され、意図的な加工痕や使用痕は認め難い。石材の産地について、十和田火山新第四紀と鑑定をいただいた。十和田起源のテフラの中で新第四紀に噴出したものは多く、その種類や年代は特定できないようである。

**【石刀・石棒】** 棒状の疊の中で、人工品と判断したものを石刀若しくは石棒として12点登録し、その内4点を掲載した。石刀と石棒の区分に際しては、断面形の形状が方形基調は石刀に、円形に近いものを石棒とした。掲載したものの石材はホルンフェルス、ヒン岩、砂岩である。追記として、何れも整形の際の打撃や磨痕が明瞭ではない。帰属遺構から、全て前期前葉と判断される。

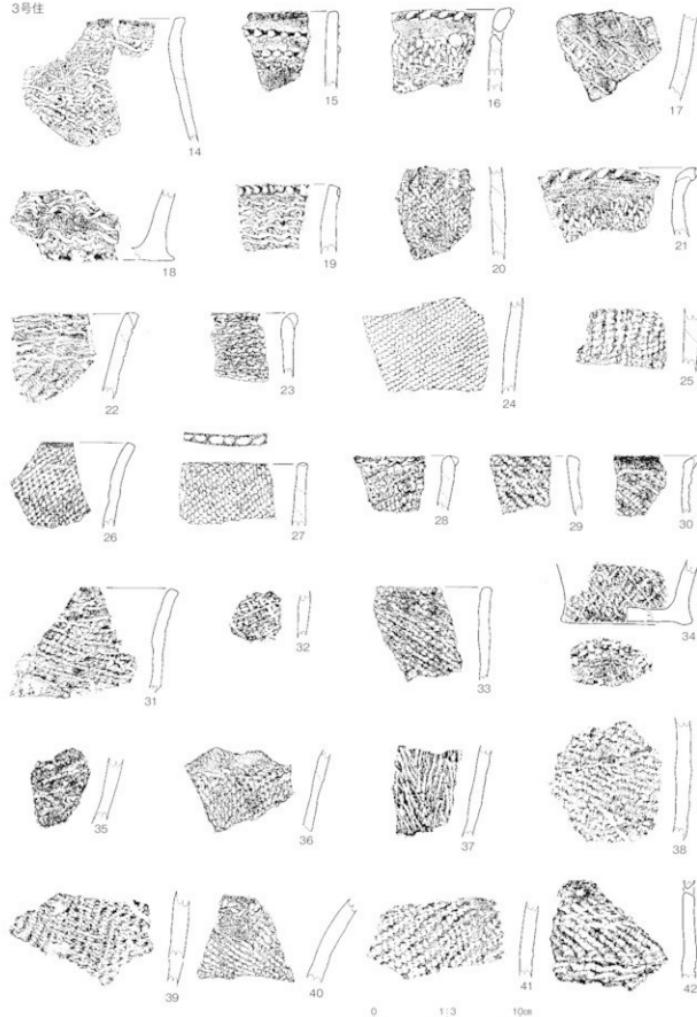


第21図 1・2号住、3号住（1）土器

- 44 -

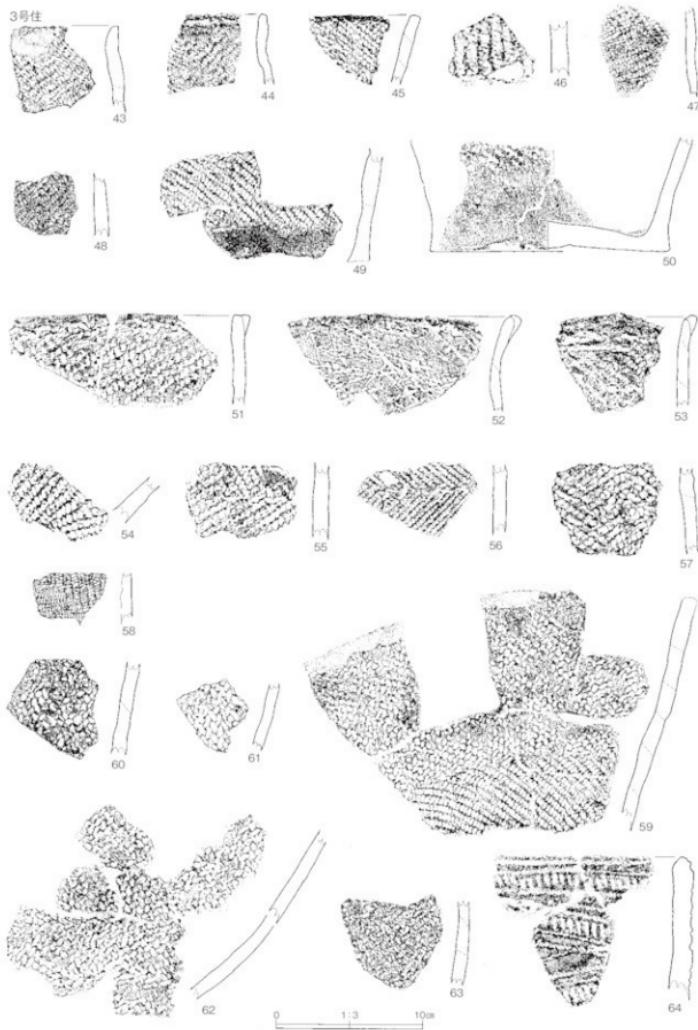


3号住

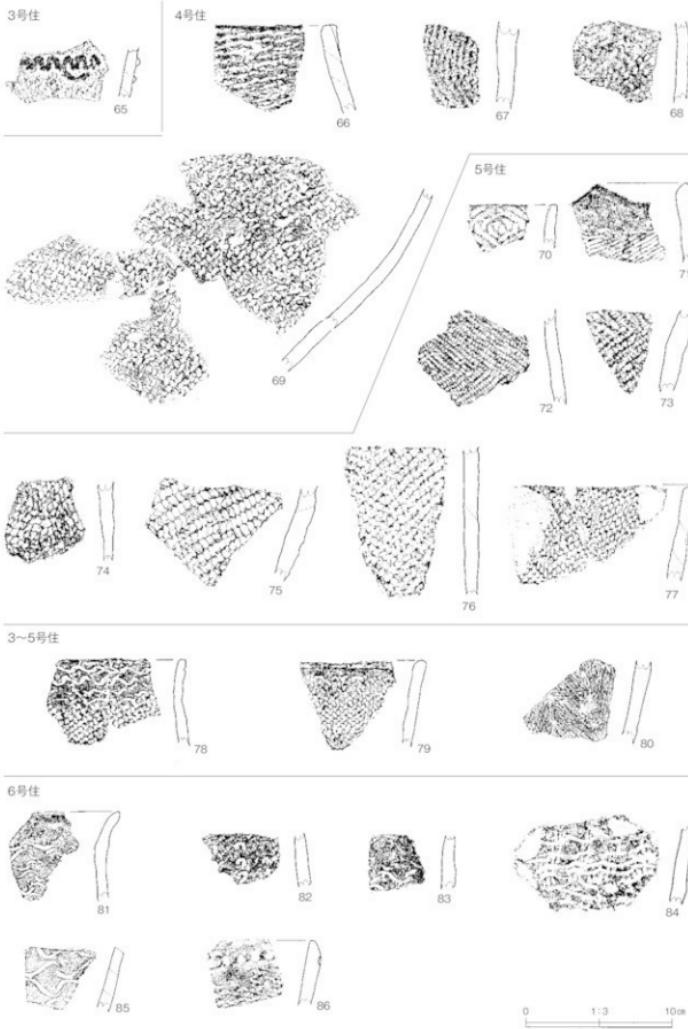


0 1:3 10cm

第22図 3号住（2）土器



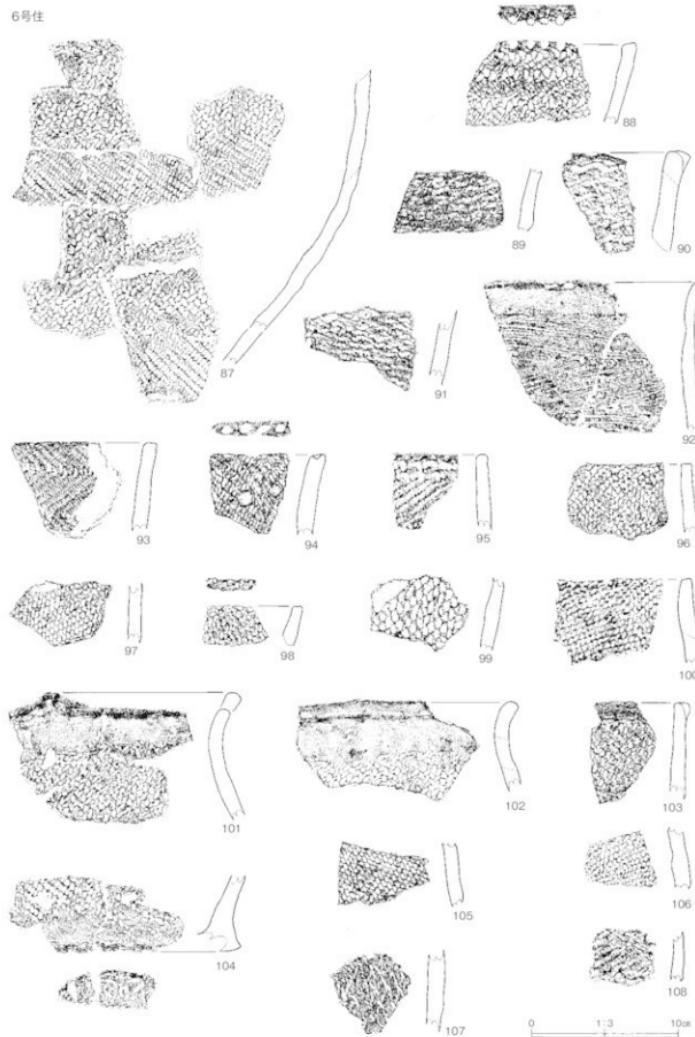
第23図 3号住(3)土器



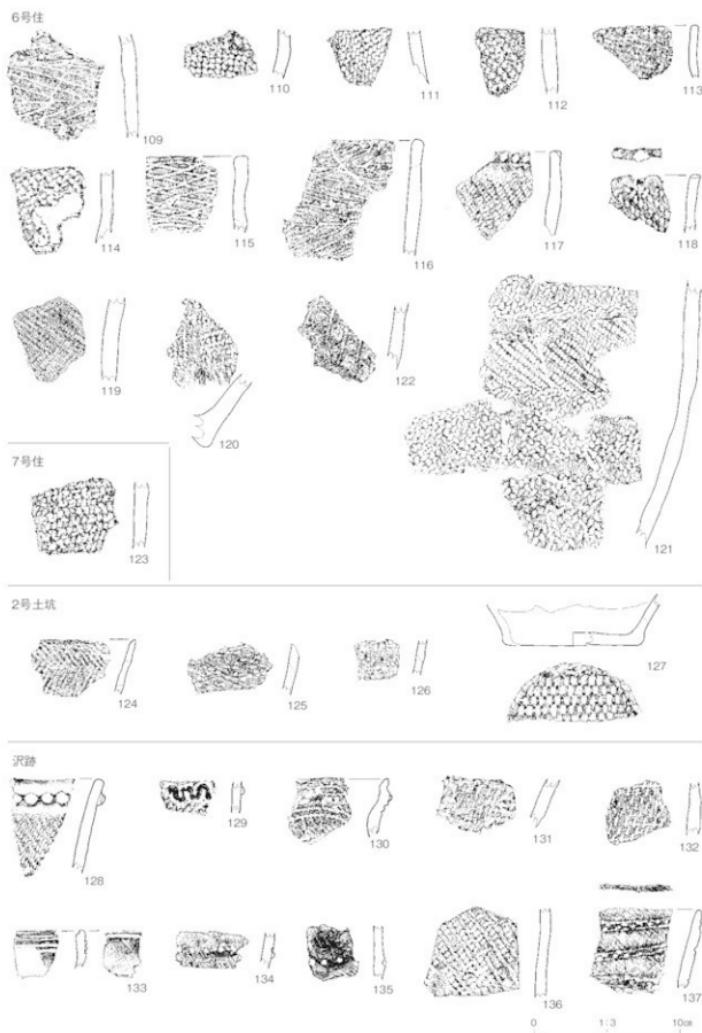
第24図 3号住(4)、4・5号住、6号住(1)土器

- 47 -

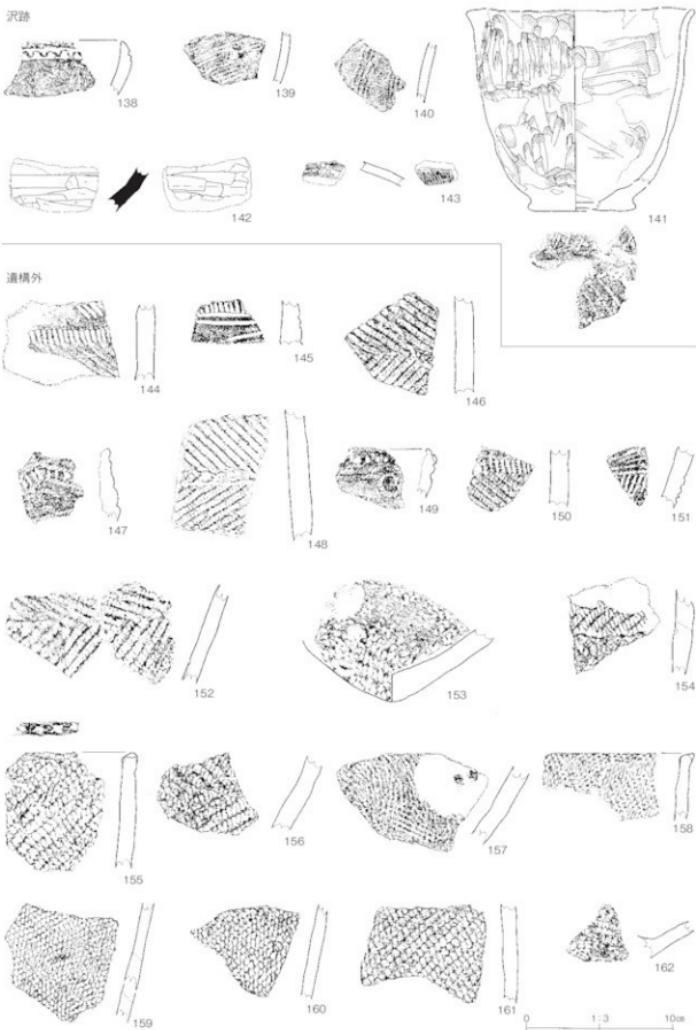
6号住



第25図 6号住(2)土器



第26図 6号住(3)・7号住、2号土坑、沢跡土器

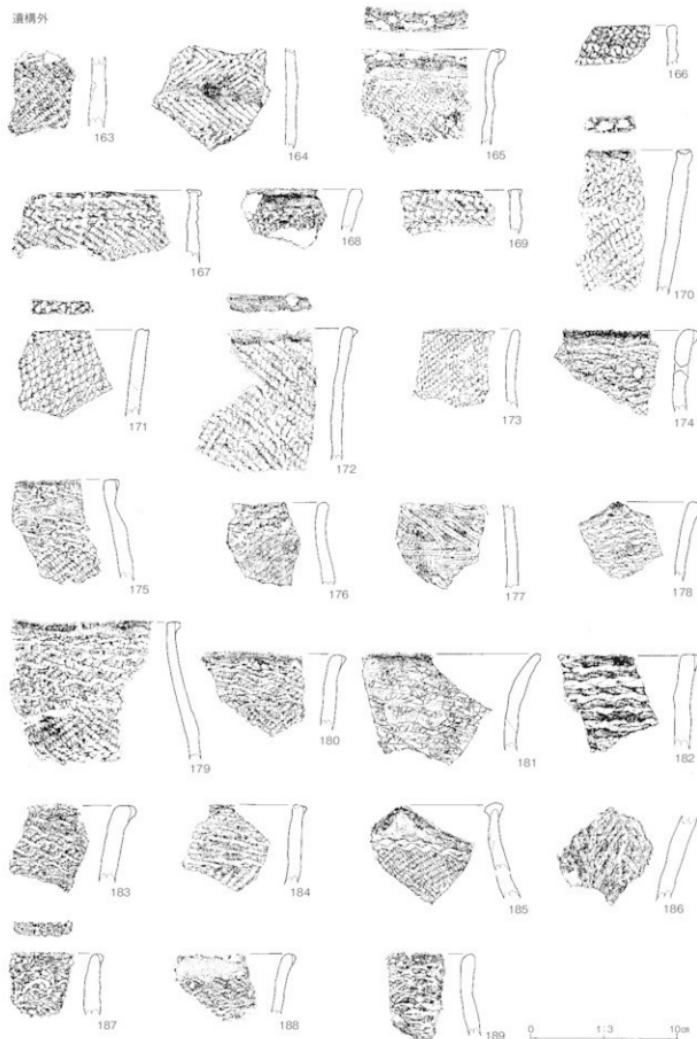


第27図 沢跡、遺構外（1）土器

- 50 -

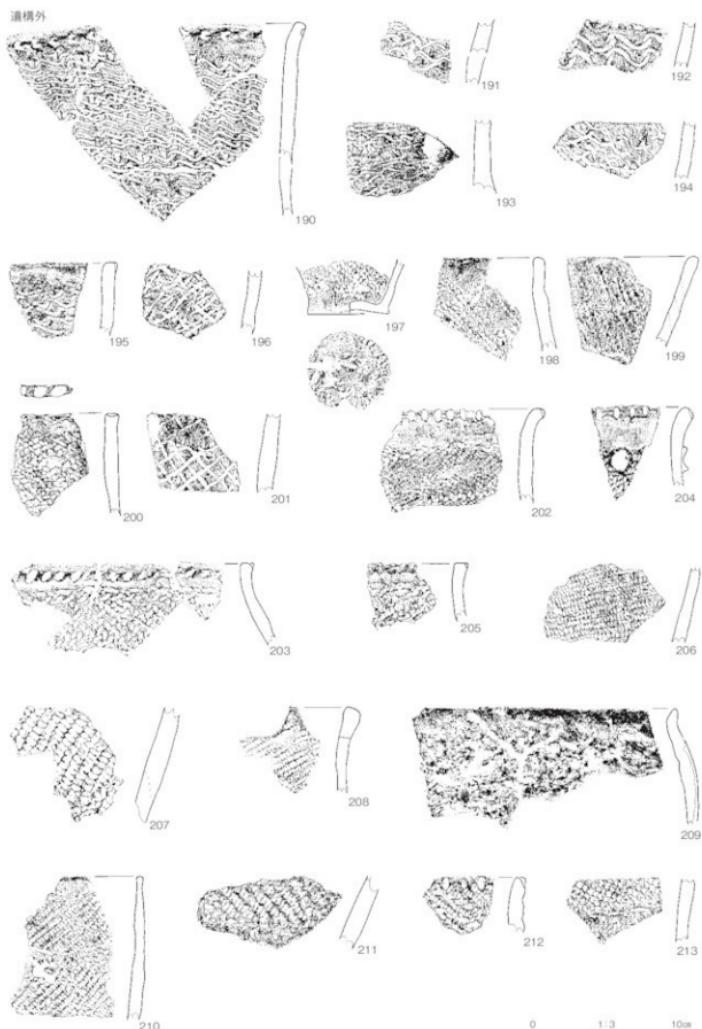


遺構外



0 1:3 10cm

第28図 遺構外（2）土器

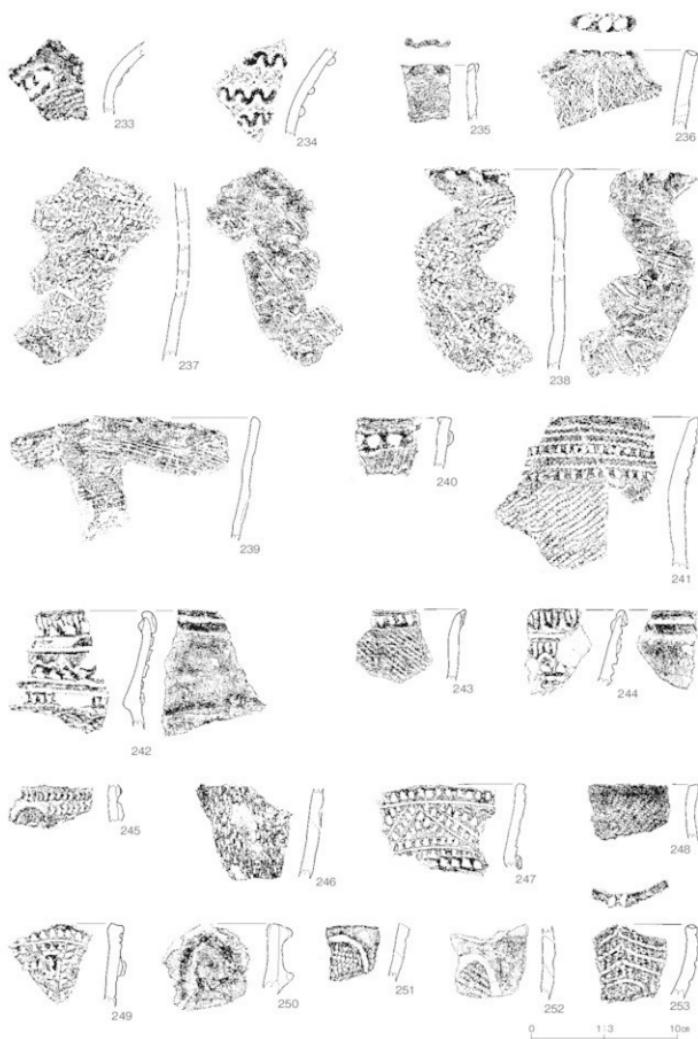


0 1:3 10mm

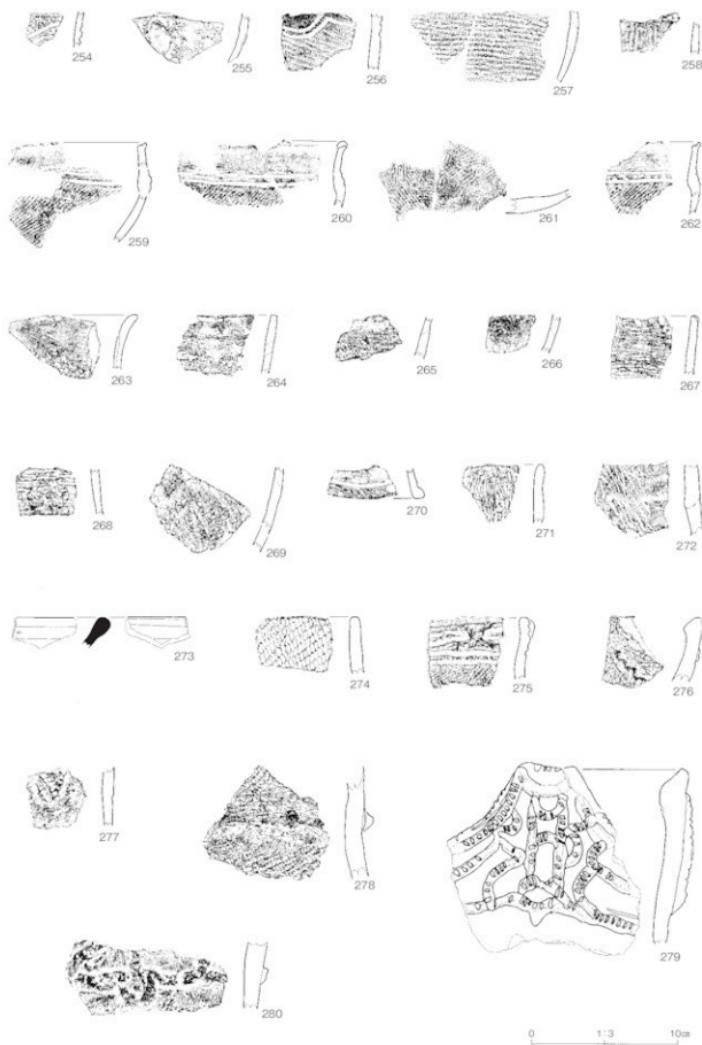
第29図 遺構外（3）土器



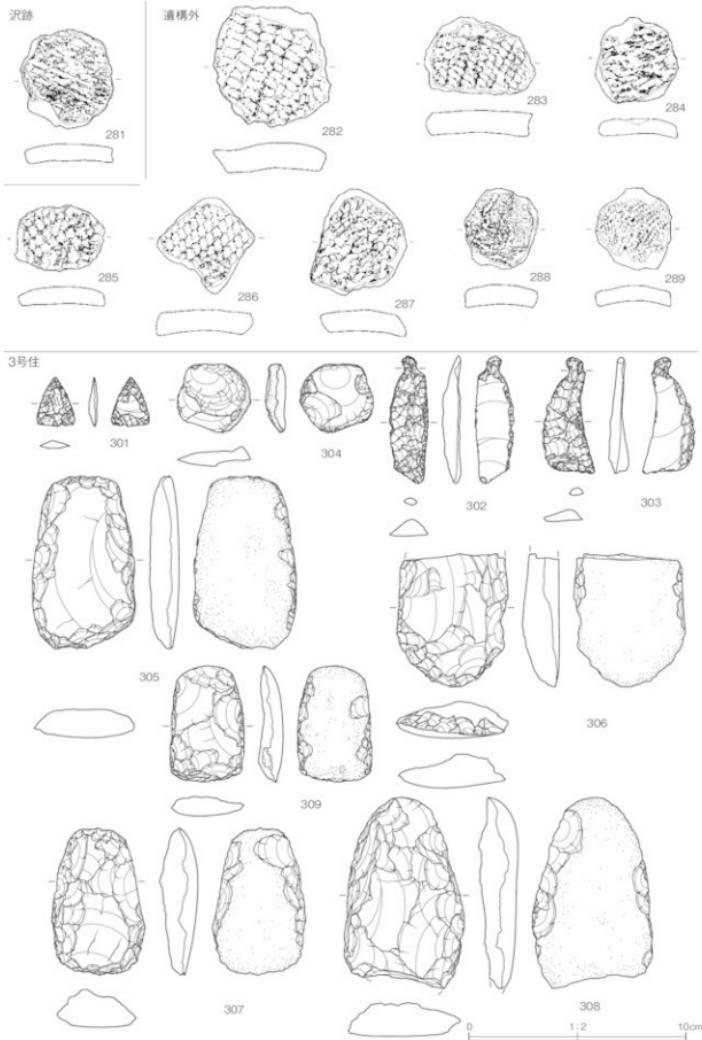
第30図 遺構外（4）土器



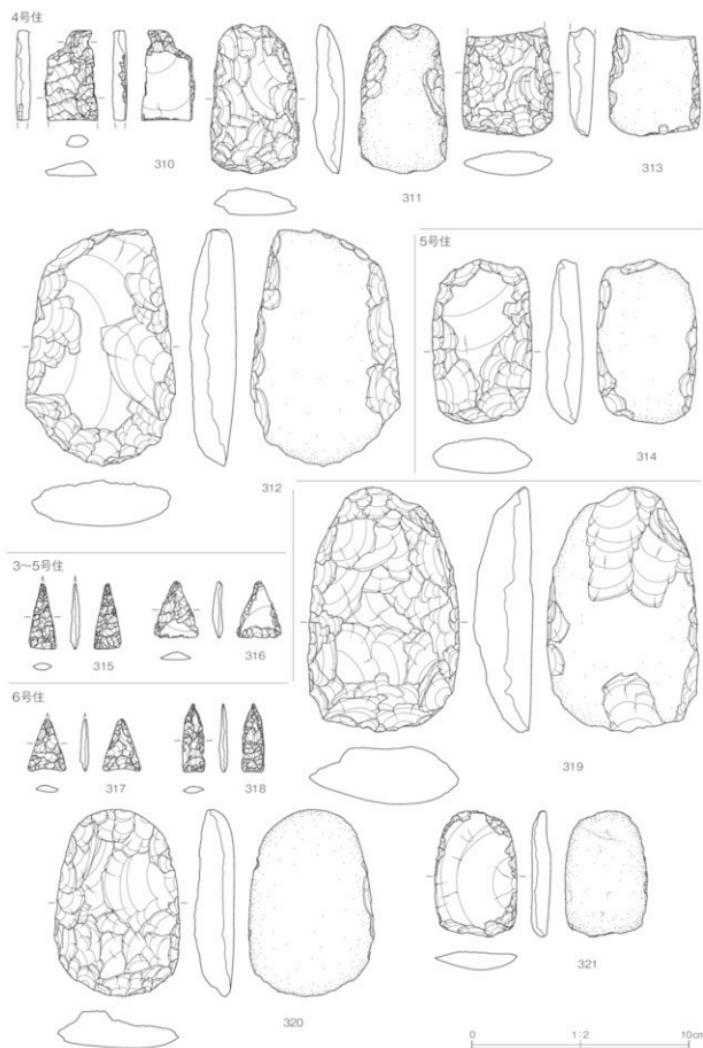
第31図 遺構外（5）土器



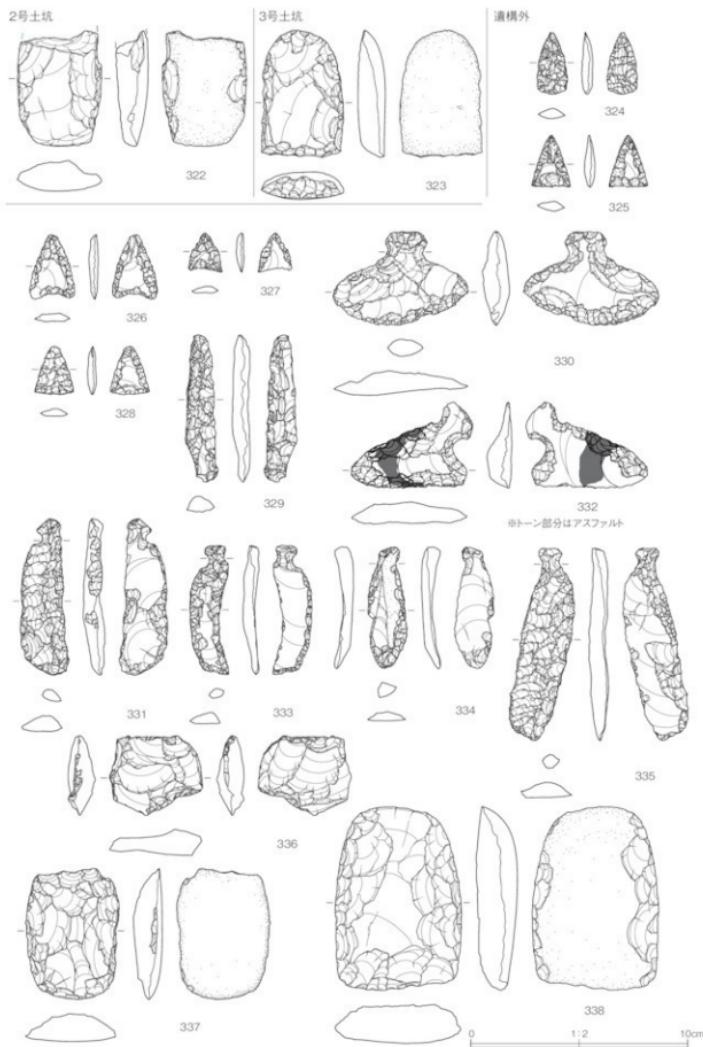
第32図 遺構外（6）土器



第33図 土製品・3号住剥片石器



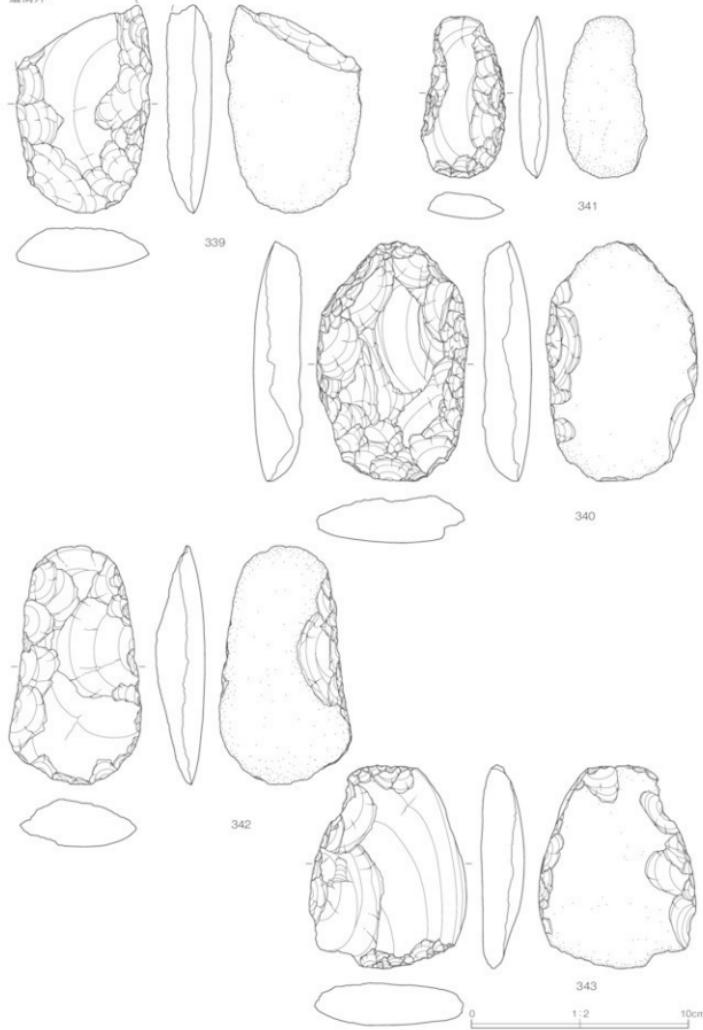
第34図 4・5・6号住剥片石器



第35図 2・3号土坑、遺構外(1)剥片石器



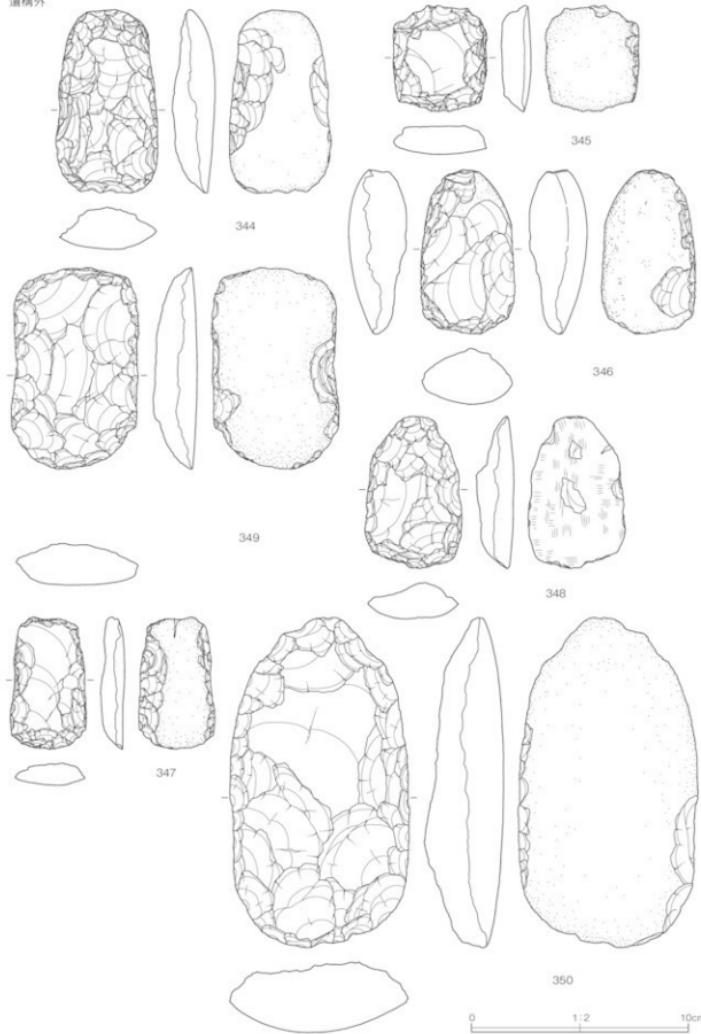
遺構外



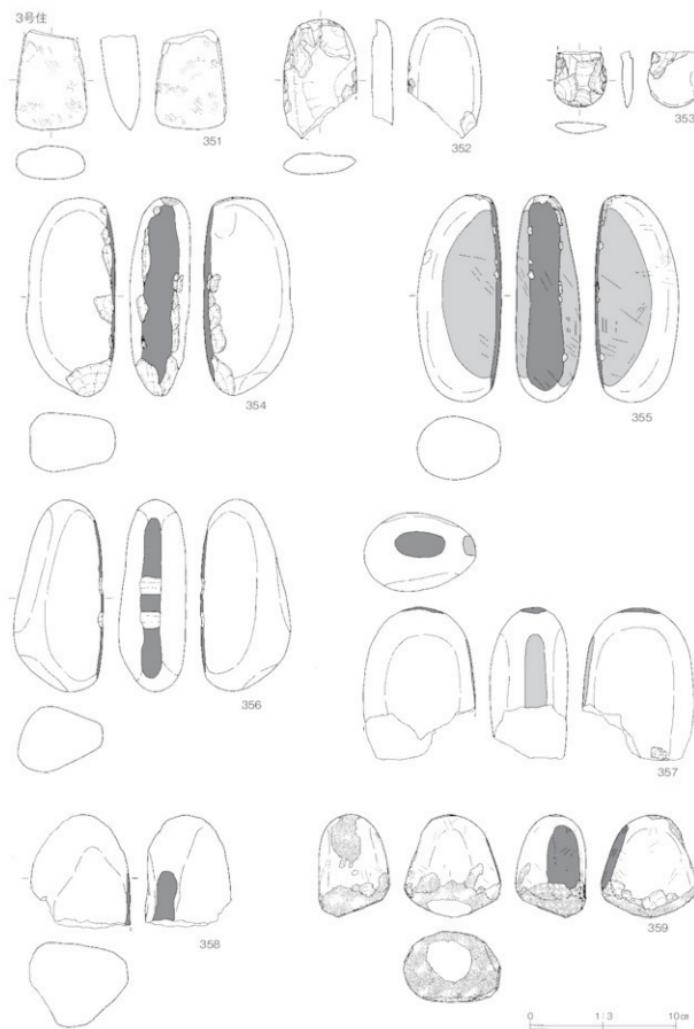
第36図 遺構外（2）剥片石器



遺構外



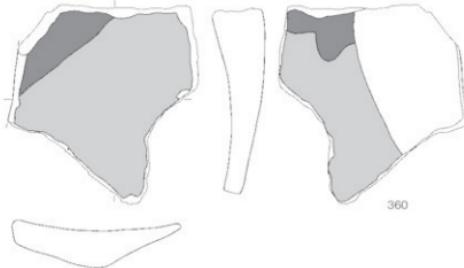
第37図 遺構外（3）剥片石器



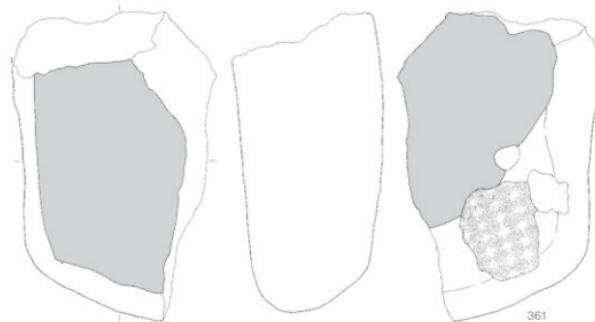
第38図 3号住(1) 碓石器



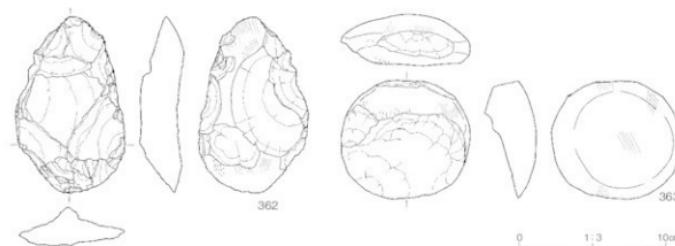
3号住



360



361



362

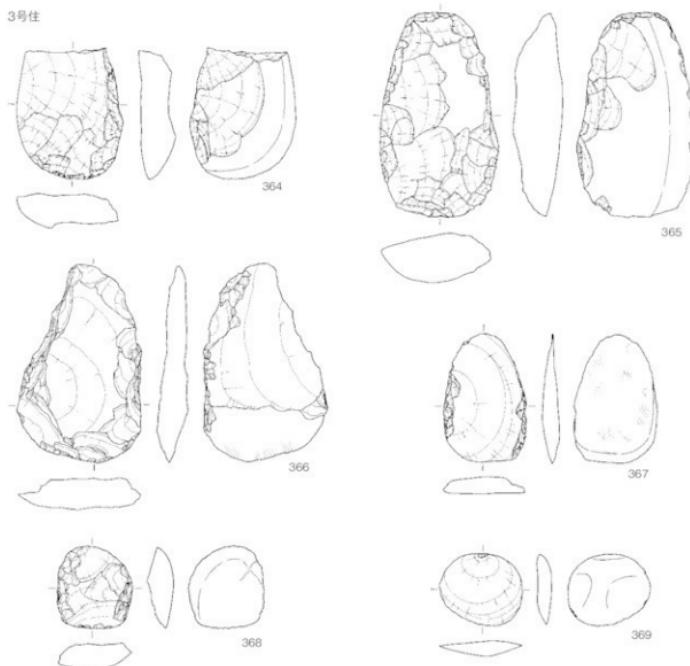
363

0 1:3 10cm

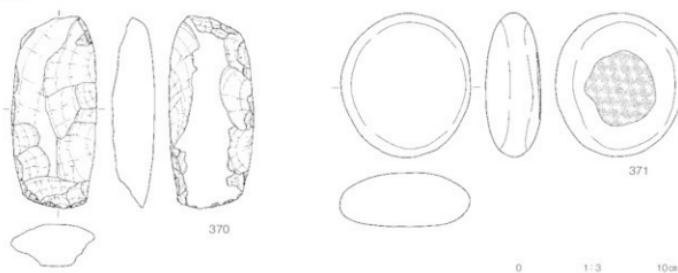
第39図3号住(2) 砥石器



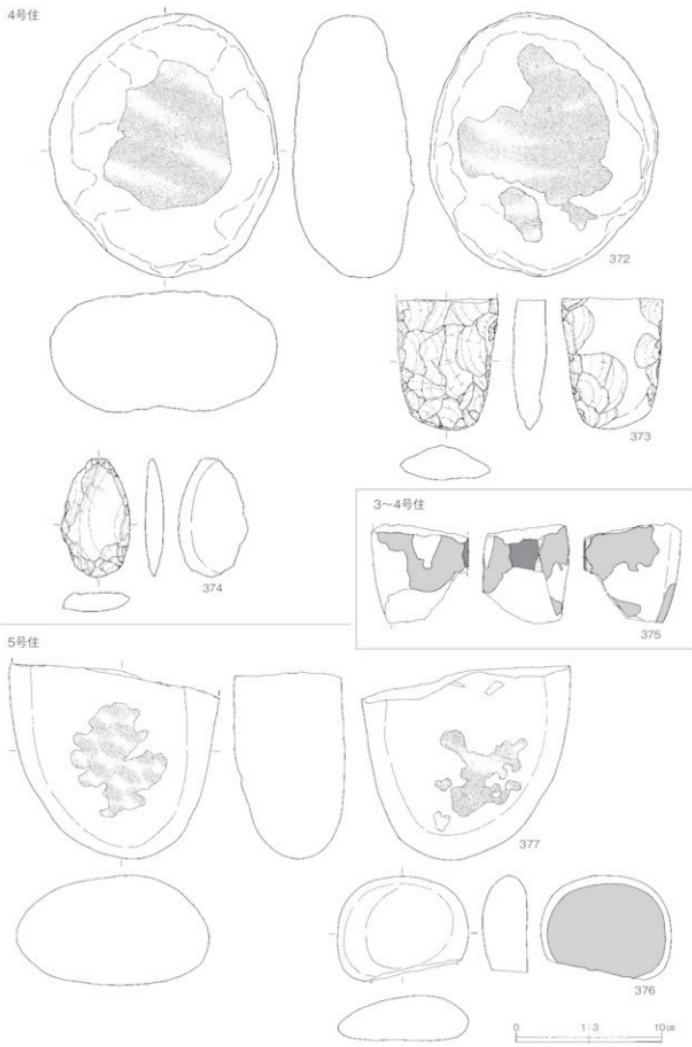
3号住



4号住



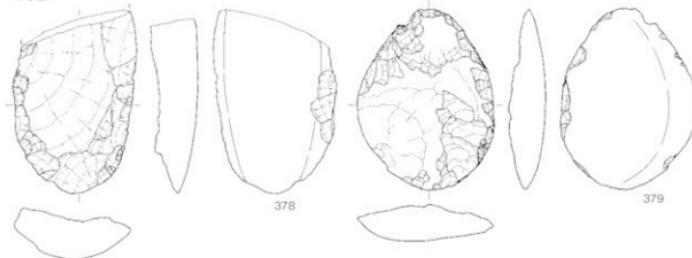
第40図 3号住（3）、4号住（1） 砥石器



第41図 3号住（4）、4号住（2）、5号住（1）礫石器



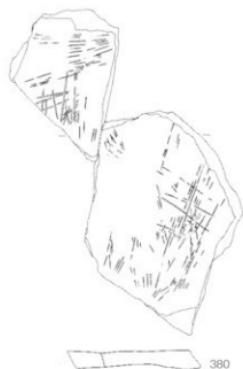
5号住



378

379

6号住



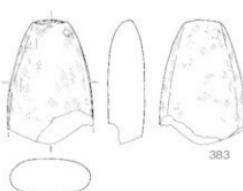
380

381

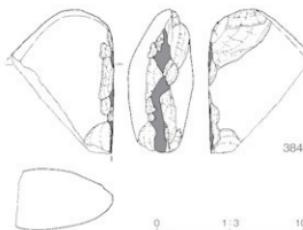
381

382

382



383



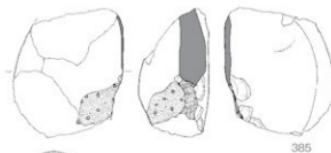
384

0 1:3 10mm

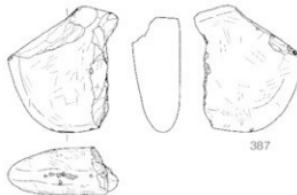
第42図 5号住（2）、6号住（1） 砥石器



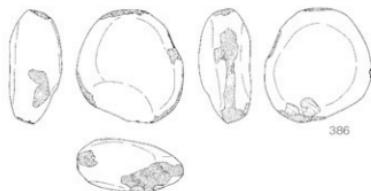
6号住



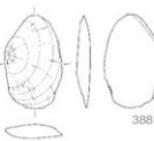
385



387



386



388



389

7号住



390

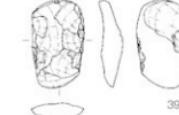


2号土坑



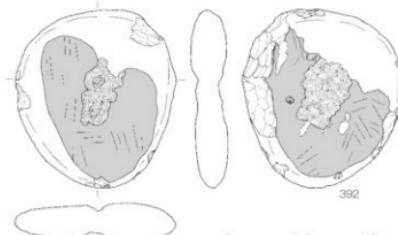
391

5号土坑



393

3号土坑



392

0 1:3 10cm

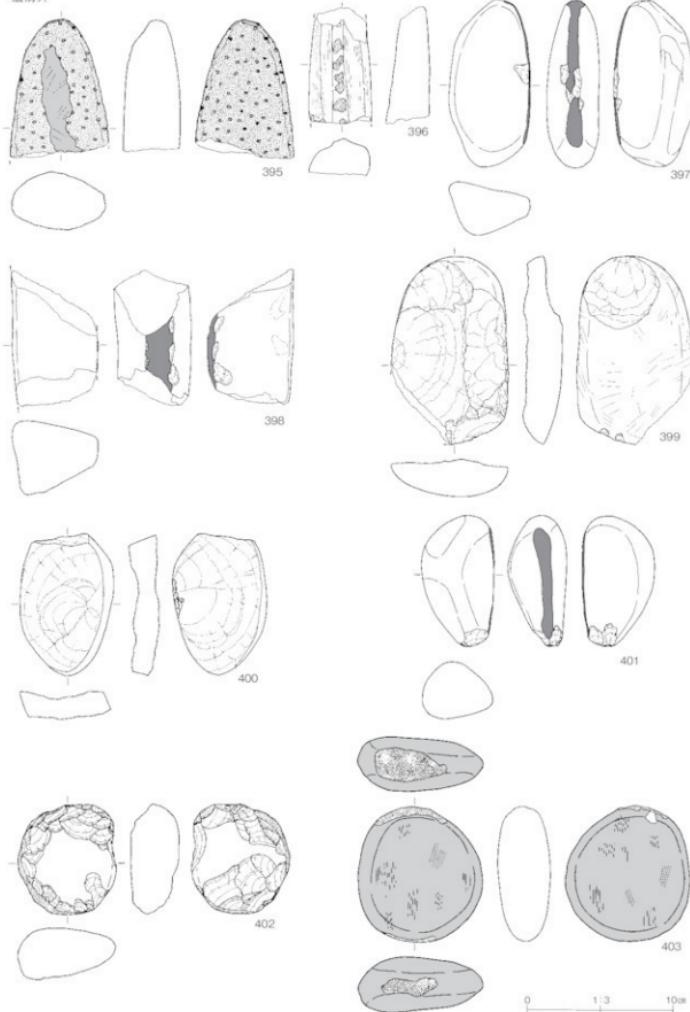
遗模外



394

第43図 6号住(2)、7号住、2・3・5号土坑、遺模外(1) 硬石器

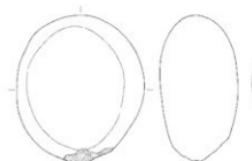
遺構外



第44図 遺構外(2) 碓石器



遺構外



404



405



406



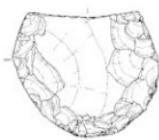
407



408



409

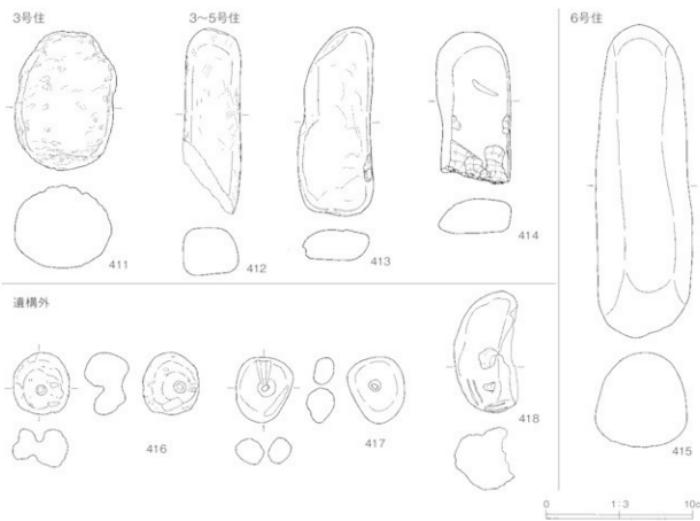


410



0 1:3 10mm

第45図 遺構外（3） 碓石器



第46図 石製品

第2表 土器観察表(1)

地番	出土地点	層位	形態	保存状態	口径・口唇	支錠など	内面	破損 箇所	厚さ/mm	断面	新旧	備考	
1	1号位	埋土少	深鉢	破部	LR 縦沿	ナダ	微傷	6.5~8.0			初期前業?		
2	2号位	埋土少	深鉢	破部	直縁	直縁圓文	ナダ	中量	14.0	直縁前業			
3	2号位	埋土少	深鉢	破部	直縁	直縁各条作第1類(L)	ナダ	中量			初期前業		
4	2号位	埋土少	深鉢	破部	直縁	直縁各条作第1類(L)	ミガキ	少量	11.0		初期前業 天地不明		
5	2号位	埋土少	深鉢	破部	直縁	家体不明	ナダ	中量	7.0~7.5	直縁前業?	後帶? の剥落後有		
6	3号位内側上6	埋土層	深鉢	破部	直縁圓文	ナダ	中量	9.0~11.0			初期前業		
7	3号位	埋土少(中蓋下)	深鉢	破部	直縁	直縁圓文	ナダ	微傷	6.0~7.0	大木2b			
8	3号位	埋土少(下)下段(中 蓋下)	深鉢	破部	直縁	直縁圓文	横ナダ	少量	6.5	大木2b			
9	3号位	埋土少(中蓋下)	深鉢	破部	直縁	直縁圓文	横ナダ	中量	10.0	大木2b			
10	3号位南北北ベルト	埋土少(中蓋下)	深鉢	破部	直縁	直縁回転→S字状直縁圓文	横ナダ	少量	8.0~9.0	大木2b			
11	3号位	埋土少(中蓋下)	深鉢	直縁	直縁	直縁圓文	横ナダ	中量	7.0~7.5	大木2b	U縁端が強く外反		
12	3号位	埋土少(中蓋下)	深鉢	直縁	直縁	直縁回転→S字状直縁圓文	横ナダ	微傷	7.5~8.5	大木2b	U縁端が強く外反		
13	11号位±5号位	埋土少(正方形土 上)	深鉢	口削部 平縁	直縁	直縁圓文	横ナダ	微傷	6.0~8.0	大木2b	190 上段一側外反、大木 2b式と直縁圓文の併存 横部の直縁圓文はやや 剥落(直縁)		
14	3号位±6号位 Q1	埋土少(中蓋下)	深鉢	口削部 平縁 丸み	直縁	S字状直縁圓文	横ナダ	中量	5.5~7.5	大木2b	直縁圓文		
15	3号位	埋土少(中蓋下)	深鉢	直縁	直縁	直縁圓文	ミガキ	少量	7.5~8.0	大木2b			
16	3号位	埋土少(中蓋下)	深鉢	直縁	直縁	直縁圓文	横ナダ	少量	6.0~10.0	大木2b	輪孔孔有、直縁式?		
17	3号位	埋土少(中蓋下)	深鉢	破部	直縁	直縁圓文	横ナダ	微傷	9.0	大木2b			
18	3号位	埋土少(中蓋下)	深鉢	脚一部	直縁	直縁圓文	横ナダ	微傷	9.0~9.5	大木2b			
19	3号位	埋土少(中蓋下)	深鉢	直縁	直縁 丸み(直取り)	直縁圓文	横ナダ	少量	8.0~9.0	白堀	大木2b式と直縁式の 合併		
20	3号位	埋土少(中蓋下)	深鉢	破部	直縁	直縁回転	横ナダ	微傷	7.5~8.0	白堀			
21	3号位小号下、下段(中 蓋下)	深鉢	直縁	直縁	直縁	直縁圓文	直縁各条作 直縁	横ナダ	微傷	8.0~8.5	白堀	U縁端が強く外反	
22	3号位北部	埋土少(中蓋下)	深鉢	口削部 平縁(直取り)	直縁	S字状直縁圓文	横ナダ	中量	7.0~8.5	大木2b			
23	3号位南北北ベルト	埋土少(中蓋下)	深鉢	直縁	直縁 丸み	直縁圓文	横ナダ	中量	7.0~7.5	大木2a			
24	3号位	埋土少(中蓋下)	深鉢	破部	直縁	直縁圓文	横ナダ	中量	7.0~8.0	大木1			
25	3号位	埋土少(中蓋下)	深鉢	破部	直縁	直縁圓文?	横ナダ	多量	9.0~10.0		初期前業		
26	3号位東部	埋土少(中蓋下)	深鉢	直縁	直縁	直縁圓文	横ナダ	少量	6.5~7.5	大木1			
27	3号位	埋土少(中蓋下)	深鉢	直縁	直縁	直縁圓文	横ナダ	少量	6.5~7.5	大木1			
28	3号位	埋土少(中蓋下)	深鉢	直縁	直縁	直縁ループ+L型 構造	横ナダ	多量	7.5	大木1			
29	3号位	埋土少(中蓋下)	深鉢	直縁	直縁	直縁ループ+L型 構造	横ナダ	少量	6.5~7.5	大木1			
30	3号位	埋土少(中蓋下)	深鉢	直縁	直縁	付加条(LH+I)	横ナダ	少量	5.0~5.5		初期前業?		
31	3号位	埋土少(中蓋下)	深鉢	直縁	直縁 平縁	付加条(LH+I) 直縁	横ナダ	微傷	6.5		初期前業		
32	3号位	埋土少	深鉢	破部	直縁	付加条(LH+I+e)	横ナダ	少量	6.5~7.0		初期前業		
33	3号位	埋土少(中蓋下)	深鉢	直縁	直縁	付加条(LH+I+e) 破部、口縁 直縁:口縁の折れ目	横ナダ	微傷	5.5~6.0		白堀?	直縁式?	
34	3号位	埋土少	深鉢	脚一部	直縁	付加条(LH+I+e) 破部	横ナダ	少量	6.0		初期前業		
35	3号位南北北ベルト	埋土少(小割合7)	深鉢	破部	直縁	直縁各条作第1類直縁	ナダ	少量	7.5~8.0		初期前業		
36	3号位	埋土上部	深鉢	破部	直縁	直縁各条作第1類(LR)	横ナダ	少量	6.0		初期前業		
37	3号位	埋土上部	深鉢	破部	直縁	直縁各条作第1A類直縁	横ナダ	少量	5.0~7.0		初期前業		
38	3号位東西北ベルト	埋土少(中蓋下)	深鉢	破部	直縁	0段或多条LRの直縁	横ナダ	少量	8.0~10.0		直縁は織縫?		
39	3号位東西北ベルト	埋土少(中蓋下)	深鉢	破部	直縁	0段或多条LR 破部	横ナダ	少量	8.5~11.0		直縁は織縫?		
40	3号位	埋土上部	深鉢	破部	直縁	直縁	横ナダ	無し	8.0~9.0	白堀? 大 木2b	19~59、87、101~ 120、122~128、130~141 直縁:直縁各条式?		
41	3号位北西端	埋土少(中蓋下)	深鉢	破部	直縁	直縁	横ナダ	中量	9.5		初期前業		
42	3号位	埋土上部	深鉢	直縁	直縁	RL 傾倒+直縁回転	横ナダ	少量	7.5~9.0		初期前業 織縫花有		
43	3号位北西端	埋土少(中蓋下)	深鉢	直縁	直縁	直縁圓文? 0段或多条LR 破部	横ナダ	多量	7.5		U縁端が強く外反		
44	3号位東部	埋土少(中蓋下)	深鉢	直縁	直縁	RL 傾倒	横ナダ	少量	6.0~7.0		初期前業		
45	3号位	埋土少(中蓋下)	深鉢	直縁	直縁	RL 傾倒	横ナダ	少量	7.0~7.5	大木1	直縁は織縫?		
46	3号位北西端	埋土少(中蓋下)	深鉢	破部	直縁	0段或多条LR 破部	横ナダ	少量	105~110		直縁回転		
47	3号位東部	埋土少(中蓋下)	深鉢	破部	直縁	LR 傾倒	横ナダ	少量	6.0~6.5		直縁式?		
48	3号位柱穴6号	埋土少	深鉢	破部	直縁	0段或多条LR 破部	横ナダ	少量	7.5~8.0		初期前業		
49	11号位±2号 C N c9 柱穴	埋土少(中蓋下) 柱穴	深鉢	脚一部	直縁	RL 傾倒?	横ナダ	少量	8.0~10.0	白堀? 大 木2b	10~59、87~101~ 120、122~128、130~141 直縁:直縁各条式?		
50	11号位±2号 C N c9 柱穴	埋土少(中蓋下) 柱穴	深鉢	破部	直縁	RL 傾倒?	横ナダ	少量	9.0~10.0		直縁前業	ナダ上±7直縁	



第3表 土器観察表(2)

規番	出土地点	層位	形態	既存記述	L1-L2管	支錠など	内面	破損 有無	厚さ/mm	前時代	参考
51	3号位	埋土中	深鉢	口縁部 平縫、角折	LRLR・複数個 縫跡→粘合 回転式	側ナメ	微傷 6.5~8.0	前期前葉			
52	1・3号位(2・5号位 埋土上)Ⅱ	埋土中	深鉢	口縁部 小底折、丸み	複数回転式?	側ナメ →ナメ	中量 6.0~7.0 大木2a				
53	3号位	埋土中(中腹下)	深鉢	口縁部 小底折、丸み	RL 縫跡	側ナメ	中量 7.0	前期前葉			
54	3号位	埋土中(中腹下)	深鉢	側部	段段多孔 壁破壊	多量 9.0~12.0	前期前葉	表面若しくは丸底と垂 れ足される			
55	3号位	埋土上位	深鉢	側部	LRL・LRL 非対称羽状縫合式 縫跡	ナメ	中量 10.0	前期前葉	内面に付着		
56	3号位	埋土上位	深鉢	側部	LRL・LRL 非対称羽状縫合式 縫跡	側ナメ	少量 8.0~8.5	前期前葉			
57	3号位(南西隅)	埋土中(中腹下)	深鉢	側部	LRL・LRL 非対称羽状縫合式(屏 内向縫)	側ナメ	中量 8.5~9.0	前期前葉			
58	3号位	埋土上位	深鉢	側部	RL・LRL 非対称羽状縫合式	ナメ	少量	内面剥落多			
59	1・3号位(2・Bが付 る)埋土中(中腹下) Ⅱ	埋土中	深鉢	側部	複数回転式、縫跡(上下で 分離し直し式)	側ナメ	微量 9.0~10.0	白堀・木 6.2b 121・228 と同一 形態(斑点なし)			
60	3号位	埋土中(中腹下)	深鉢	側部	複数回転式	側ナメ	微量 7.5~9.0	白堀式?			
61	3号位	埋土上位	深鉢	側部	複数回転式	ナメ	微量 6.0~6.5	前期前葉			
62	1・3号位(2・Cが付 る)埋土中(中腹下) Ⅱ	埋土中	深鉢	側部	複数回転式?	側ナメ	中量 7.0~9.0	前期前葉	62・69と同一形態?		
63	3号位	埋土中(中腹下)	深鉢	側部	複数回転式	側ナメ	中量 7.0~8.0	前期前葉	62・69と同一形態?		
64	3号位	埋土上位	深鉢	口縁部 平縫、丸み	神戸縫式(押立縫合式に屈 曲式)	側ナメ	多量 130~135 上川名2				
65	3号位	埋土上位(中腹上位 上位)	深鉢	側部	側付縫合による小底状式	ナメ	無量 6.0~6.5	大木4			
66	4号位	埋土中	深鉢	口縁部 平縫、角折(直折式)	不整然式	側ナメ	中量 9.5	大木2a			
67	4号位	埋土中	深鉢	側部	RL・縫合	側ナメ	少量 11.0~12.0	前期前葉			
68	4号位 Q2	埋土中	深鉢	側部	複数回転式	側ナメ	少量 7.0	前期前葉			
69	3・4号位(2・Bが付 る)埋土中(中腹下) Ⅱ	埋土中	深鉢	側部	複数回転式?	側ナメ	中量 8.0~8.5	前期前葉	62・63と同一形態?		
70	5号位	埋土中	深鉢	口縁部 平縫、角折(直折式)	LRL・LRL 非対称羽状縫合式	側ナメ	中量 6.5~7.5	前期前葉			
71	5号位(南西ペルト)	埋土中	深鉢	口縁部 平縫、角折	口縫無式、L縫合	側ナメ	多量 6.5~8.5	前期前葉			
72	5号位	埋土中	深鉢	側部	LRL・LRL 非対称羽状縫合式	側ナメ	多量 7.5~8.5	前期前葉	上部に付ける2段構成の 縫合式		
73	5号位(南西ペルト)	埋土中	深鉢	側部	LRL・LRL 非対称羽状縫合式	側ナメ	少量 10.0~14.5	前期前葉	中量のみ2段多		
74	5号位(南西ペルト)	埋土中	深鉢	側部	LRL・LRL 非対称羽状縫合式(筋力均 式)	側ナメ	微量 6.0~8.0	前期前葉			
75	5号位	埋土中	深鉢	側部	RL 縫合	側ナメ	少量 11.0~12.0	前期前葉	大木1式?		
76	5号位	埋土中	深鉢	側部	複数回転式	側ナメ	少量 7.5~8.5	大木1			
77	1・5号位(2・Bが付 る)埋土中(中腹下) Ⅱ	埋土中	深鉢	口縁部 平縫、角折(直折式)	複数回転式	側ナメ	中量 7.0~9.5	大木1			
78	1・3・5号位(2・Bが付 る)埋土中(中腹下) Ⅱ	埋土中	深鉢	口縫無式、口唇面式(口 S字状縫合式)	側付縫合	側ナメ	微量 6.0~7.5	大木2b			
79	3~5号位	埋土中位	深鉢	口縫無式	平縫、丸み	末端ループ式 縫跡	側ナメ	少量 7.5~8.0	大木1		
80	3~5号位	埋土中	深鉢	側部	複数縫合体第1A 縫合部	側ナメ	中量 8.5~10.0	前期前葉			
81	6号位 Q1	埋土中	深鉢	口縁部 平縫、丸み	S字状縫合式	側ナメ	少量 6.0~7.0	大木2b			
82	6号位 A-A'ペルト	2層	深鉢	側部	S字状縫合式	側ナメ	少量 7.0~7.5	大木2b			
83	6号位 Q2	埋土中	深鉢	側部	S字状縫合式	側ナメ	微量 7.5~8.0	大木2b			
84	6号位東部	埋土中(中腹下)	深鉢	側部	S字状縫合式	側ナメ	中量 7.5~9.5	大木2b			
85	6号位	埋土上位	深鉢	側部	多字状縫合式	ナメ	微量 6.0~8.0	大木2b			
86	6号位 A-A'ペルト	1層	深鉢	口縁部 平縫、内側折	口縫尾部に斜A、S字状縫合式	側ナメ	微量 9.0	白堀	大木2b式と白堀式の 共通形		
87	6号位 Q1・A-A' C-B-B'F-F'	1層・埋土中(中 腹下)	深鉢	側部	複数回転式、縫跡(直折式)	側ナメ	微量 8.0~10.0	白堀・大 6.2b 121・218 と同一 形態			
88	6号位 Q2	埋土中	深鉢	口縁部 平縫、角折、LR	口縫部に縫跡の斜み、 LRL・LRL 非対称羽状縫合式	側ナメ	少量 8.0~10.0 大木2a		大木2a式と白堀式の 共通形		
89	6号位東部	埋土中(中腹下)	深鉢	側部	不整然式	側ナメ	少量 6.5~7.5	大木2a	内面縫合には付		
90	6号位	埋土中	深鉢	口縁部 平縫、角折(直折式)	不整然式	側ナメ	中量 13.0~13.5 大木2a				
91	6号位	埋土中(中腹下)	深鉢	側部	不整然式	側ナメ	少量 9.0~9.5 大木2a				
92	6号位(2・A-A') ペルト	1層・埋土中	深鉢	口縁部 平縫、丸み	複数縫合体第1A 縫合部	側ナメ	中量 8.0~9.0	大木2a			
93	6号位	埋土中(中腹下)	深鉢	口縁部 平縫、角折(直折式)	段段多孔 LR・RL 非対称羽状 縫合式	側ナメ	多量 8.5~10.0	前期前葉			
94	6号位	埋土中(中腹下)	深鉢	口縫無式 平縫、内側折	段段多孔 LR・RL 非対称羽状 縫合式	側ナメ	中量 9.5~10.5 大木1		縫合孔2個		
95	6号位 Q1	埋土中	深鉢	口縫無式 平縫、丸み	末端ループ+LR縫合	側ナメ	中量 7.0	大木1			
96	6号位 Q2	埋土中	深鉢	口縫無式 平縫、角折(直折式)	複数回転式	側ナメ	中量 7.0~9.0	大木1			
97	6号位 Q2	埋土中	深鉢	口縫無式	複数回転式	側ナメ	中量 8.0	大木1			
98	6号位	埋土上位	深鉢	口縫無式 平縫、口唇に縫跡	複数回転式	側ナメ	中量 7.0~9.5	大木1			
99	6号位	埋土中(中腹下)	深鉢	側部	複数回転式	側ナメ	中量 7.0~9.5 大木1				
100	6号位 A-A'ペルト	1層	深鉢	口縫無式 平縫、角折(直折式)	複数回転式	側ナメ	中量 9.0~9.5 大木1	早田田6号c			

第4表 土器観察表(3)

地番	出土地点	層位	形態	既存部位	口縁・口唇	支離など	内面	破損 有無	厚さ/mm	新旧期	備考
101	川6号 II-Q2-A-A	1層・廃土空き	深鉢	口縁部	平縁、丸み、山形	口縁端丸め、縫隙回転	側ナメ	少量	9.0~9.5	古期・大 10~14・59~87・ 8.26 121~128と同一個体	
102	6号位 Q2	廃土中	深鉢	口縁部	平縁、丸み	口縁端丸め、縫隙回転	側ナメ	少量	9.0~9.5	古期・大 10~14・59~87・ 8.26 121~128と同一個体 (現点なし)	
103	6号位 Q1	廃土上空	深鉢	口縁部	平縁、角伏(面取り)	口段多条RL→縫隙回転	側ナメ	少量	7.5~8.0	前期前業	
104	6号位 Q1	廃土上空	深鉢	脚部	脚部	RL傾斜	側ナメ	中量	10.0~13.5	前期前業	平面
105	6号位 Q2	廃土中	深鉢	脚部	脚部	縫隙端丸	斜ナメ	中量	7.5~8.0	大木1	下脚回6脚?
106	6号位 Q2	廃土中	深鉢	脚部	脚部	縫隙端丸	側ナメ	少量	9.5	大木1	下脚回6脚?
107	6号位 Q2	廃土中	深鉢	脚部	脚部	縫隙端丸第4脚?	側ナメ	少量	9.5	前期前業	底体不明、要検討
108	6号位 Q2	廃土中	深鉢	脚部	脚部	LR傾斜	側ナメ	中量	6.0~7.0	前期前業	内側付着
109	6号位 Q1	廃土中	深鉢	脚部	脚部	半輪踏全体第1A 縫隙端丸	側ナメ	少量	7.5~9.0	前期前業	116と同一個体
110	6号位 A-B-A'ペルト	2層	深鉢	脚部	脚部	縫隙端丸	側ナメ	中量	8.0~8.5	大木1	
111	6号位 Q2	廃土中	深鉢	脚部	脚部	縫隙端丸	側ナメ	中量	8.0	大木1	
112	6号位 C-C'ペルト	1層	深鉢	脚部	脚部	縫隙端丸?	側ナメ	中量	7.5	大木1	
113	6号位 Q2	廃土中	深鉢	口縁部	平縁	RL-LR非接続引張端丸部位	側ナメ	少量	5.0	前期前業	径2~5mmの埋没人
114	6号位 東部	廃土中(中脚)	深鉢	脚部	脚部	縫隙端丸	側ナメ	中量	7.5~8.0	前期前業	白底式?
115	6号位	廃土中	深鉢	口縁部	平縁	縫隙端丸末(手)・半輪踏全体 5型?	側ナメ	少量	9.0	前期前業	
116	6号位 B-C'跡跡トヨ	上廃土中(2層目)	深鉢	口縁部	平縁、角伏(面取り)	半輪踏全体第1A 縫隙端丸	側ナメ	中量	6.5~8.0	前期前業	109と同一個体
117	6号位	廃土中	深鉢	脚部	脚部	口縁端丸・斜縫隙	側ナメ	少量	6.0~8.5	古期	白底式?
118	6号位	廃土上空	深鉢	口縁部	平縁、脚部圧痕丸	口縁端丸・斜縫隙の別み、RL 傾斜	側ナメ	微量	5.5~7.0	前期前業	
119	6号位	廃土中(中脚前部)	深鉢	脚部	脚部	口段多条RL・LR非接続引張 端丸部位	側ナメ	中量	10.0~10.5	前期前業	
120	6号位	廃土中(小脚前部)	深鉢	脚部	脚部	LR傾斜	ミガキ	少量	9.5~11.5	前期前業	初期天端(瓦礫状)
121	6号位 Q1-2-B-B'跡 B-C-B'跡跡グリフ	廃土中(2層目)-B-C-B'跡跡	深鉢	脚部	脚部	RL傾斜、縫隙回転	側ナメ	微量	7.5~9.0	古期・大 10~14・59~87・ 8.26 121~128と同一個体 (現点なし)	
122	6号位 東部	廃土中(中脚)	深鉢	脚部	脚部	半輪踏全体第5脚	側ナメ	微量	7.5	初期前業	
123	2号位	廃土下空	深鉢	脚部	脚部	縫隙端丸	側ナメ	中量	8.0	大木1	
124	2号土坑	廃土中	深鉢	口縁部	平縁	RL-LR非接続引張端丸(方舟 圓)	側ナメ	微量	3.5~5.0	生後長期	廃土中に砂利多
125	2号土坑	廃土中	深鉢	脚部	脚部	付加条(RL+L)	側ナメ	微量	5.5~6.0	生後長期	廃土中に砂利多
126	2号土坑	廃土中	深鉢	脚部	脚部	付加条(?)+RL	側ナメ	微量	4.5~5.0	生後長期	廃土中に砂利多
127	2号土坑	廃土中	深鉢	脚部	脚部	縫隙端丸	側ナメ	微量	5.5~6.5	生後	廃土中に砂利多、生後 短期
128	JTBトレント1	1~2層	深鉢	口縁部	平縁、角伏	縫隙端帶(壁上に微削片 付)、RL傾斜	側ナメ	微量	7.0~7.5	前期後業	大木7a式あるいは 初期後業大木式
129	JTBトレント1	2層	深鉢	脚部	脚部	付加條壁上に小底状丸	側ナメ	微量	6.0	大木4	
130	JTBトレント1	2層	深鉢	口縁部	平縁	縫隙端丸(RL)	側ナメ	微量	6.5~7.0	大木7b	
131	JTBトレント1	2層	深鉢	脚部	脚部	縫隙端丸?	側ナメ	微量	7.0~8.5	中期後業?	植物茎の回転圧痕?
132	JTBトレント1	2層	深鉢	脚部	脚部	半輪踏?	側ナメ	微量	6.0~9.0	中期後業?	植物茎の回転圧痕?
133	JTB-B-V2-B'グリフ	2層	浅鉢?	口縁部	平縁	平行する筋状付加條	ミガキ	微量	5.0~5.5	大木A	
134	河原(B-V-H2-H3 グリフ?)	II-2-a層	鉢?	口-頭部	口-頭部	口-頭部(縫隙端丸) 壁上に凹の頭部突起、半輪 踏全体第5脚	側ナメ	微量	7.0~7.5	前期後業?	大木7a式あるいは 初期後業大木式
135	河原(B-V-H2-H3 グリフ?)	II-2-a層	鉢?	口-頭部	口-頭部	口-頭部(縫隙端丸) 壁上に凹の頭部突起、半輪 踏全体第5脚	側ナメ	微量	6.0	中期後業	135と同一個体?
136	河原(B-V-H2-H3 グリフ?)	II-2-a層	深鉢	脚部	脚部	付加条( RL+L ) 突起	側ナメ	微量	6.0~6.5	生後中期	
137	河原(B-V-H2-H3 グリフ?)	II-2-a層	鉢	口縁部	小底状、RL	RL傾斜+手元削面+交叉斜 縫隙	側ナメ	微量	6.0~7.0	赤穴	
138	河原(B-V-H2-H3 グリフ?)	II-2-a層	不明	口縁部	平縁	交叉斜縫隙	ミガキ	微量	6.5	赤穴	
139	河原(B-V-H2-H3 グリフ?)	II-2-a層	鉢?	脚部	脚部	付加条(RL)	側ナメ	微量	5.0	生後長期	
140	河原(B-V-H2-H3 グリフ?)	II-2-a層	鉢?	脚部	脚部	付加条(RL)	側ナメ	微量	5.0	生後長期	
141	河原(B-V-H2-H3 グリフ?)	II-2-a層②-Ⅲ- Ⅳ-Ⅴ層	土器器蓋	口-頭部	平縁	縫隙端丸	側ナメ	微量	4.5~5.0	19世紀前 ~中	単発の縫隙端丸では Tozより新時期
142	JTB-B-V2-B'グリフ	2層	單孔器蓋	脚部	脚部	ヘラケツリ	ヘラケツリ 内面	微量	8.0~9.0	平安	
143	JTB-B-V2-B'グリフ	2層(カラソン層 T2)	土器器蓋	脚部	脚部	ヘラケツリ	ヘラケツリ 内面	微量	6.0	平安	
144	B-V-B'グリフ	Ⅲ-Ⅳ層	深鉢	脚部	脚部	縫隙端丸(縫隙端丸に屈 曲)、段落条RL、縫隙端丸	側ナメ	中量	115~125	上川名2	143と同一個体
145	B-V-B'グリフ	Ⅲ-Ⅳ層	深鉢	脚部	脚部	縫隙端丸(縫隙端丸に屈 曲)、段落条RL、縫隙端丸	側ナメ	中量	115~130	上川名2	144と同一個体
146	B-V-B-C-B'Nakグリフ V層	深鉢	脚部	脚部	脚部	口段多条RL・LR非接続引張 端丸部位	側ナメ	中量	110~120	新時期	



第5表 土器観察表(4)

地番	出土地点	層位	形態	既存部屋	L縦・L横	支離など	内面	破損有無	厚厚/mm	新旧時	備考		
147	B N 80-C N 80グリッド	V層	深鉢	側部	神江鏡文、L縦・横鏡文(周縁) 沢瀬 河原鏡文、澤瀬(こじるべ)鏡文(周縁) 澤瀬(こじるべ)鏡文(周縁)	酒落	多量	土川名2					
148	C N 80グリッド	H-V層	深鉢	側部	日吉多多利LR・RL・LR・赤絞束口模 鏡文鏡	酒落	中量	120-125	前期初期				
149	C N 80グリッド	瓦層	深鉢	側部	新井町、神江鏡文による毛ヘア ア式(褐色の毛ヘアチーク)	酒落	中量	土川名2					
150	B N 90-C N 90グリッド	瓦一层	深鉢	側部	別院鏡。日吉多多利RL・赤絞束口模	酒落	中量	115-120	土川名2				
151	C N 80グリッド	2-瓦層	深鉢	側部	神江鏡文、L縦・横鏡文(周縁に 毛ヘア模)	酒落	中量	110-115	土川名2				
152	C N 80グリッド	瓦層	深鉢	側部	日吉多多利RL・LR・赤絞束口模 鏡文鏡	酒落	中量	90-95	前期初期	土川名2式?			
153	①B N 80グリッド ②B N 80-8	瓦層・V層	深鉢	側部	LR(回転方向は斜り)	酒落	少量	130-135	前期初期	板張丸底			
154	B N 80グリッド	H-V層	深鉢	側部	RL・LR・赤絞束口模鏡文鏡 (壁面は0段多量)	酒落	中量	95-120	前期初期				
155	C N 80グリッド	瓦層	深鉢	側部	平縫、刺突文	酒落	中量	99-110	前期初期				
156	C N 80グリッド	瓦層	深鉢	側部	日吉多多利RL・赤絞束口模	酒落	中量	110-120	前期初期				
157	C N 80・H80グリッド	H-V層	深鉢	側部	新井町余作1個(8)・重壓 丸底	酒落	多量	110	前期前半	土川名2式から大木1 式への過渡期			
158	B N 80-H80グリッド	瓦層・上層	深鉢	平縫・角模(面取り)	赤絞束口模	酒落	中量	70-80	大木1				
159	B N 80-H80グリッド	瓦層・中層	深鉢	側部	赤絞束口模	酒落	中量	70-85	大木1				
160	B N 80グリッド	瓦層・中層	深鉢	側部	赤絞束口模	酒落	中量	70-75	大木1				
161	B N 80-H80グリッド	瓦層	深鉢	側部	赤絞束口模	酒落	中量	80-100	大木1				
162	B N 90-C N 90グリッド	瓦一层	深鉢	側部	赤絞束口模	酒落	中量	85-95	大木1				
163	B N 80グリッド	瓦層	深鉢	側部	L井・赤絞束口模鏡文(前方開 闊)	酒落	少量	95-100	前期前半				
164	B N 90-C N 90グリッド	瓦一层	深鉢	側部	L・T赤絞束口模鏡文鏡	酒落	少量	60	前期前半	大木1式?			
165	B-V層-H80グリッド	瓦層	深鉢	側部	平縫	末尾ループ・LR・鏡位	酒落	多量	60-65	大木1			
166	B N 80グリッド	瓦層・上層	深鉢	側部	平縫	末尾ループ・LR・鏡位	酒落	少量	60-70	大木1			
167	B N 80グリッド	瓦層・中层・瓦層	深鉢	側部	平縫・角模(面取り)	末尾ループ・LR・鏡位	酒落	中量	50-80	大木1	L井端部が外に突出		
168	B N 80グリッド	瓦層・上層	深鉢	側部	平縫・角模(面取り)	末尾ループ・RL	酒落	中量	70-90	大木1			
169	B N 90-H80グリッド	瓦層・H-V層	深鉢	側部	平縫・角模(面取り)	末尾ループ・RL・鏡位	酒落	中量	60-70	大木1			
170	B N 80-C N 90グリッド	瓦層	深鉢	側部	平縫	末尾ループ・LR・鏡位	酒落	少量	90-100	大木1			
171	B N 80グリッド	瓦層	深鉢	側部	平縫	國文	酒落	多量	75	大木1	赤絞束口模		
172	B N 80グリッド	瓦層・中层	深鉢	側部	平縫・角模(面取り)	RL・LR・鏡位	酒落	多量	60-70	大木1	赤絞束口模		
173	B N 80グリッド	瓦層・上層	深鉢	側部	平縫	LR・鏡位	酒落	中量	60	大木1			
174	B N 80グリッド	瓦層	深鉢	側部	平縫	丸み	不整然赤文	酒落	中量	75-90	大木2a	輪郭孔有	
175	B N 10グリッド	瓦層・上層	深鉢	側部	平縫・角模(面取り)	1-不整然赤文・側・RL・鏡 位	酒落	中量	80	大木2a			
176	B V 80グリッド	瓦層	深鉢	側部	平縫	1-不整然赤文・側・RL・鏡 位	酒落	少量	55-75	大木2a			
177	B V 80グリッド	瓦層	深鉢	側部	平縫	新井町余作1A種	LR・鏡位	酒落	少量	65	大木2a		
178	C N 80グリッド	瓦層・上層	深鉢	側部	流灰	山形状起泡	不整然赤文	酒落	中量	60-70	大木2a		
179	B N 90-C N 90グリッド	H-V層	深鉢	側部	1-側部	平縫・角模(面取り)	1-不整然赤文・側・RL・ 鏡位(周縁に新井町余作鏡文(新井町 鏡文))	酒落	少量	60-70	大木2a		
180	井トレチナ	瓦層	深鉢	1-側部	平縫	ミガキ	1-不整然赤文・側・LR・鏡 位(新井町余作鏡文鏡)	酒落	中量	70-85	大木2a		
181	小先端子瓦周縁	H-V層	深鉢	側部	流灰	不整然赤文	酒落	中量	70-90	大木2a			
182	B-V層-赤グラット	瓦一层	深鉢	側部	平縫	新井町余作(面取り)	不整然赤文	酒落	少量	90-100	大木2a		
183	C N 80グリッド	瓦層	深鉢	側部	平縫	LR・鏡位	1-不整然赤文・側・鏡位	酒落	中量	110	大木2a		
184	B N 90グリッド	瓦層	深鉢	1-側部	平縫	1-・鏡位・同赤文・側・LR	酒落	中量	65-80	大木2a?			
185	C N 80グリッド	2-瓦層	深鉢	側部	山形状L縦・角模(面取り)	RL(片側端包埋)	酒落	中量	65-90	大木2a			
186	C N 80グリッド	瓦層	深鉢	側部	新井町余作	新井町余作第1A種	酒落	中量	100	大木2a			
187	B N 90-C N 90グリッド	H-V層	深鉢	側部	平縫	8字柱透鏡北文	酒落	中量	95-100	大木2b			
188	C N 80グリッド	瓦層	深鉢	側部	微波状	S字柱透鏡北文(單輪透鏡 体第2體?)	酒落	少量	65-75	大木2b			
189	C N 80グリッド	瓦層	深鉢	側部	平縫	8字柱透鏡北文	酒落	少量	80-90	大木2b			
190	①C N 80グリッド ②B N 90-C N 90グリッド	瓦層・中层・瓦層	深鉢	側部	1-・鏡位	1-・鏡位・同赤文・側・LR	酒落	中量	50-95	大木2b	1と同一個体		
191	B N 80グリッド	瓦層・上層	深鉢	側部	平縫	S字柱透鏡北文	酒落	少量	90-95	大木2b	12m程の確認		
192	B N 80グリッド	瓦層・下層	深鉢	側部	平縫	S字柱透鏡北文	酒落	少量	70-85	大木2b			
193	B N 90-C N 90グリッド	H-V層	深鉢	側部	平縫	S字柱透鏡北文	酒落	中量	95-130	大木2b			

第6表 土器観察表(5)

地番	出土地点	層位	形種	既存記述	口縁・口唇	支錠など	内面	破壊 右側	厚厚/mm	新旧時	備考	
194	C N オグリッド	Ⅲ層	深鉢	側部	5字状横筋丸文	ナメ	無し	8.5	大木2b			
195	16トレンチ	Ⅱ層	深鉢	口縁部 平縁	5字状横筋丸文	ナメ	少量	8.0~8.5	大木2b			
196	C N オグリッド	Ⅳ~V層	深鉢	側部	織耕回転→斜筋回転文	側ナメ	中量	9.0~10.0	大木2b			
197	C N オグリッド	Ⅲ層上段	小口浅鉢	側・底部	側・織耕回転 丸・木葉模	消え多	少量	4.0~5.0	白原・丸			
198	C B-a30 グリッド	Ⅲ層	深鉢	口縁部 平縁、丸み	半輪錠条第1類(Ⅲ)	側ナメ	微量	7.5~10.0	初期前業			
199	C B-b7 グリッド	Ⅲ層	深鉢	口縁部 平縁、ナメ	織耕回転(片矢張処理)	側ナメ	微量	6.5~7.5	大木2b			
200	C N オグリッド	Ⅱ~Ⅲ層	深鉢	口縁部 平縁、斜曳文	織耕回転	側ナメ	少量	7.0	白原・丸 8.2b			
201	B.V.2グリッド	Ⅱ層	深鉢	側部	付加条(?)+C 織笠	ナメ	微量	100	大木2b			
202	B.V.4 Gグリッド	Ⅱ~Ⅲ層	深鉢	口縁部 平縁	12字状横筋丸文、LR-BL 織耕回転(片矢張処理)・織耕回転文	側ナメ	中量	8.5~9.0	白原	大木2a式と白原式の 折衷様相		
203	C N オグリッド	Ⅱ~Ⅲ層(?)Ⅲ層	深鉢	口縁部 平縁、斜曳(面取り)	1.口縁部に斜曳の別み、LR-BL 織耕回転(片矢張処理)・織耕回転文	側ナメ	微量	6.5~9.0	白原			
204	C N-b8 グリッド	Ⅲ層上段	深鉢	口縁部 平縈、丸み	口縁部に斜曳(片矢張)	側ナメ	微量	6.0~8.0	白原			
205	C N オグリッド	Ⅱ~Ⅲ層	深鉢	口縁部 平縈、斜曳(面取り)	1.口縁部に斜曳の別み、LR-BL 織耕回転(片矢張処理)・織耕回転文	側ナメ	微量	6.0~7.5	白原			
206	B.V.2グリッド	Ⅲ層	深鉢	側部	LR 織笠	ナメ	中量	7.0~8.0	初期前業			
207	12.B.B-a9 グリッド	Ⅲ層下部	深鉢	側部	LR 織笠	側ナメ	中量	10.5~11.0	初期前業			
208	C N オグリッド	Ⅲ層	深鉢	口縁部 平縈、山形状横筋	HLR 織笠	側ナメ	中量	6.0~7.0	初期前業			
209	12.B.B-a9 グリッド	Ⅰ~Ⅱ層(?)Ⅱ層	深鉢	口縁部 平縈	LR 織笠?	側ナメ	微量	6.5~8.0	初期前業?	前面諸多		
210	B.V.2グリッド	Ⅱ~Ⅲ層	深鉢	口縁部 平縈、丸み	LR 織笠	側ナメ	中量	4.0~7.0	初期前業	やや薄手		
211	B.V.2グリッド	Ⅲ層上段	深鉢	側部	口段多条 BL 織笠	側ナメ	中量	10.0~11.0	初期前業			
212	B.V.2グリッド	Ⅲ層	深鉢	口縁部 平縈	口縁部に斜曳の別み、LR-BL 織耕回転(片矢張)	側ナメ	微量	8.5~10.0	白原	大木2a式と白原式の 折衷様相		
213	B.V.9~C B-b9 グリッド	Ⅱ~Ⅲ層	深鉢	側部	HLR-LST 織耕回転文横筋	側ナメ	微量	7.0~8.5	初期前業			
214	B.V.9~C-B-b9 グリッド	Ⅱ~Ⅲ層	深鉢	側部	付加条(?)段多条 LR-LH	ナメ	中量	6.5	初期前業			
215	C N-b8 グリッド	Ⅱ~Ⅲ層	深鉢	口縁部 平縈、斜曳(面取り)	LR 織笠・斜筋回転文	側ナメ	微量	7.0~8.0	初期前業	大木2b式?		
216	C N-b8 グリッド	Ⅲ層中段	深鉢	口縁部 平縈、斜曳(面取り)	LR 織笠→斜筋回転文	側ナメ	中量	7.0	初期前業			
217	B.V.8グリッド	Ⅱ層下段	深鉢	口縁部 平縈、丸み	織耕回転	ナメ	中量	7.5~8.5	初期前業	上の柄柱からは大木 2b式が見出		
218	B.V.9~C-B-b9 グリッド	Ⅱ~Ⅲ層	深鉢	口縁部 浅縈	山形状突起	織耕回転	側ナメ	微量	7.0~8.0	初期前業	付2mmの鉛込人	
219	B.V.9~C-B-b9 グリッド	Ⅱ~Ⅲ層	深鉢	口縁部 平縈	付加条(?)LR-E-LH 織笠	側ナメ	微量	6.0	初期前業	付2mmの鉛込人		
220	C N オグリッド	Ⅲ層中段	深鉢	口縁部 平縈、内側斜筋	付加条(?)LR-E-LH 織笠	側ナメ	中量	5.0~6.0	初期前業	一次焼成を受ける 大木2b式?		
221	C N-a7 グリッド	Ⅳ~V層	深鉢	口縁部 平縈	付加条(?)LR-L 織笠	側ナメ	中量	6.5~10.0	初期前業?			
222	C N-a7 グリッド	V層	深鉢	口縁部 平縈、内側斜筋	HLR(片矢張処理) 織笠	消え多	中量	6.5	初期前業	±2~5 mmの疊多量泥		
223	16トレンチ	Ⅱ層	深鉢	口縁部 平縈、短沈縫	付加条(?)LR-LH 穴穿施設	ナメ	中量	7.0~8.5	初期前業			
224	B.B-B-C-B-b9 グリッド	Ⅱ~Ⅲ層	深鉢	口縁部 平縈	沈縫による泥の干チリ	側ナメ	中量	7.0	初期前業			
225	C B-b7 グリッド	Ⅱ層	深鉢	底部	側・單輪錠条第1類(?) 織笠(?)+サヨ	側ナメ	微量	135	初期前業	付2~5 mmの鉛込人		
226	C N-b7 グリッド	Ⅲ層	深鉢	側部	單輪錠条第1類(?)	側ナメ	中量	9.0	初期前業	付2~5 mmの鉛込人		
227	C N-b8 グリッド	Ⅱ層	深鉢	側部	底体不明	ナメ	中量	8.5~9.0	初期前業			
228	16トレンチ	Ⅱ層	深鉢	口縁部 平縈、土ガキ	織目文施設	ナメ	中量	6.0~8.0	初期不明	大木2a?		
229	B.V.8グリッド	Ⅲ層	深鉢	底部	土ガキ	側ナメ	中量	8.0	初期前業	大木2b式?		
230	12.B.B-B-C-B-b9 グリッド	Ⅰ~Ⅱ~Ⅲ層(?)Ⅲ層	深鉢	口~側部 平縈、丸み	口・斜曳(?)付加条(?)LR-E-LH 織笠	土ガキ	微量	7.0	初期前業	内面調査は疑うガキ生 存		
231	B.V.8グリッド	Ⅲ層上位(中間上 位上位)	深鉢	側部	LR 織笠+口文	側ナメ	微量	7.0~8.0	大木3			
232	C N-b7 グリッド	Ⅲ層	深鉢	口縁部 平縈、斜曳(面取り)	丸文、斜筋回転による底模	土ガキ	微量	6.5	大木4	(±1.00cm)のガラス瓶の 底入物多(?) (1.0cm小片?)		
233	B.V.8グリッド	Ⅲ層	深鉢	側部	L(?) 織笠+斜筋回転による底模 土(?) 施設	土ガキ	微量	6.0~6.5	大木4			
234	B.V.9グリッド	Ⅲ層	深鉢	側部	土(?) 斜筋回転+斜筋回 転による底模	側ナメ	微量	6.0	大木4			
235	B.V.9グリッド	Ⅲ層(中間より上 位)	深鉢	口縁部 平縈、斜筋回転	丸文	側ナメ	微量	5.0	大木5			
236	16トレンチ	Ⅱ層	深鉢	口縁部 平縈	丸文、斜筋回転	側ナメ	微量	8.0	大木5	±2~3 cmの鉛込人		
237	12.B.B-B-C-B-b9 グリッド	Ⅰ~Ⅱ~Ⅲ層(?)Ⅲ層 中間上位	深鉢	側部	單輪錠条第5類	側ナメ	微量	7.0~8.0	大木5 <sup>5</sup>	±2.0~4個一個体、初期 後期前業		
238	12.B.B-B-C-B-b9 グリッド	Ⅰ~Ⅱ~Ⅲ層(?)Ⅲ層 上位	深鉢	口~側部 平縈	口縁部に指印回文、織 筋回転	側ナメ	微量	7.5~8.0	大木5 <sup>5</sup>	±2.7~3.5個一個体、丸文 ±1.00cmの内面充てんの 初期前業		



第7表 土器観察表(6)

地番	出土地点	層位	形態	既存記述	L面・D面	支錠など	内面	破損有無	厚さ/mm	新旧	備考
229	1.B 8号カラグリッド 1.B 8号カラグリッド	Ⅲ層～Ⅳ層主層	深鉢	L面側面 微波状	平輪縁条体第1類		粗い指ナード	無し	5.0～5.5	大木7a	前面に付着、口縁の作りは舟底式に近い
240	B.V.9～C.V.10 グリッド	Ⅱ層～Ⅲ層	深鉢	D面側面 微波状	平輪縁条体第1類 (L)・横縫 ・縦縫合溝 (横縫上部頭付 ・足元)		粗ナード	無し	6.0～7.0	初期後業?	
241	1.C.B.10 グリッド 2.B.10 レンチ	Ⅱ層～Ⅲ層	深鉢	D面側面 平底、丸み	口縁に平行する押出し縁 (火文 (L)・内側突起 (足元))	横ナード L面側面	粗ナード L面側面	無し	9.0～10.0	大木7a	
242	16.トレンチ	Ⅲ層	深鉢	L面側面 波状、割り当し	平行沈縫、横火文 強い横ナード		粗ナード	無し	5.0～6.5	大木7a	内面に他件は同じ多
243	16.トレンチ	Ⅲ層 (黒)	深鉢	D面側面 平底、ヒガキ	内円、細縫合溝		ヒガキ	無し	5.0～5.5	大木7a	
244	16.トレンチ	Ⅲ層 (黒)	深鉢	D面側面 平底、割り当し	平行沈縫、横火文 強い横ナード		ヒガキ	無し	6.5～7.0	大木7a	
245	C.V.10 グリッド	Ⅱ層	深鉢	側部	微凹縫 (縫合上に斜め付 ・手筋竹付、ボタン状貼付 火文)		横ナード	無し	6.0	大木7a	
246	C.V.10 グリッド	Ⅱ層	深鉢	側部	微凹縫				7.0	中期前段?	植物茎の回転印痕
247	B.V.10 グリッド	Ⅱ層	深鉢	D面側面 平底、丸み	横モザイク・火文、強い横ナード 内円、細縫合溝 (足元)		横ナード L面側面	無し	6.0～8.0	大木7a	
248	B.V.10 グリッド	Ⅱ層	深鉢	D面側面 平底	LR斜縫		横ナード ヒガキ	無し	6.5	中期前段?	
249	B.V.10 グリッド	Ⅱ層	深鉢	D面側面 波状	平行沈縫、横火文、ボタン状 貼付		横ナード	無し	6.5～8.0	大木7a?	
250	C.V.9 グリッド	Ⅱ層 (中間より上)	深鉢	D面側面 突起	微凹縫		ナード	100	中期後業		
251	B.V.9 グリッド	Ⅱ層	深鉢	側部	微凹縫 (火文火→消滅 火文)		ヒガキ	無し	6.0	大木9	
252	C.V.9 グリッド	Ⅱ層 (中間より上)	深鉢	側部	LR斜縫 → 沈縫による微凹 火文 (脚元)		ナード	7.0	大木9		
253	C.V.9 グリッド	Ⅱ層 (中間より上) (2)	深鉢	D面側面 波状、剥皮火文	RL・火文火		横ナード ヒガキ	無し	6.5～7.5	中期前段	
254	18.トレンチ	Ⅱ層～Ⅲ層	深鉢	側部	RL・沈縫		ヒガキ	無し	3.0～4.0	中期前段	
255	C.V.9 グリッド	Ⅱ層	深鉢	(口上部) 側部	RL・三火文		横ナード	4.0	大洞B		
256	B.V.9 グリッド	Ⅱ層	深鉢	側部	RL・横縫 → 沈縫による連弧 火文		ナード	6.0	後生中期	初期式跡?	
257	C.V.9 グリッド	Ⅱ層	深鉢	側部	RL斜縫		横ナード 縫合直角	無し	5.5～5.8	後生前期 中期	粘土中に金環母
258	B.V.9 グリッド	Ⅱ層 (2)	深鉢	側部	RL斜縫		ヒガキ	無し	4.0	穴穴	穴形不明、費材証
259	1.B 8号カラグリッド 3.3号カラグリッド	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ層主層土 上段砂質土	深鉢	L面側面 平底、沈縫	口火文 (火)・平行沈縫 脚 LR斜縫		横ナード ヒガキ	無し	5.0	後生前段	260・261・262と同一 組合 (複点無)
260	B.V.9 グリッド	Ⅱ層	深鉢	L面側面 平底、小突起、丸み	口火文 (火)・平行沈縫 脚 LR斜縫		ヒガキ	無し	4.0～5.0	後生前段	260・261・262と同一 組合 (複点無)
261	B.V.9 グリッド	Ⅱ層	深鉢	側部	LR斜縫・斜縫		ヒガキ	無し	5.0～9.0	後生前段	260・261・262と同一 組合 (複点無)
262	B.V.9 グリッド	Ⅱ層	深鉢	L面側面 平底、沈縫	口火文 (火)・脚・平行沈縫 (火 火文)		ヒガキ	無し	4.0～4.5	後生前段	260・261・262と同一 組合 (複点無)
263	B.V.9 グリッド	Ⅱ層 (上段)	縫	D面側面 微波状、口唇部直 角	口縫合 (火)・平行沈縫 脚 RL斜縫		ヒガキ	無し	5.0	後生?	268と同一個体
264	小糸森地区東側	Ⅲ層	深鉢	D面側面 平底	口縫合火文、LR斜縫		ナード	4.0～5.0	後生後期	内面に少量付着	
265	18.トレンチ	Ⅱ層	深鉢	側部	LR斜縫		ナード	5.0～6.0	後生後期		
266	18.トレンチ	Ⅱ層	深鉢	側部	縫片縫に火文 (RL)		ナード	5.0	後生後期		
267	B.V.9 グリッド	Ⅱ層	縫	D面側面 小突起	口縫合火文 (火)・平行沈縫 ・脚・斜縫		横ナード	無し	5.0	後生?	268と同一個体
268	B.V.9～C.V.10 グリッド	Ⅱ層	縫	側部	平輪縁条体第1類 (火) 横縫		横ナード	無し	4.5～5.5	後生?	267と同一個体
269	20.トレンチ	Ⅱ層	縫?	側部	付加縫 (RL)		縫? ヒ ガキ	無し	5.0～6.0	後生後期	土の移動から古式上 古式下の変遷?
270	B.V.9 グリッド	Ⅱ層 (上段)	台付縫	報縫	LR斜縫、横付沈縫		ヒガキ	4.0	後期中葉		
271	B.V.9 グリッド	Ⅱ層 (下段)	縫	D面側面 平底	付加縫 (RL-L)		横ナード	無し	5.0～6.0	初期中期	
272	B.V.10 グリッド	Ⅱ層	深鉢	側部	平輪縁条体第1類 (火)		ヒガキ	9.0	初期中期		
273	B.V.9 グリッド	Ⅲ層	想定縫?	D面側面 平底	クロクナード				5.5～10.0	平安	
274	北側区(南側?)	Ⅲ層	深鉢	D面側面 平底、丸み	RL斜縫		横ナード	無し	5.0～6.0	初期前業	
275	北側区(南側?)	Ⅲ層	深鉢	L面側面 平底、ヒガキ	口火文 (火)・脚・平行沈縫 脚 RL斜縫		横ナード ヒガキ	無し	5.5～6.0	初期前業?	
276	北側区(南側?)	Ⅲ層	深鉢	D面側面 流紋?	縫付縫 (縫合に火文剥離?)		横ナード	無し	9.0～11.0	大木7b	D面内腹肥厚
277	北側区(南側?)	Ⅲ層	深鉢	側部	火文剥離? → 沈縫による微凹 火文・脚・火文		横ナード	無し	6.0	大木9	
278	北側区(南側?)	Ⅲ層	深鉢	L面側面	口火文 (火)・脚・粘土粒・脚 丸み?		横ナード	無し	9.5～11.0	初期前業	
279	北側区(南側?)	Ⅲ層	深鉢	D面側面 山形狀口縫	L面側面 (火)・脚・火文 口に複数のモチーフ (縫 縫上部火文・剥離火文)		ヒガキ	無し	9.0～12.0	後業	260と同一個体 (複点 無)
280	北側区(南側?)	Ⅲ層	深鉢	側部	縫付縫に上部火文のモチーフ (縫縫上部火文・剥離火文)		横ナード ヒガキ	無し	9.0～12.0	後業	279と同一個体 (複点 無)



第8表 土製品観察表

番号	器種	出土地点	層位	支様・特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	時期	備考
281	円盤状土製品	沢ノ瀬トントク	Ⅱ層	付脚無 (L×W×H)	4.6	4.2	0.8	15.7	中期前葉	全周打ち欠き
282	円盤状土製品	CNvaグリッド	Ⅴ層	L型	5.6	5.2	1.2	37.5	前期前葉	全周打ち欠き
283	円盤状土製品	CNvaグリッド	ガ-Ⅴ層	L型	3.5	4.4	1.0	22.5	前期前葉	半周打欠き
284	円盤状土製品	BvBaグリッド	ガ-Ⅴ層	不規則布文	4.0	3.6	0.7	11.7	前期前葉	全周打欠き
285	円盤状土製品	BvBaグリッド	基盤上位	LR?	3.0	3.9	0.8	10.2	前期前葉	円形、全周打欠き
286	円盤状土製品	CNvaグリッド	基盤中位	LRL	4.5	4.4	1.0	15.4	前期前葉	正方形底面、全周打欠き
287	円盤状土製品	CNvaグリッド	基盤上位	不規則布文	4.7	3.9	1.0	19.9	前期前葉	半円形、全周打欠き
288	円盤状土製品	北部高森区南側(3)	Ⅱ層	結晶回転文	3.5	3.2	0.9	11.7	中期前葉	全周打欠き
289	円盤状土製品	北部高森区南側(3)	Ⅱ層	LR	3.8	3.4	0.7	8.7	不明	全周打欠き、縞文後期前葉or後生後葉

第9表 石器観察表(1)

番号	器種	出土地点	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	産地	時代	備考
301	石頭	3号住南高ベルト	理上位(中間直下)	2.3	1.7	0.4	1.1	頁岩	北上山地	中生代	平面
302	石點	3号住	理上中	5.9	1.8	0.8	8.0	頁岩	北上山地	中生代	縞型・片刃
303	石點	3号住	理上面	5.4	2.4	0.9	6.1	頁岩	北上山地	中生代	縞型・片刃
304	スクレーパー	3号住	理上中	3.2	3.4	0.9	8.4	頁岩	北上山地	中生代	
305	方持型スクレーパー	3号住 晩J3	理上層	8.0	4.8	1.3	75.5	ダイサイト	東北山脈	中生代白堊紀	
306	方持型スクレーパー	3号住	理中位(中間直下)	(6.2)	5.2	1.7	65.7	頁岩	北上山地	中生代	
307	方持型スクレーパー	3号住南高ベルト	理土中	6.8	4.3	1.8	60.6	細粒閃緑岩	北上山地	中生代白堊紀	
308	方持型スクレーパー	3号住北部	理中	(9.8)	5.6	1.8	105.1	ヒン岩	北上山地	中生代白堊紀	
309	方持型スクレーパー	3号住北部	理土中	5.4	3.5	1.1	27.7	花崗斑岩	北上山地	中生代白堊紀	小形
310	石點	4号住南部	理上中	(4.2)	2.5	0.7	8.2	頁岩	北上山地	中生代	縞型・片刃、身部中央より上火照
311	方持型スクレーパー	4号住	理上中	6.9	4.1	1.4	50.1	頁岩	北上山地	中生代	
312	方持型スクレーパー	4号住	理上中	10.9	6.9	2.1	234.5	細粒閃緑岩	北上山地	中生代白堊紀	
313	方持型スクレーパー	4号住	理上中	(5.0)	4.2	1.3	31.5	花崗斑岩	北上山地	中生代白堊紀	粗品
314	方持型スクレーパー	3号住南高ベルト	理上中	7.6	4.6	1.7	84.7	細粒閃緑岩	北上山地	中生代白堊紀	
315	石頭	3-5号住	理上中	(5.0)	1.3	0.4	1.1	頁岩	北上山地	中生代	平面
316	石頭	3-5号住	理上中	2.6	2.0	0.5	2.0	頁岩	北上山地	中生代	平面
317	石頭	6号住Q1	理上中	(2.4)	1.7	0.4	1.2	頁岩	北上山地	中生代	平面
318	石頭	6号住Q1	理上中	3.2	1.1	0.4	1.2	頁岩	北上山地	中生代	平面・細部の粗状
319	方持型スクレーパー	6号住	理土下位	11.3	7.0	2.7	225.2	ヒン岩	北上山地	中生代白堊紀	
320	方持型スクレーパー	6号住Q1	理上中	8.6	5.8	1.8	114.4	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白堊紀	
321	方持型スクレーパー	6号住Q1	理上中	5.8	3.8	0.9	25.5	ヒン岩	北上山地	中生代白堊紀	小形
322	方持型スクレーパー	2号土坑	理土中	(5.3)	2.9	1.5	36.7	細粒閃緑岩	北上山地	中生代白堊紀	細部の位以下欠損
323	方持型スクレーパー	3号土坑	理土中	5.8	3.8	1.3	38.5	砂岩	東北山脈	中生代白堊紀	
324	石頭	BvBa-CNvaグリッド	V層	2.8	1.4	0.5	1.9	加麻石	不明	不明	平底、石英脈
325	石頭	BvBaグリッド	Ⅲ-Ⅳ層	2.4	1.8	0.5	1.7	頁岩	北上山地	中生代	平面
326	石頭	CNvaグリッド	Ⅲ-Ⅳ層	3.0	2.1	0.4	2.2	頁岩	北上山地	中生代	やや抉り
327	石頭	CNvaグリッド	Ⅲ-Ⅳ層	1.8	1.6	0.4	0.8	頁岩	北上山地	中生代	やや抉り
328	石頭	CNvaグリッド	基盤中位	2.2	1.8	0.4	1.5	頁岩	北上山地	中生代	平面
329	尖頭器	CNvaグリッド	Ⅲ層	6.8	1.5	0.8	7.4	頁岩	北上山地	中生代	
330	石點	BvBaグリッド	Ⅲ-Ⅳ層	4.3	6.3	1.2	22.8	頁岩	北上山地	中生代	橢型・斜刃
331	石點	BvBaグリッド	基盤上位	7.2	2.3	1.1	11.2	細粒岩	北上山地	中生代	縞型・片刃
332	石點	BvBaグリッド	基盤上位	3.9	5.6	1.1	36.8	頁岩	北上山地	中生代	斜型・片刃?
333	石點	CNvaグリッド	ガ-Ⅴ層	5.9	1.8	0.7	5.9	頁岩	北上山地	中生代	縞型・片刃
334	石點	CNvaグリッド	ガ層	5.6	1.8	0.9	6.2	頁岩	北上山地	中生代	縞型・片刃
335	石點	北部高森区南側(3)	Ⅲ層	8.9	3.0	0.9	18.9	頁岩	北上山地	中生代	縞型・片刃
336	スクレーパー	BvBaグリッド	基盤上位	3.7	4.3	1.2	18.0	頁岩	北上山地	中生代	
337	方持型スクレーパー	BvBaグリッド	基盤上位	6.1	4.3	1.3	43.6	頁岩	北上山地	中生代	
338	方持型スクレーパー	BvBaグリッド	基盤上位	8.4	5.9	1.9	139.0	細粒閃緑岩	北上山地	中生代白堊紀	

第10表 石器觀察表(2)

番號No.	器種	出土地点	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	産地	時代	備考
329	方持型スクレーパー	BN谷原リッド	基盤中段	(96)	6.3	21	148.8	砂岩	原地山壁	中生代白亜紀	刀部欠損
340	方持型スクレーパー	BN谷原リッド	Ⅲ-V層	11.3	7.0	23	228.5	細粒閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	
341	方持型スクレーパー	BN谷原リッド	Ⅲ-Ⅳ層	7.5	3.9	18	41.6	細粒花崗岩	北上山地	中生代白亜紀	
342	方持型スクレーパー	BN谷原リッド	Ⅲ-V層	11.0	6.1	23	161.0	細粒閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	
343	方持型スクレーパー	BN谷原リッド	V層	9.4	7.3	20	171.5	砂岩/頁岩(縞状灰質)	北上山地	中生代白亜紀	
344	方持型スクレーパー	BN谷原リッド	Ⅲ-V層	8.4	4.7	20	92.1	砂岩	原地山壁	中生代白亜紀	
345	方持型スクレーパー	CN谷原Ⅲ-Ⅳグリット東西ペルト	Ⅲ-V層	4.9	4.3	14	41.1	細粒花崗岩	北上山地	中生代白亜紀	平面形方基調
346	方持型スクレーパー	CN谷原リッド	Ⅲ層	7.6	4.4	27	110.3	デイサイト	原地山壁	中生代白亜紀	磨斧未成品の可能性有
347	方持型スクレーパー	CN谷原リッド	Ⅲ層中段	6.1	3.5	11	32.5	ヒン岩	北上山地	中生代白亜紀	
348	方持型スクレーパー	CN谷原リッド	Ⅲ層	7.0	4.5	17	64.3	細粒閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	
349	方持型スクレーパー	BV谷原リッド	Ⅲ層	9.3	5.9	21	158.7	細粒閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	
350	方持型スクレーパー	北部渓谷区南端Ⅱ	Ⅲ b 層	15.3	8.3	37	595.5	細粒はんれい岩	北上山地	中生代白亜紀	大型
351	磨削石斧	3号住	埋土上(中腹)下	(6.9)	4.9	27	136.6	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	基部欠損
352	磨削石斧	3号住西端	埋土上~中段	(8.2)	5.1	15	84.2	細粒閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	未成品
353	磨削石斧	3号住東端	埋土上	(3.8)	4.6	0.8	13.7	頁岩	北上山地	中生代	未成品か
354	磨削石斧	3号住	埋土中	13.7	6.1	42	503.5	デイサイト	原地山壁	中生代白亜紀	
355	磨削石斧	3号住	埋土中	14.2	4.8	45	520.5	砂岩	原地山壁	中生代白亜紀	
356	磨削石斧	3号住	埋土中	13.3	6.2	46	507.0	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	
357	磨削石斧	3号住南端	埋土中	(10.6)	7.7	54	607.3	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	
358	磨削石斧	3号住北西部	埋土上~中段	(7.9)	6.8	57	356.3	花崗岩	北上山地	中生代白亜紀	
359	砾石片	3号住堆土3	堆土上	7.1	6.6	49	302.3	花崗岩	北上山地	中生代白亜紀	
360	石頭	3号住	埋土中	(13.6)	(13.1)	36	496.5	砂岩	久慈郡 新代治古郡 野田郡	中生代白亜紀 新生代古生代 三紀	欠品。砾石少
361	石頭	3号住東端	埋土上~中段	(21.4)	(14.1)	104	4180.0	花崗岩	北上山地	中生代白亜紀	レシナ状で両側面に幾枚有 形狀は斧状で片面に自然を残す
362	礫器	3号住	埋土中	12.2	7.6	31	286.5	デイサイト	原地山壁	中生代白亜紀	
363	礫器	3号住	埋土中	8.2	8.9	36	265.5	ヒン岩	北上山地	中生代白亜紀	
364	礫器	3号住東西ペルト	埋土中	9.1	7.3	26	227.7	ヒン岩	北上山地	中生代白亜紀	磨斧未成品か
365	礫器	3号住	埋土中	14.2	8.2	35	415.9	デイサイト	原地山壁	中生代白亜紀	形狀は斧状で片面に自然を残す
366	礫器	3号住	埋土上空(中腹下空)	13.7	8.6	22	258.8	デイサイト	原地山壁	中生代白亜紀	形狀は斧状
367	礫片スクレーパー	3号住	埋土中	8.9	5.8	13	75.4	粗灰岩	北上山地	中生代白亜紀 原地山壁	磨斧未成品か
368	礫片スクレーパー	3号住	埋土中	5.7	5.2	18	62.7	細粒閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	
369	礫片スクレーパー	3号住南北ペルト	埋土中	5.0	6.7	11	34.4	粗灰岩	北上山地	中生代白亜紀 原地山壁	
370	磨削石斧	4号住Q1	埋土中	13.3	5.9	30	292.1	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	
371	磨石	4号住南北	埋土中	9.9	8.9	28	520.3	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	
372	石頭	4号住	埋土中	18.2	15.7	8.4	3428.0	デイサイト	原地山壁	中生代白亜紀	
373	礫器	4号住	埋土中	(9.1)	7.0	24	223.0	安山岩	北上山地	中生代白亜紀	磨斧未成品か
374	礫片スクレーパー	4号住	埋土中	8.2	4.8	14	69.8	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	
375	磨削石斧	3-4号住東西	埋土中	(6.9)	6.7	59	349.9	花崗岩	北上山地	中生代白亜紀	
376	磨石	5号住	埋土中	(7.3)	9.0	31	322.9	細粒閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	
377	砾石	5号住Q1	埋土中	(12.3)	14.4	27	2024.6	デイサイト	原地山壁	中生代白亜紀	
378	礫器	5号住	埋土中	(12.7)	8.5	35	427.0	粗粒はんれい岩	北上山地	中生代白亜紀	磨斧未成品か
379	礫器	5号住Q1	埋土中	12.5	9.4	26	343.2	細粒閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	片面自然面



第11表 石器観察表（3）

番号	器種	出土地点	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	産地	時代	備考
380	板状鏃	⑮号住C-ベルト アーチ	①理土中-② Ⅲ-Ⅳ層	(225)	(160)	13	451.0	頁岩	北上山地	中生代	約15m離れて出土した2 片が複合
381	磨製石斧	6号住A-A'ベルト	I層	(78)	62	37	230.3	花崗隕岩	北上山地	中生代白亜紀	未成品
382	磨製石斧	6号住C-C'ベルト	I層	113	55	26	177.0	細粒閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	未完成品、力特型スケレ イバーの類似品
383	磨製石斧	6号住Q1	理土中	(86)	60	25	259.9	頁岩	北上山地	中生代	刀部欠損
384	磨削器石	6号住A-A'ベルト	I層	(100)	(70)	45	334.4	細粒閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	
385	磨削器石	6号住Q2	理土中	(89)	75	48	381.4	花崗岩	北上山地	中生代白亜紀	
386	敲石	6号住Q2	理土中	79	74	36	285.3	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	
387	敲石片	6号住Q2	理土中	87	76	33	266.5	頁岩	北上山地	中生代	
388	礫片スケレイバー	6号住A-A'ベルト	I層	65	40	10	28.7	細粒花崗岩	北上山地	中生代白亜紀	
389	礫片スケレイバー	6号住A-A'ベルト	I層	51	65	69	32.5	細粒閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	
390	礫石片	7号住	理土中	(52)	86	37	203.6	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	
391	敲石	2号土坑	理土中	63	51	40	173.1	ヒン岩	北上山地	中生代白亜紀	
392	円石	3号土坑	理土中	123	111	27	517.0	閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	両面に凹有
393	礫片スケレイバー	5号土坑	理土中	62	26	16	37.9	デイサイト	尾上山地	中生代白亜紀	
394	磨製石斧	BNガリット Ⅴ層	Ⅲ層	(32)	61	20	47.2	細粒閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	部分のみ残存
395	磨製石斧	CNv9ガリット Ⅴ-Ⅵ層	(96)	68	40	33.5	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	未完成品	
396	磨製石斧	16トレンチ	Ⅲ層	(80)	44	20	142.0	頁岩	北上山地	中生代	未完成品、鋸り切り有
397	磨削器石	BV7ガリット Ⅴ-Ⅵ層	116	56	37	321.0	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀		
398	磨削器石	CNv9ガリット Ⅴ層	(84)	59	54	38.9	花崗隕岩	北上山地	中生代白亜紀		
399	磨石	BNv9ガリット Ⅴ-Ⅵ層	130	81	27	325.2	花崗隕岩	北上山地	中生代白亜紀	打大きめ有	
400	磨石片	CNv9ガリット Ⅴ層	98	65	21	170.0	デイサイト	原地の層	中生代白亜紀	切羽	
401	敲磨器	BNv9ガリット Ⅴ層	90	50	41	227.5	デイサイト	原地の層	中生代白亜紀		
402	敲磨器	BVg9ガリット Ⅴ層	75	67	35	260.1	ヒン岩	北上山地	中生代白亜紀		
403	敲磨器	BNv9ガリット Ⅴ-Ⅵ層	93	86	29	375.7	デイサイト	原地の層	中生代白亜紀		
404	敲石	BNv9ガリット Ⅴ層	101	88	55	666.0	デイサイト	原地の層	中生代白亜紀		
405	敲石	BNv9ガリット Ⅴ層	63	71	31	208.3	流紋岩	北上山地	中生代白亜紀		
406	敲石	CNv8ガリット Ⅴ層	64	52	51	247.1	流紋岩	北上山地	中生代白亜紀		
407	円石	CNv8ガリット Ⅴ-Ⅵ層	93	87	52	565.0	デイサイト	原地の層	中生代白亜紀		
408	礫器	BNv9ガリット Ⅴ-Ⅵ層	118	95	47	620.0	細粒閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	打ち大きめ有る様で磨 斧未成品か	
409	礫器	BNv9ガリット Ⅴ層	(104)	73	27	241.9	花崗隕岩	北上山地	中生代白亜紀	磨斧未成品か	
410	礫器	CNv9ガリット Ⅴ層	87	102	26	329.2	ヒン岩	北上山地	中生代白亜紀	片面自然面、磨斧未成 品か	

第12表 石製品観察表

番号	器種	出土地点	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	産地	時代	備考
411	軽石製石製品	3号住北西部 Ⅲ-Ⅳ層	理土中(中 層)	96	70	58	67.9	軽石	十和田大山	新生代新第四紀	
412	石棒	3-5号住	理土中	(128)	40	33	290.0	ヒン岩	北上山地	中生代白亜紀	
413	石刀	3-5号住	理土中	130	52	21	235.8	ホルンフェルス	北上山地	中生代白亜紀	変形は 中生代白亜紀
414	石刀	3-5号住	理土中	(105)	52	24	218.9	鈎岩	北上山地	中生代	
415	石棒	6号住Q1	理土上段	21.6	66	66	1372.0	ホルンフェルス	北上山地	中生代、変形は 中生代白亜紀	
416	軽石製石製品	BNv8ガリット Ⅴ層	Ⅲ層	43	39	31	9.6	軽石	十和田大山	新生代新第四紀	穿孔有り
417	軽石製石製品	CNv9ガリット Ⅴ層	46	39	19	5.8	軽石	十和田大山	新生代新第四紀	穿孔有り	
418	軽石製石製品	BNv8ガリット Ⅴ-Ⅵ層	85	(44)	43	40.6	軽石	十和田大山	新生代新第四紀	自然に削いた孔と 剥離される。	



## VI 自然科学分析



## 重津部Ⅰ遺跡出土火山灰分析

(株)火山灰考古学研究所

### 1 はじめに

東北地方北部の三陸沿岸域の地層や土壤の中には、十和田、岩手、秋田駒ヶ岳、焼石、鳴子、肘折など東北地方の火山のはか、洞爺、浅間、御岳、三瓶、阿蘇、姶良、鬼界など遠方の火山に由来するテフラ（火山碎屑物碎屑物、いわゆる火山灰）が数多く認められる。とくに、後期更新世以降に降灰したそれらの多くについては、層相や年代さらに岩石記載的特徴がテフラ・カタログ（町田・新井, 1992, 2003, 2011など）に収録されており、考古遺跡などで調査分析を行って年代や層位が明らかに指標テフラを検出することで、地形や地層の形成年代、さらには考古遺物・遺構の層位や年代などに関する情報を得られるようになっていく。

宮古市田老地区に位置する重津部Ⅰ遺跡の発掘調査でも、テフラの可能性のある堆積物が検出されたことから、テフラ分析（テフラ検出分析・テフラ組成分析・火山ガラスの屈折率測定）を行って、テフラ粒子を検出してその岩石記載的特徴を把握し、指標テフラとの同定を行うことで、堆積物の層位や年代を明らかにすることになった。分析対象試料は、発掘調査担当者により採取・送付された、試料1（3号住居址・上位火山灰）と試料2（中央東調査区境・CⅣ h10）の2試料である。

### 2 テフラ検出分析

#### （1）分析試料と分析方法

試料1（3号住居址・上位火山灰）と試料2（中央東調査区境・CⅣ h10）に含まれるテフラ粒子の量や特徴を定性的に明らかにするために、最初に簡易的なテフラ検出分析を実施した。分析の手順は次のとおりである。

- 1) 試料を観察して、高純度部から試料10gを採取。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 恒温乾燥機により80°Cで恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を観察。

#### （2）分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。試料1（3号住居址・上位火山灰）には、白色や無色透明のスポンジ状や繊維束状に発泡した軽石型や分厚い無色透明の中間型、そして淡褐色のバブル型の火山ガラスが多く含まれている。不透明鉱物以外の重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が認められる。

また、試料2（中央東調査区境・CⅣ h10）にも、白色や無色透明のスポンジ状や繊維束状に発泡した軽石型や無色透明の中間型、そして淡褐色のバブル型の火山ガラスが多く含まれている。不透明鉱物以外の重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が認められる。

### 3 テフラ組成分析（火山ガラス比分析・重鉱物組成分析）

#### （1）分析試料と分析方法

試料1（3号住居址・上位火山灰）と試料2（中央東調査区境・C IV h10）に含まれるテフラ粒子の量や特徴を、定量的に明らかにするために、火山ガラスの色調形態別含有率と、軽鉱物および重鉱物の含有率を求める火山ガラス比分析と、重鉱物組成分析（火山ガラス比分析と合わせてテフラ組成分析とする）を実施した。テフラ組成分析の手順は次のとおりである。

- 1) テフラ検出分析済みの試料を対象に、分析箇により、 $>1/4\text{mm}$ 、 $1/4 \sim 1/8\text{mm}$ 、 $1/8 \sim 1/16\text{mm}$ 、 $<1/16\text{mm}$ の粒子に篩別。
- 2) 偏光顕微鏡下で $1/4 \sim 1/8\text{mm}$ の250粒子を観察して、火山ガラスの色調形態別含有率、軽鉱物と重鉱物の含有率をそれぞれ求める（火山ガラス比分析）。
- 3) 偏光顕微鏡下で $1/4 \sim 1/8\text{mm}$ の重鉱物250粒子を観察して、重鉱物組成を明らかにする（重鉱物組成分析）。

#### （2）分析結果

テフラ組成分析の結果をダイヤグラムにして図1に、火山ガラス比分析と重鉱物組成分析の結果の内訳をそれぞれ表2と表3に示す。

試料1（3号住居址・上位火山灰）に含まれる火山ガラスの含有率は15.2%で、含有率が高い順に繊維束状軽石型（6.4%）、スponジ状軽石型（6.0%）、中間型（2.8%）が含まれている。軽鉱物および重鉱物の含有率は、それぞれ72.4%と7.2%である。不透明鉱物以外に含まれる重鉱物は、含有率が高い順に、斜方輝石（46.0%）と單斜輝石（28.4%）である。

試料2（中央東調査区境・C IV h10）に含まれる火山ガラスの含有率は21.2%で、含有率が高い順に繊維束状軽石型（9.6%）、スponジ状軽石型（7.6%）、中間型（4.0%）が含まれている。軽鉱物および重鉱物の含有率は、それぞれ60.4%と10.0%である。不透明鉱物以外に含まれる重鉱物は、含有率が高い順に、斜方輝石（42.8%）と單斜輝石（27.2%）である。

### 4 屈折率測定（火山ガラス・鉱物）

#### （1）測定試料と測定方法

試料1（3号住居址・上位火山灰）と試料2（中央東調査区境・C IV h10）に含まれるテフラと、指標テフラとの同定精度を向上させるために火山ガラス（n）の屈折率測定を行った。測定方法は、温度変化型屈折率法（壇原、1993）で、測定には温度変化型屈折率測定装置を使用した。測定対象は、 $1/8 \sim 1/16\text{mm}$ 粒子中の火山ガラスと、実体顕微鏡を用いて $>1/4\text{mm}$ 粒子から手選した後に軽く粉碎した斜方輝石である。

#### （2）測定結果

屈折率の測定結果を表4に示す。この表には、三陸沿岸域の後期更新世後半以降の代表的な指標テフラの火山ガラスの屈折率特性も合わせて掲載した。なお、屈折率の値の詳細を付表に示した。

試料1（3号住居址・上位火山灰）に含まれる火山ガラス（30粒子）の屈折率（n）は、1.510-



1514である。また、試料2（中央東調査区境・C IV h10）に含まれる火山ガラス（32粒子）の屈折率（n）も、1510-1514である。

## 5 考 察

試料1（3号住居址・上位火山灰）と試料2（中央東調査区境・C IV h10）に含まれるテフラ粒子の多くは、火山ガラスの色調や形態、斜方輝石や單斜輝石に富む両輝石型の重鉱物の組み合わせ、火山ガラスの屈折率特性から、約6,000年前に十和田火山から噴出した十和田中振テフラ（To-Cu、大池ほか、1966、早川1983、町田・新井、1992、2003、2011）に由来すると考えられる。

分析者は現地において試料が採取された堆積物の層相を実見する機会を得ていないが、本遺跡周辺において、To-Cuの一次堆積層が認められる際には、下部が細粒の黄色火山灰層、上部が比較的細粒の灰色火山灰層の組み合わせからなる場合が多い。今回のテフラ同定結果を有効に活かすためには、試料の採取時に現地で得られている試料採取層準の層相に関する情報などと照合して、試料中のTo-Cuの層位および年代の指標としての有効性に関して議論を行う必要がある。

## 6 ま と め

宮古市田老地区の重津部Ⅰ遺跡で採取されたテフラ分析試料2点を対象に、テフラ分析（テフラ検出分析・テフラ組成分析・火山ガラスの屈折率測定）を実施した。その結果、試料中に十和田中振テフラ（To-Cu、約6,000年前）が多く含まれていることが判明した。

## 文献

- 新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロノロジーの基礎的研究、第四紀研究、11、p.254-269。
- 新井房夫（1993）温度一定型屈折率測定法、日本第四紀学会編「第四紀試料分析法2」、東京大学出版会、p.138-149。
- 塙原 雅（1993）温度変化型屈折率測定法、日本第四紀学会編「第四紀研究試料分析法2」、p.149-158。
- 早川由紀夫（1983）十和田中振テフラ層の分布、粒度、組成、年代、火山、28、p.263-273。
- 町田 洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス、東京大学出版会、276p。
- 町田 洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス、東京大学出版会、336p。
- 町田 洋・新井房夫（2011）新編火山灰アトラス（第2刷）、東京大学出版会、336p。
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広（1981）日本海を渡ってきたテフラ、科学、51、p.562-569。
- 大池昭二・中川久夫・七崎 修・松山 力・米倉伸之（1966）馬淵川中・下流沿岸の段丘と火山灰、第四紀研究、5、p.29-35。

表1 テフラ分析結果

試料(採取地点)	軽石・スコリア			火山ガラス			重鉱物 (不透明物質以外)
	量	色調	最大径	量	形態	色調	
試料1(3号住居址・上位火山灰)	***	pm(sp. fb.)	md. bw	白、無色透明、淡褐色	sp. sp.	opx, cpx	
試料2(中央東調査区境・C IV h10)	***	pm(sp. fb.)	md. bw	白、無色透明、淡褐色	sp. sp.	opx, cpx	

\*\*\*\*: とにかく多い、\*\*\*: 多い、\*\*: 中程度、\*: 少ない、bw: バブル型、md: 中間型、pm: 軽石型、sc: スコリア型、sp: スポンジ状、fb: 繊維束状。

oi: カンラン石、opx: 斜方輝石、cpx: 単斜輝石、am: 角閃石、tr: 黒雲母、(): 量が少ないと示す。



表2 火山ガラス比分析結果

試料(採取地点)	火山ガラス						軽鉱物	重鉱物	その他	合計
	bw(c)	bw(gb)	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)				
試料1(3号住居址・上位火山灰)	0	0	0	7	15	16	181	18	13	250
試料2(中央東調査区境・CIVh10)	0	0	0	10	19	24	151	25	21	250

bw: バブル型, md: 中間型, pm: 针石型, sc: スコリア型, cl: 無色透明, gb: 淡褐色, br: 褐色, sp: スポンジ状, fb: 繊維束状, 数字は粒子数.

表3 重鉱物組成分析結果

試料(採取地点)	ol	opx	cpx	am	bi	opa	その他	合計
試料1(3号住居址・上位火山灰)	0	115	71	0	0	61	3	250
試料2(中央東調査区境・CIVh10)	0	107	68	0	0	71	4	250

ol: カンラン石, opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石, am: 角閃石, bi: 黒雲母, opa: 不透明鉱物(黒色で光沢をもつもの).

数字は粒子数.

表4 屈折率測定結果

地点・試料・指標テフラ	火山ガラス		文献
	屈折率(n)	測定点数	
重津部I遺跡・試料1(3号住居址・上位火山灰)	1.510-1.514	30	本報告
重津部I遺跡・試料2(中央東調査区境・CIVh10)	1.510-1.514	32	本報告

三陸沿岸域の指標テフラ(後期更新世以降)

十和田a(To-a, 青森)	1.496-1.508	町田・新井(2011)
十和田a(To-a, 岩手, 秋田)	1.500-1.508	町田・新井(2011)
十和田b(To-b)	1.496-1.508	町田・新井(2011)
十和田中棚(To-Cu, 青森)	1.510-1.514	町田・新井(2011)
十和田中棚(To-Cu, 岩手, 秋田)	1.508-1.512	町田・新井(2011)
十和田南部部(To-Nb)	1.512-1.517	町田・新井(2011)
秋田駒柳沢(Ak-Y)	未詳	町田・新井(2011)
肘折尾花沢(Hz-O)	1.499-1.504	町田・新井(2011)
秋田駒小岩井(Ak-K)	未詳	町田・新井(2011)
十和田八戸(To-H)	1.505-1.509	町田・新井(2011)
浅間板鼻黄色(As-YP)	1.501-1.505	町田・新井(2011)
鳴子潟沼上原(Ni-U)	1.492-1.500	町田・新井(2011)
始良Tn(AT)	1.498-1.501	町田・新井(2011)
十和田大不動(To-Of)	1.505-1.511	町田・新井(2011)
西岩手雪浦・生出(Iw-Y, Od)	1.508-1.508	町田・新井(2011)
鳴子柳沢(Nr-Y)	1.500-1.503	町田・新井(2011)
猿石山形(Yk-Y)	1.501-1.503	町田・新井(2011)
焼石村崎野(Yk-M)	1.503-1.508	町田・新井(2011)
十和田川口(Kw)	未詳	町田・新井(2011)
阿蘇4(Aso-4)	1.506-1.510	町田・新井(2011)
鳴子荷坂(Nr-N)	1.500-1.502	町田・新井(2011)
肘折北原(H-Kth)	1.499-1.502	町田・新井(2011)
三瓶木次(SK)	1.496-1.498	町田・新井(2011)
測路(Toya)	1.494-1.498	町田・新井(2011)

本報告における屈折率の測定は、温度変化型屈折率測定法(塙原, 1993)による。

テフラ・カタログ(町田・新井, 2011)の屈折率測定は、温度一定型屈折率測定法(新井, 1972, 1993)による。

付表1 重津部Ⅰ遺跡・試料1に含まれる火山ガラスの屈折率(n)の内訳

屈折率(n)	粒子数	測定粒子数:30
15000-15009	0	最小値:15102
15010-15019	0	最大値:15141
15020-15029	0	mean:15122
15030-15039	0	median:15120
15040-15049	0	15040-15049
15050-15059	0	15050-15059
15060-15069	0	15060-15069
15070-15079	0	15070-15079
15080-15089	0	15080-15089
15090-15099	0	15090-15099
15100-15109	4	15100-15109
15110-15119	11	15110-15119
15120-15129	6	15120-15129
15130-15139	7	15130-15139
15140-15149	2	15140-15149
15150-15159	0	15150-15159
15160-15169	0	15160-15169
15170-15179	0	15170-15179
15180-15189	0	15180-15189
15190-15199	0	15190-15199
合計	30	

付表2 重津部Ⅰ遺跡・試料2に含まれる火山ガラスの屈折率(n)の内訳

屈折率(n)	粒子数	測定粒子数:32
15000-15009	0	最小値:15104
15010-15019	0	最大値:15151
15020-15029	0	mean:15123
15030-15039	0	median:15123
15040-15049	0	15040-15049
15050-15059	0	15050-15059
15060-15069	0	15060-15069
15070-15079	0	15070-15079
15080-15089	0	15080-15089
15090-15099	0	15090-15099
15100-15109	5	15100-15109
15110-15119	8	15110-15119
15120-15129	8	15120-15129
15130-15139	9	15130-15139
15140-15149	2	15140-15149
15150-15159	0	15150-15159
15160-15169	0	15160-15169
15170-15179	0	15170-15179
15180-15189	0	15180-15189
15190-15199	0	15190-15199
合計	32	

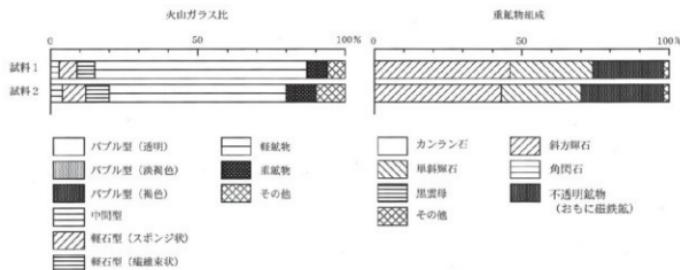


図1 重津部Ⅰ遺跡のテフラ組成ダイヤグラム



## VII 総 括

今回の重津部Ⅰ遺跡の調査は計画道路敷を対象とし、概ね南北250m、東西110mの範囲で、調査面積は8,700m<sup>2</sup>であった。調査地は北・中央・南の3つの調査区に分割した。北・南調査区は、試掘を行ったところ、遺構・遺物とともにほとんど発見されなかつたことから、県教委との協議の結果、本格的な発掘調査は行わなかつた。遺構・遺物のはほとんどは中央調査区で検出された。

### 1 遺 構

発見された遺構は堅穴住居跡7棟、土坑6基、陥し穴状土坑1基、焼土12か所（うち単独のもの5）、柱穴状遺構5基である。上述のとおり、主要な遺構は全て中央調査区で発見され、中でも堅穴住居跡など居住に関係する遺構は同調査区の南向き斜面で発見された。その内容は、縄文時代前期前葉を中心とする遺構・遺物である。その他にも少数ながら弥生時代と平安時代の遺物が検出された。また、南向き斜面の裾には東に下る沢跡があり、その沢跡に流入・堆積した地層からも縄文時代前期を中心とする遺物が出土した。

堅穴住居跡は、1・2号住が南向き斜面上方に散在し、3～7号住は斜面の下方、沢の北岸に密集して見つかった。3～5号住はほぼ同一地点で重複し、古い方から5号住→4号住→3号住の順に変遷することを確認できた。出土遺物も前期前葉の範疇の中で、前期前葉前半大木1式期（5号住）→前期前葉後半大木2b式期（3号住）の変遷が読み取れた。住居の構造は、5号住が不整円形の堅穴の中央に一本の主柱穴を配するもの、4・5号住は大形住居で、長楕円形の堅穴をもち、周壁際に小柱穴を配するものであった。こうした構造の変化は、同時に調査を行った越田松長根Ⅰ遺跡で想定した住居の大形化の趨勢と合致し（※岩手理文2017に第666集として報告書発刊予定）、大形住居出現の時期も從来考えられてきたものに抵触しない（須原拓2007）。6・7号住からも縄文時代前期前葉の遺物が出土した。1・2号住からは詳しく時期を特定できる遺物量は発見されなかつたが、上記住居とはば同じ時期のものとみて大過はないであらう。これらの住居を含む集落の広がりは、調査区内東方には求められず、地形的にみて西側（谷頭の方向）、あるいは1・2号住がある斜面上方に広がっていて、それが削平されたものとみてよいであらう。

土坑・焼土遺構・柱穴状遺構も住居跡が発見された周辺に散在しており、このあたりが集落の縁辺部にあったことを示している。

一方、陥し穴とみられる9号土坑は、集落推定地からは沢を挟んだ対岸の北向き斜面下方に位置しており、この種の遺構が集落外に設けられたことがわかる。

### 2 遺 物

土器101,435g、土製品9点（円盤状土製品9点）、剥片石器301点、礫石器2,408点、石製品17点、チップ・フレークは3,551.1gが出土した。この遺跡の特徴の一つとして、礫石器が非常に多く、土製品と石製品が少ない遺跡であることが分かる。遺構や土器の主体時期は、縄文前期前葉であることから、当該期の特徴として直結する内容と考えられる。以下には遺物の種類毎に概要をまとめてみる。

## (1) 土 器

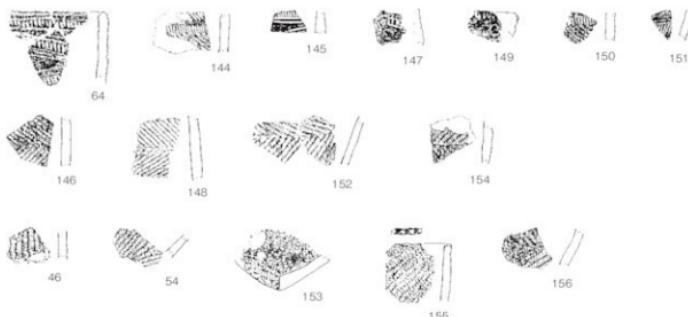
今回の調査では、縄文時代前期初頭～晚期、弥生時代前期～後期、平安時代までの、多岐に亘る時期の土器が出土した。以下には時期毎にまとめてみる。

**[縄文前期初頭]** 縄文前期初頭の土器は、出土量は前期前葉に次ぐが、多量という量ではない。特徴としては、口縁部に縄文原体による押圧縄文（原体の側面圧痕※早蕨状のループ文、渦巻文、平行条線など）や短沈線（刻み列）などの属性を持ち、胴部の地文には0段多条の原体による非結束羽状縄文が整然と横方向に施される（横帯状に施文される）ものに代表される。これらの土器群は從来の土器型式編年に準拠すれば、関東地方の花積下層式に並行し、東北地方南部では上川名2式として周知されているものに比定・相當する。

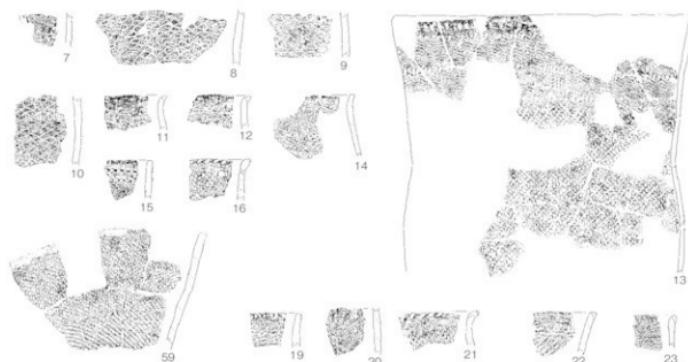
さて、今回の調査で出土した当該期土器の内、代表的なものを集成し第47図上段に示した。比較資料として、県内の良好事例である住田町小松I遺跡20号住、24号住、26・52号住、27号住出土土器や、宮古市千鶴遺跡第17号堅穴住居跡出土土器を第48～50図に示した。3遺跡の共通点として、口縁部文様に押圧縄文や短沈線などが採用され、胴部地文に0段多条の原体を用いた羽状縄文が横方向に回転施文されるものが顕著に認められる。相違点として、小松I遺跡20号住・27号住出土土器には口縁の器形がキャリバー状を呈するものが一定量存在するが、本遺跡や千鶴遺跡17号住出土土器には明確にキャリバー状を呈するもの認め難い（概ね外傾気味・直立気味・僅かに内湾気味などがある。註1）。また、平成27年度に調査を実施した宮古市田老越田松長根I遺跡出土の前期初頭土器においても、同様に口縁の器形が明らかにキャリバー状を呈するものは認められない。つまり、気仙地域（県南部）と本地域の地域差に問わらず文様構成や文様手法には共通点が多いものの、器形の観点では非共通点も存在する可能性を示唆させる。ただ、ここで取り上げた資料では口縁部～底部までの土器全体の器形を窺う資料がほとんど無いことから、資料不足は否めず、今後の検討課題は多い。

なお、東北地方北部の前期初頭の指標として用いられている長七谷地Ⅲ群について若干記述するなら、口縁部に条が横走（0段多条の縄文原体による斜回転）するものや、同じく口縁部に縄の末端を用いて刺突する手法により刺突列を構成するものに代表され、胴部地文は上川名2式と同様に非結束羽状縄文が横帯する。また、あくまで所見であるが、口縁部文様帯を意識・形成し胴部の文様帯とは明確に区分しているものと、口縁部～胴部まで同一の地文のみを施文するものがある。すなわち、本遺跡で出土している土器は、口縁部文様帯に施文される文様や文様の施文手法からは長七谷Ⅲ群土器に相当するものを見いだせないが、胴部への地文（0段多条の原体により非結束羽状縄文が横帯に巡る）は共通性が高く、必然的に胴部のみの破片資料では両者を区別することは難しいと捉えられよう。また、断定できる内容ではないが、筆者の知見の範囲で言及すると、長七谷Ⅲ群土器に口縁部がキャリバー状を呈するものは認め難い。

**[縄文前期前葉]** 前期前葉は今回の調査では最も多い出土量を得られた。遺構単位では、3号住が良好資料を提供した。この3号住からは、大木2b式の他に白座式（※S字状連鎖沈文と口縁端部の斜位の刻みが、同一個体に共存してみられるものも複数ある）が主体的に出土している（※大木2b式より古い土器も若干混じることを付記しておく）。第47図下段に代表的なものを集成した。層位的には、遺構本来の帰属時期より古い土器も出土していると捉えられるが、大木2b式より新しい時期の土器（大木3式など）が含まれない（認め難い）。この内容は重要で、前期前葉後半を中心とした土器群と判断される。また、埋土上位にTo-Cu テフラの堆積が認められ、テフラ分析からも To-Cu テ

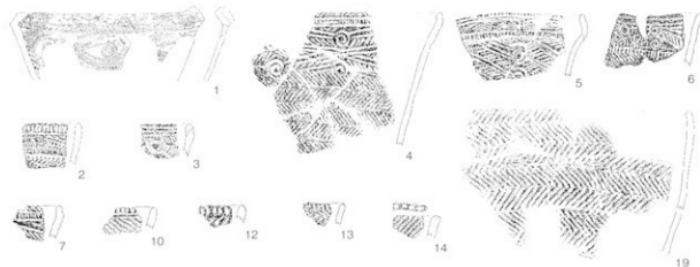


縄文前期初頭土器集成図（上川名2式期）

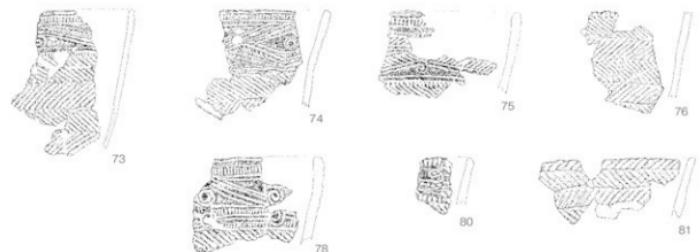


3号住出土土器集成図（大木2-b式・白座式）

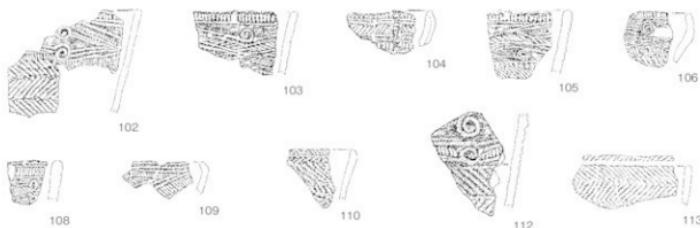
第47図 重津部I遺跡出土縄文前期土器



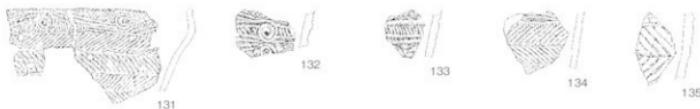
小松I遺跡20号住居跡出土土器



小松I遺跡24号住居跡出土土器

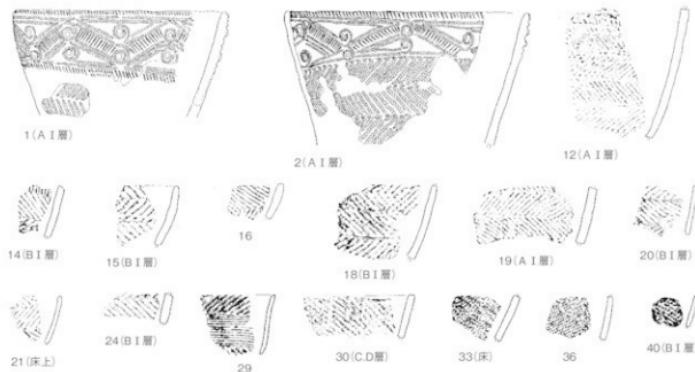


小松I遺跡26・52号住居跡出土土器



小松I遺跡27号住居跡出土土器

第48図 小松I遺跡20号住居跡、24号住居跡、26・52号住居跡、27号住居跡出土土器



第49図 千鶴遺跡第17号竪穴住居跡出土土器

ラである裏付けを得られた。状況から To-Cu テフラ降下以前の住居と判断される。このことから、この3号住出土土器は同テフラ降下期より古い土器群である可能性が高い。参考までに、3号住の下位から検出したのが4号住で、さらにその下位に5号住があり、新旧関係を整理すると古い方から5号住→4号住→3号住の順になる。3号住の出土土器は上記のとおり大木2b式を中心と判断され、尚且つ白底式が共伴する。4号住は、No.66の大木2a式、No.67の大木1式?、No.68・69の組紐を施文する上器（大木2b式か）などが出土した。5号住は、組縄縄文を施文する上器や羽状縄文（結束、非結束の両方あり）などが出土し、あるいは大木1式と大木2a式の中間時期を担う土器群である可能性もある。大木1式と捉えたのは、胎土中に纖維を含む、原体が環付き末端ループを施文するものを基準とする土器群であるが、それらと共に一定量以上組縄縄文を施文する土器が出土する。このことから、これら組縄縄文土器も大木1式期に帰属する可能性が高いと調査判断される。

【縄文前期中～後葉】大木3～5式と捉えられるもので、少量の出土であったことから、認知したものは全て掲載した。掲載した中では、No.65・231・235は To-Cu テフラより上位層で出土していることから、同テフラの降下時期より新しいと判断される。

【縄文中期初頭～前葉】大木7a式は、沢跡や中央調査区を中心に少量の出土があった。大木7a式の前後型式を摸索すると、大木6式は認め難く、大木7b式は極少数（※No.276）である。

【縄文中期後葉】中央調査区で少量出土した。出土層位は To-Cu テフラより上位層であることから、層位的に矛盾はない。

【縄文後期初頭】中央調査区で少量と、北調査区の急傾斜の縁（観察表の出土地には北調査区南壁と明記）で少量（※250×130 mmのポリ袋で約5袋分）出土した。当該期の遺構検出もなく、また層位的には縄文前期土器が混じることから、位置性を保っている状態には見て取れない。

【縄文晚期】大洞B式と大洞A式が各1点と、晚期中葉～後葉1点が中央調査区で出土した。

【弥生】弥生土器は出土点数は少ないが、前期～後期まで認められる。主体は後期赤穴式である。中



央調査区の沢跡や2号土坑からの出土が主体的である。

【古代】土師器2点と須恵器2点が出土した。全て平安時代と推定される。4点中3点が中央調査区の沢跡出土である。弥生土器の出土地・出土層位とほぼ同様にある。あるいは、沢跡の上流である調査区外西側に遺構が存在するものか。

時期・分類	最大 (mm)	最小 (mm)	最大平均 (mm)	最小平均 (mm)	厚差平均 (mm)	分析点数
上川名2	13.5	9.0	12.0	11.1	0.9	12
前期初頭～前葉	13.5	9.0	12.1	10.5	1.6	4
前期前葉(形式不特定)	14.5	4.0	8.6	7.7	0.9	92
大木1	10.5	5.0	8.1	7.0	1.0	23
大木2a	13.5	5.5	8.8	7.8	1.0	22
大木2b	13.0	5.0	8.7	7.5	1.1	34
白座	10.0	4.0	8.6	7.4	1.2	22
大木3～5	8.0	5.0	6.8	6.4	0.4	13
前期全体	14.5	4.0	8.7	7.7	1.0	222
中期	10.0	5.5	7.8	7.0	0.8	6
大木7a～7b	11.0	5.0	7.7	6.6	1.1	9
大木9	7.0	6.0	6.3	6.3	0.0	3
中期全体	11.0	5.0	7.5	6.7	0.8	18
後期	12.5	3.0	9.4	7.4	2.0	5
晩期	5.5	4.0	4.5	4.3	0.2	3
弥生	9.0	3.5	5.7	5.0	0.7	25

第13表 重津部I遺跡出土土器の厚さ

【土器の厚さ】さて、第13表には今回出土した土器の厚さを時期毎に示した。先に表の項目を説明すると、「最大」は全体で最も厚い数値を示した土器の値、「最小」は全体で最も薄い数値を示した土器の値、「最大平均」は各土器の最大値の平均、「最小平均」は各土器の最小値の平均、「厚差平均」は各土器の最も厚い部分から最も薄い部分を引いた値である。以下には導かれる情報を抽出してみる。

【最大】・【最大平均】・【最小平均】最大値をみると、縄文前期初頭～前葉が13.5mmと厚い土器が存在し、また最大平均値も12.1mmと、厚い土器を制作する傾向が看取される。縄文前期前葉は「最大平均」や「最小平均」をみると通り前期初頭に比べて薄い作りの土器が主体であることが分かる。

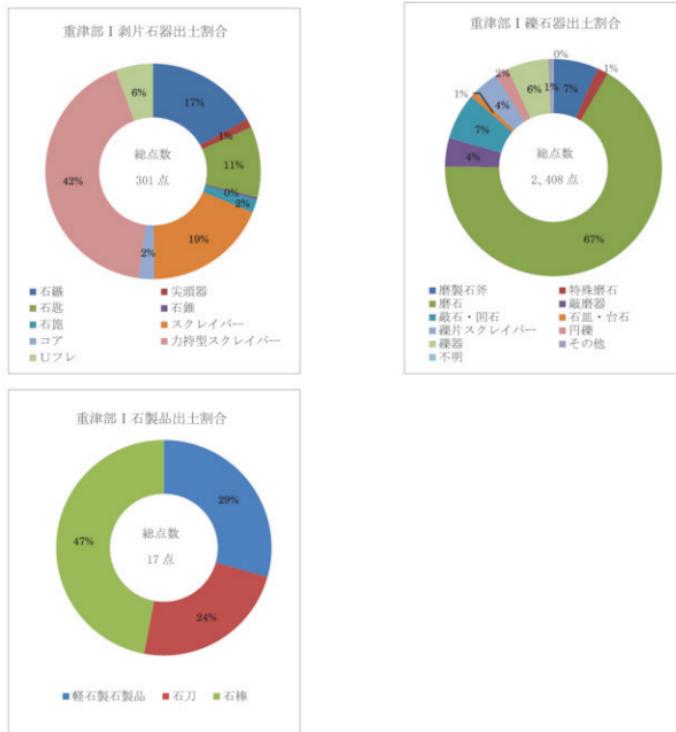
【最小】縄文晩期や弥生が薄い作りが多いことが分かる。

【厚差平均】縄文前期や縄文後期は10mm前後と高い値を示すが、大木9式や縄文晩期はほぼ均等の厚さに仕上げられていることが窺える。

【小結】今回の調査で出土した各時期の土器の厚さの計測値を分析することで、概ね各時期の傾向は捉えられたと考えられる。厚い土器は縄文前期初頭に、薄い土器は縄文晩期と弥生、均一気味の厚さが大木9式に多い結果を導かれた。上記の結果は、今までの土器観察経験からの“印象”や“感覚”と矛盾しない、妥当な結果が分析値も示していると考えている。ただ、分析点数に多・少のバラツキがあることと、いわゆる精製、粗製の違いを加味していないことから、正確な分析データとは言えないかもしれない。今回、土器の厚さを計測しデータ化した目的は、出土土器全般に地文のみが多く、それらにある程度の時期の方向性を示せないものかを意図して観察・計測を行った。他の事例との比較・検証を行うことで、地域性なり時期差なり、さらに多くの情報が抽出可能と考えられる。

## (2) 石器

剥片石器は301点出土した。内訳は、石鏨51点、尖頭器4点、石匙32点、石錐1点、石箒6点、スクレイバー56点、コア7点、力持型スクレイバー127点、Uフレ17点である。礫石器は2,408点出土した。内訳は、磨製石斧162点、特殊磨石39点、磨石1,609点、敲磨器102点、敲石165点、門石2点、砥石1点、石錐1点、石皿7点、台石13点、礫器151点、礫片スクレイバー95点、板状礫12点、棒状礫1点、円礫48点、である。石製品は、17点出土した。軽石製石製品5点、石刀4点、石棒8点である。チップ・フレークは3551.1 g出土した。下記には剥片石器、礫石器、石製品の組成を表した。石鏨、スクレイバー、磨石が多いことは、一見すると通常の縄文遺跡とほぼ同じ様相に見て取れるが、剥片石器の42%を占める力持型スクレイバーの割合は特殊な出土状況といえる。



第14表 重津部 I 遺跡出土石器組成表